

---

# ハワイアンソウル

Natary

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハワイアンソウル

### 【Zコード】

Z0992U

### 【作者名】

Natary

### 【あらすじ】

アースが人類の滅亡を決めました。

ショッキングなニュースを窓から飛び込んできた  
妖精に聞かされたジル。

冒険の始まり

## 終わりの始まり

真つ暗な地中深く、真つ赤に燃え上がる太陽のようなエネルギーの塊がぐるぐると回っている。

真つ赤だつた光の巨大な塊は何かを伝えるかのように一瞬真っ白な光を強く放つた。

その瞬間。溶岩に囲まれた部屋で髪をとかしていた妖艶な美女の手がぴたつと止まった。

“ついに・・・”

美女はつぶやいた。

“妖精を集めなくては。テトをここに、ヒイアカ。ヒイアカ”

凜とした声が洞窟をこだました。

ー出会いー

“ふうー。”

山積みの書類を前にジルはうんざりしたようにデスクに座り、タバコに火をつけようとした。

ニューヨークにあるジルのオフィスは広いとは言えず、少し手を触ると書類がなだれ落ちるようにデスクに積まれている。一連の流れがすっかり癖になつていて、火をつけた後、ふと手を止めた。小

さいけれど、保険会社を経営するジルは社長自ら営業、事務処理と奔走し、万年人手不足で、息をつく暇もなかつた。朝から立て続けにクライアントにあつて、ジルはやつとオフィスに戻り、昼前に書類を片付けるところだつた。

“ そうだ、禁煙するつて言つてたんだつたな。 ”

火をつけたばかりのタバコを灰皿に押し付けようとして、

“ うおー。 ”

とのけぞりつた。腰を抜かすほど驚くとはこのことだ。

灰皿の陰には、羽の生えた大きな虫のような影があつた。

“ なんだ？？ ”

驚きながら田をじりすと、親指ほどの大きさのそれは、小さいながらにもきちんと、田鼻口が整い、とてもハンサムな青年だつた。すらりとした足を組み、灰皿の縁に腰掛けている。仕立てのよいスースを着ていて髪はきれいに整えられている。モデルのようだつた。人と違うところといえば、本当に小さいということ。それから、体と同じぐらいはある半透明の美しい羽があることだつた。ジルをにやにやしながら見上げるとその小さな青年は

“ ほんとに見えるんだ。すげーじゃん ”

とつぶやいた。

“ あ。。。しゃべつた。 ”

再びのけぞったジルをちゃかすように青年はすっと飛びたち、ジルのすぐ目の前に降りた。

“あんたプレジデント？？”

“え？？まあ、一応、プレジデントだけど。”

“ふーん。案外すぐ見つかってよかつた。

“あなたは誰？”

“おれ？妖精。知ってる？妖精つて。”

“いや、知つているけど。本当にいると思つてなかつたから”

“ふーん。そうだよね。普通見えないし。あんたプレジデントだから見えんのかな？いや、多分、テキが撒いた光のせいかな。”

“テキ？？光？？”

“いやいや、いいよ。じつのこと。オレはテト。妖精界からきた使者。”

“そつ。人間に伝えなくちゃいけないことがあつてさー。プレジデントっていう人間のリーダーを手分けして回つてんの。”

“プレジデントって。国のリーダーのこと？”

“ そうだよ。皆に言つと大変だからさー。じゃあ、言つからよく聞いてね

アースが人間の増殖を止めました。だから人間は絶滅します“

“ えつ！！”

ジルはあまりのことに判断がつかず固まつた。

“ 意味がわからんないよ。プレジデントつてもしかして大統領？僕は、小さな会社の社長だから、そんなこといきなり、言われても。しかも何？？絶滅つてなに？アースつてなに？”

“ なんだよー。さつきプレジデントつていつたじやん。 ”

“ いや、会社の社長もプレジデントつて言つんだよ。大統領はホワイトハウスにいるんだよ。 ”

“ この会社ホワイトハウスなんたらつて言つてなかつたか？ ”

“ ホワイトハウスインシュランスカンパニー。いやあ。一流を田指すつていう意味でつけたというか。 ”

我ながら大げさな会社の名前をついたものだとジルは少し照れくさそうに言つた。

“ 紛らわしいな。まあ、いいよ。人間の能力なんて大して変わんないから誰に言つてもおんなじだし。ちゃんと伝えたからな。 ”

そのまま、テトは飛び立つとする。

“ ちょっとまって。 ”

必死に手の平をぱちぱちして捕まえようとするジル

“ なんだよ。潰れたらどうすんだよ ”

テトは再びテスクに降りると不機嫌そうにこつた。

“ 説明してくれよ。絶滅ってなに？アースってなに？ ”

“ もう、めんぢくさいな。じゃあ、説明してやるから座れよ。それでさ、コーヒー入れて。甘めでミルクたっぷりね。 ”

ジルは急いでコーヒーを入れると小さなフタにコーヒーを注いで、テトの前に差し出した。

自分は残りのカップを持つと、窓の外に向かって深呼吸を2回すると自分の椅子に腰を下ろした。

“ いいか。 ”

テトは語りだした。

“ アースっていうのは知ってる？ ”

“ アースって地球のこと？ ”

“ そつか、ここから知らないのか。説明大変だな。。。 ”

テトは深いため息をつくと、観念したかのように話だした。

“あのね、地球つていうのは一つの生き物みたいなもんなんだ。  
その心臓をアースつて呼んでるわけ。それで、アースが自分の上に  
住んでる生き物をコントロールしてんだよ。

全部の命をね。そのアースが人間をなくすつて決めちゃったんだよ。

”

“なんで?”

“なんでってや。

自分たちに聞けよ。

アースの上に住んでいる全ての命から嫌われてるんだぞ。

アースはずつと大目に見てきたんだよ。自分を傷つけられても、他の命のバランスを壊しても。

でもさ、ここまで嫌われちゃうとな。アースもかばいきれないんだよ。

大体アースのことや命のバランスについて知らないのって人間ぐらいいだもんな。

それでもかばつてきたのはさ、俺たち妖精のためかな。妖精つてのは、人間の希望が大好物なんだ。

だから人間がいないと、妖精も悲しむ。それがアースは寂しいわけよ。まあ、全部の命のなかで、俺たち妖精だけかな。

人間が必要なのは、あの生き物は人間嫌いだもんな。ろくなことしないしな。”

“ 妖精にとつて必要なんだろ、なんで絶滅なんだよ。 ”

“ うーん。別に妖精はどつちでもいいんだよ。 ”

“ なんでだよー。自分たちだつて困るんだろ。 ”

“ そこがさ、人間と大きな違いなんだよな。アースがバランスを取り戻すなら妖精だつて人間だつていなくたつていいだろ？ ”

“ よくないよ。そんな簡単なことじやないだろ？ ”

“ なに、死ぬのが怖いの？ ”

“ 怖いよ。当たり前だろ。 ”

“ そこが変わつてんだよなあ。人間つて。 ”

“ なんでだよ。妖精は怖くないつていうのか？ ”

“ 怖くないさ、なんで死ぬのが怖いんだよ。あのな、命つてのは皆平等に一つずつなの。 ”

お金持ちだつて貧乏人だつてさ、虫けらだつて、象だつてキリンだつて皆、一つの命をもらつて生まれてくる。そこまではわかる？ ”

“ うん ”

“ よし。そしたら、死ぬのも一回。  
平等なんだよ。

命が生まれる喜びと、死の喜びをもつて俺たちはアースの上に生き  
てるわけ。

命が生まれたら嬉しいだろ？ それと同じように死つてこのも幸せ  
なことなんだよ。 ”

“ なんで死が幸せなんだよ。 ”

“ 家に帰れるからに決まっているだろ？  
生きているときって楽しいか？

つらいこともいっぱいあるだろ？ そういう生きるつていう課程をま  
つとつすると家に帰れるように死つてこのを平等にもらつて生ま  
れてくるんだ。

死つてこのはまだ、家に帰れるつてことなんだよ。

考えてみなよ。死のない世界を。それだけでそつとするだろ？

喜びもあるけどさ、特に人間は生きているとどうかっていえばつ  
らいことが多い。

それがエンドレスで続いてみるよ。

皆気が狂つちまつや。

チーターだつて死があるつてわかるからこそ必死になつて獲物  
を追う。

つらいのは今だけだから耐えられる。それで、命をまつとつしたも  
のは死によつてやつと家に帰れるんだよ。

そりや、よくやつてきたなつていうやつもいれば、なんだよ。帰つ  
てきちやつたのかよつていう扱いのやつもいる。

でもさ、家つていうのはそれでも帰つたら嬉しい場所なわけよ。”

“家つてなんなの？”

“家つて言うのはソウルがいっぱい集まつている最高にハッピーな場所さ。

アースから離れた場所にある。再び生まれるかどうかは、アースの支持で偉大な神、

カネがコントロールしているアースのことも勘のいい人間は神と呼んだりしてゐるな。

でも全体的に理解不足だな。それで、アースが最近、人間は出さないつて決めちゃつたんだよな”

“出さないつて、どうやつて人間は絶滅するんだ？大きな天災でもおきるのか？”

“いや、簡単なことだる。子供が生まれなくなるんだよ。

人間は長い目で物事を見るのが苦手だる。

だから、知らないうちに子供が減つていつて、人間たちが知らないうちに、大人ばかりになつて、やがて老人だけになつて、最後の老人が滅びたら絶滅つてわけ。次の歳は半分生まれないようにするつて言つてた。

半分、次の年は、またその半分。そうやつて遂にはゼロになるんだ。ゼロになるまで数年。

そこで生まれた子供が八十年生きるとして一世紀ぐらいで終わるかな”

“一世紀か。”

明日、明後日の話じゃないとわかつて少し遠い目をするジル

“ほらな、もうオレ死んでるし関係ないって思つただろ？人間つてそういう生き物なんだよな。だから、そういうことだから。”

“ちょっと待つてくれ。どうして知らせるんだよ。もうどうにもできないんだろう？”

“いや、一応、妖精と人間の関係だからさ。ペレが何も知らないまま絶滅していくのはかわいそうだから教えてやれってさ。

アースの怒りが解ければもしかしたら決定が覆るかもしれないだろ。人間がアースの怒りに気づけばだけどな。  
多分無理だろうな。今までだつて散々サインはあつたんだから。アースだつて我慢の限界さ。”

“僕はどうしたら。”

“ふうん。別になにも。なにか出来る力なんてお前にあるの？”

“いや、ない。でも、聞いた以上、なにかしないと。”

“へえ。まじめなんだな。さすがプレジデントだ”

“いや、だから僕はただの会社の社長でプレジデントなんて大層なもんじやないし。”

“だからさ、人間の能力なんて大して変わらないからおんなじなんだって。”

“わかつたよ。アースの怒りを解く方法つてないのか？”

ジルはなんだかすがるよつた気持ちになつて聞いた。

“うーん。あるけどさ。大変なんだよな。。”

“頼む。教えてくれよ”

“ピュアソウルの結晶を集めて玉を作つてさ、アースの心臓に投げ込むんだ。そしたらアースの怒りがやわらいで、世界が静まる”

“ピュアソウルって何？”

“お前、本当に何も知らないんだな。説明に疲れてきたぞ。”

“いや、テト。やっぱこうけどさ、頼むよ。君が希望なんだ”

“希望か”

テトは一息ついてから再び話だした

“うん、まあ食べれない味じゃなかつた。悪くない。お前の希望、なかなかいい味してんな。じゃあ、教えてやる”

“ピュアソウルっていうのはさ、わかりやすく言いつとものす”——く  
きれいな魂を持つて生まれてくる人のことさ。

人間つてのはこのピュアソウルが少ない生き物なんだ。100万人  
に1人ぐらいいしかいない。

そのピュアソウルを見つけだすだる。それでピュアソウルが死ぬと  
き、つまり家に帰るときに恐ろしく純度の高い結晶ができるんだ。  
それが最高の希望になる。”

“聞いたこともない不思議な話だな。”

“そりや、そうだろ。人間の目なんて世の中の十分の一ぐらいしか  
見えてないんだ。世界は見えないものの方が圧倒的に多いんだぞ。”

“そんなもんのかな。で、ピュアソウルっていうのはどうやって  
みつけるのさ”

“感じるんだ。意識を集中して。”

“意識を集中??”

ジルは目を閉じて、意識を集中する努力をしてみた。

“おいおい。そんな簡単にできるかよ。第一、こんな人間が作った  
無機質な建物で感じられるわけないだろ。”

“そうか。わかった。テトに従うよ。僕やってみるから”

簡単に言った自分に少し驚いた。ここまで話を聞くと、ジルは人間  
全滅の危機感より、目の前にいるハンサムな妖精と出会つて世の中

のすべてにわくわくしてきた。

今まで眠っていた少年のような冒険心や、新しい世界への期待が胸を高鳴らせた。

もし、テトの話が本当なら、もつと世界を知りたい、生きている実感が欲しいと思うようになつてきたのだ。

会社の雑務を全部ほうりだして、人類を救う為に旅にでるなんて、誰もが経験できることじやない。

“ふん。しようがないな。試しに付き合つてやるよ。”

テトはジルに対して抱いた好感を隠すようにそういった。  
なかなか素直な人間だ。こういう人間はやっぱり嫌いじゃないんだよな。テトはそう思い始めていた。

“でさ、とりあえずどこ行くの？”

“うーん。そうだな。ペレンとこでもいこつか。あそこ自然がいっぱいあるし、何より火山は大事だろ？”

“ペレつてもしかしてハワイ？ペレつてほんとにいるの？”

“そうだよ。絶世の美人だぜ。”

“火山が大事つて？”

“火山つてのはさ、アースの新陳代謝みたいなもんだからな。あれがドカーンといつて新しい大地が産まれるだろ。”

それでまた命が増える。そうやって地球は呼吸してんだよ。だからアースの意思を感じるには火山の側がいいんだ。

ペレはそこの人つていうか、超一級に美人だからな。アースが側

に置いときたかつたんだろう。あれは命の傑作だ。 ”

“ 女神ペレか。まさか本当にいふとはな。 ”

“ ああ、人間の中にも色々感じることができるやつがいるからな。伝説はあながちうそじやないんだ。でもさ、ペレに好かれないようにはつけないと。ペレは一眼ぼれしやすいんだ。あの女に愛された男はみんな命を失っている。 ”

“ え。 ”

“ ふーん。まあ、お前は大丈夫だ。あいつは彫刻のように完璧な顔が好きなんだ ”

“ 複雑だな。 ”

ジルは早速、従業員を呼び出した。

“ およびですか？社長 ”

“ うん。ちょっとこれからしばらく出張行つてくる ”

“ 出張ですか？どちらに？ ”

“ ハワイだ。 ”

“ ハワイ？実家に戻られるんですか？”家族に緊急事態でも？ ”

“ うん、まあそんなどころだ。 ”

“わかりました。後のこととは任せください。”

“悪いけど頼むね。”

お辞儀をして出て行った従業員の女性はテトが見えないようだつた。

“見えないんだな。”

ジルが不思議そうにテトを見る。

“なあ？世界のほとんどは人間に見えない。”

テトはおかしそうにいった。そして

“なんだお前、ハワイ生まれか？”

と聞いた。どうやらテトもハワイから来たらしい。

“ああ、ずっとハワイで育つたんだ。家族もみんなハワイだ。”

“なんだよ。それでペレって本当にいるのとか本気で言つてゐるのか  
？”

“だつて会つたことないんだ”

“見たことしか信じられないなんて、人間の想像力つて本当に貧困  
だな。”

“ 妖精ってこんなに憎たらしい口をきく生き物だとは意外だよ。 ”

“ 妖精の中でも俺はいじわるなほうなんだ ”

テトがふふっと笑った。

意外にもすんなりと会社を出た後、ジルはつづづく思った。  
休みなんて取ろうと思つたら簡単なことなんだな。

僕がいないと仕事がまわらないなんて、ほとんどのやつが勘違いなのかもしれない。

リーダーがいなくなれば、替わりのやつがリーダーになる。それが  
自然界なんだ。

ハワイ島に降り立つと、真っ青な空に、どこまでも続く「アハ」した溶岩が広がっていた。

赤茶色の溶岩のところどころに白い石が置かれ、メッセージがかかっている。

観光客が残していくものだ。その白い石がなかつたら、まさに不毛地帯のようだ。

草木もほとんど生えてなく、青い空と並しかない。レンタカーをかつとばすと、心地よいからつとした風が一人を包んだ。

ジルは故郷の空気を味わうように大きく深呼吸をする。

ハワイの匂い。帰ってきた。

ジルは実感した。火山特有の植物は葉も花も細い針のようで、人を寄せ付けない雰囲気がある。

“生まれたての大地に囲まれているとエネルギーを感じるよな”

テトが言った。

“生まれたての大地というより死んでしまったようにみえるなあ。”

幼い頃からなんどか訪れたことがあるハワイ島はハワイアンのジルにとつても不思議な場所だつた。

見渡す限り赤茶色の溶岩。何もないようで何かあるような不思議な

場所。

“ そりゃ、死と生は反対なようで限りなく近いものだからな。人間が考えるように世の中のものは直線じゃない。  
らせん状の輪なんだよ。つまり、スタートとゴールは遠いようで実は隣なんだ。 ”

“ なるほどな。言われてみればそうかもしない。螺旋状か。 ”

なんとなく車を走らせていたジルは思い出したように言った。

“ ところで、ペレはどこにいるんだ？ ”

“ 火山の中だよ ”

当然のよつてトトがわらつと言つた。

“ おい。ハワイ島のキラウエア火山は活火山なんだぞ。熱くて困るわけないだろ。 ”

“ そりゃかな。 ”

トトはいたずらっぽく笑つた。

“ オレ妖精だよ。あんまり人間臭い考えでばかり話すなよ。 ”

そういうとトトは長いまづげの田を閉じて、意識を集中しました。

ジルは慌てて道路の脇にレンタカーを止めた。しばらくするとあたりの景色がぐんとゆがみ始める。

ジルはめまいを起こしたように平衡感覚がおかしくなる。テトは相変わらず眼を閉じて何かを念じている。

徐々にゆがみは大きくなり、ジルは目を開けているのがつらくなってきた。周りの景色が溶けていく。

不思議と心地よいぐるぐる回る感覚が襲い、そのままジルは意識を失つた。

ジルは心地の良い眠りの中に居た。ふわふわと体が浮いたように軽い。遠くで何か声が聞こえる。

“おきてくれ”

テトの声でふと目を覚ます。はっとして辺りを見渡すが、しばらく何が起こったのかわからなかつた。

どうやら場所が移動している。車もなくなつている。辺りは“”ついた岩ばかりで洞窟のようだつた。

“あれ、さつきまで車にいたはずなのに。”

“特別な場所に入るにはさ、特別な方法で入り口までトリップするんだ。魂を一瞬肉体から離してさ、分子にまで細かくして、それをもう一度組み立てて。つて説明するの面倒だからさ、テレポーテーションもしたと思つてよ。”

“うん・・・・やうする”

“まあ、あんまりするとお前の寿命が減っちゃうから。今回は特別

な。  
”

“ ちょっとまって、今まで何年減ったんだよ? ”

ジルが驚いたようにテトに聞いた。

“ 気にするなよ、2・3年だから ”

“ 2・3年って・・・ ”

複雑な思いだつた。自分の寿命がそもそもわからないのに、2・3年減つたといわれてもピンとこないが、なんとなく惜しい気もある。

世の中はわからないことだらけだな。

自分に起つたことを想い返してジルは思つた。頭で考えるより、魂で納得すればそれでいい。

理屈は考えないようにしよう。無理やり現実に頭を戻した。

“ さあ、ここからは自分でいかなくちゃ。 ”

テトに促されて、歩きだした。周りは真っ暗なはずなのに、不思議と道は見えて、どんどん歩ける。

歩いている足元のほんの先だけぼわん、ぼわんと光るようではその光はまるで道案内をしてくるようだつた。

“ ペレも待つてるんだ。俺たちを。急いで。あんまり待たせると機嫌が悪い。 ”

この前も人間のささげるフラが手抜きだって、すつじイライラしてたし。

“ そりなんだ。激しい感情の持ち主だって僕たちハワイアンが恐れているのは本当なんだな。 ”

ジルに不安がよぎる。

“ そりだな。ハワイにいる人は意外と勘がいいから。やっぱり都会に住んでいるやつと違つて、アースの鼓動に近いからじゃないか？人間には見えないはずのものを見たりするんだ。俺も何度か目があつて追いかけられた。 ”

テトはそう言つてケラケラ笑つた。

“ ペレがいるってことはここもハワイ島なのか？ ”

“ ペレはハワイ島に住んでいるに決まってる。 ”

テトがそんなことも知らないのか？といった顔で聞いてきたのでジルは少しむつとする。

ジルだってハワイ出身なのだ。ペレが今でも噴火を続けている、世界でもっとも活発な活火山、ハワイ島キラウエア火山のハレマウマウ火口に住んでいることぐらい知つている。

氣性の荒いことで有名で、妖艶な美女としての伝説も多い。

ハワイの人々は何かにつけてペレへ捧げ者をし、火山の機嫌をとつてきた。

そのペレに会うというのだから不安も大きかった。

何度も訪れたことがあるハワイ島といったって、こんな火山の奥地のような場所は初めてで、実際にジルが知っているハワイ島は表面上のほんのわずかだということを思い知らされる。

“捧げ者がないけれど大丈夫かな？豚とか？フムフムヌクヌクアプアアとか”

ジルがテトに聞いた。

ハワイの伝説ではペレの愛した神カマプアアが普段は相当な美男子なのだけれど

一端怒つて本性を出すと八日の恐ろしい豚だとか、最終的にはフムフムヌクヌクアプアアという皮膚の厚い魚になつて海へ逃げたという伝説があつて、

ペレが喜ぶ捧げ者は豚かこの魚だと言われている。

“その変な伝説つて面白いよな。ペレはカマプアアが好きなだけで豚も魚も好きじゃないよ。あの人は美しいものが好きなんだ。”

テトはおかしそうに言つた。

長い長い洞窟を歩くと、やがて突き当たり、岩のドアがあらわれた。人の力ではびくともしないだろうと想像がつく分厚い一枚岩だった。

“ノックしろ。”

テトが言うので、ジルはドンドンとノックをした。手が痛いだけで、

音はほとんど響かない。

“入れ”

中から女の声がする。

“押してみな”

テトがこいつのでぐこいつビデオを押すと、ジルの予想に反して音が動き、ギーギーっと開いた。中はオレンジの光に包まれていてとにかく熱かった。

“うー。熱い。スーツじゃダメだな。さつき、ニコニコークにいたとき、カフェにいた青年がかっこよかつたから真似してみたんだけど、やっぱりハワイはアロハに限るな”

テトはそつと指をぱぱりとすると一瞬でテトの姿はアロハ姿に変わった。

“ざるいな。テト。僕も熱くて死にそうだ。”

サウナにいるような熱風がジルの頬をなでる。長くはいられなかつた。

“ せうか、悪かつた。”

テトはセーフティーブルの頭の上に飛び、指を回つてひじと鳴らした。

するとジルもグレーのスーツからアロハシャツに短パンに替わった。

“ おーつ。すごいなー。 ”

ジルが関心したように言つたあと、まじまじとアロハシャツを見てじつ付け足した。

“ でも、あの、アロハはさ、出来れば青じゃなくてグリーン系が。 ”

ハワイアンだ。アロハにはつるさー。

“ 意外とこだわるんだ。いいけど。 ”

テトが面白そうに言つてもう一度やれりつとした瞬間。

“ なんなのよ。用事があるんじゃないの？ ”

と中から真つ赤なドレスを着た美女が現れた。

意思の強そうな大きな黒い目が不機嫌そうにこちらを睨んでいる。テトが言つたとおり、この世のものとは思えない妖艶さに、ジルは息を呑んだ。コレが女神ペレ。

神といわれるだけあって人間を超えた美しさだ。赤とも茶系ともいえないしなやかな髪が腰までのび、

頭には青々とした葉で編まれた冠をつけていた。長いまつげが色っぽい。吸い込まれそうな黒い瞳の眼光が鋭い。

“ 人の部屋にきて、ぶつぶつ勝手に話してんじやないわよ。溶岩かけるわよ ”

低い深い声でペレがテトに言った。

“悪じわるじ。ここつがアロハの色が気に入らないとか色々いうか  
いわ。”

ペレは、ジルを睨んだ。ジルは身をすくませる。ペレはふと  
頬を緩めると

“ほんと、グリーン系のがこの部屋にマッチするわね”  
と言った。

“なんだよ。ビッチだよ。”

今度はテトがぶつぶつ言しながら、ジルの頭の上でぱちんと指をな  
らした。

其の途端、アロハがグリーンに変わった。

“悪くない。”

ペレとテトが揃ってそうこつた。ジルはさうなく笑つた。  
女神と初対面にしてはくつろいだ雰囲気だ。ジルは意外にもそう思  
つた。

恐ろしいペレの伝説。ビームまでが本当なのだろうか。

“で、何の用?”

“アースが、人間の絶滅を決めたつてことをじこつに伝えに言った  
らなんとかしたいつて”

“あれだけアースに愛されていた人間も、アースの命を縮めてばか  
りじや仕方ないんじやない。

特別扱いもここまでなのよ。恐竜の一の前つて感じね。いなくなつ  
ちやうなら、いい男早く捕まえて楽しまないと。

昔のがいい男いたのよね。最近のはなんだかね。”

といいながらペレはなめるよつてジルを上から下までみた。

“すいません。”

ジルはなぜか謝つてしまつた。

“まあ気にすんな。ペレに愛されて命があつた男は今までいない”

“ひどいこというのね。そういうこと言つから、ペレは怖いとかウ  
ワサが立つんじやないの。悪評広めないでよね。”

ペレがだんだんイラだつてきたので、テトが慌てて話を戻す。

“それで、こいつが、人間の絶滅を何とかしたいつていうから、ピ  
ュアソウルを探してんだ。

ペレはピュアソウル自分の側に呼び寄せてるだろ? ”

“ ピュアソウルなら結構ハワイに呼んだわよ。一人木になっちゃつたけど、まだ何人かいるわ。 ”

“ 木になつたつて? 森に生えてるあの木ですか? ”

ジルは不思議に思つて聞いた。

“ そう、結構昔。まだ人間がこんなにたくさんいなかつたころね。ひどい飢餓が続いて家族が餓死しそうだつた一家の主がね、自分の体をパンの木つていう木に変えて、パンの身を食料にして与えたわけ。

家族はなんとかその実を食べて飢えをしのいだ。その男がピュアソウルだつたな。ピュアソウルは人間のなかでも希少だからね。世界中でも少ししかいないの。ハワイの神々はピュアソウルが好きだからね。

あの駆け引きしない魂が美しいし、魅力的よ。だから自分の側に呼ぶのよ。お気に入りをね。 ”

“ で、そのほかのピュアソウルはどこにいる? ”

“ うーん。私が昔愛したピュアソウルはむかついてオヒアにしちゃつたしな ”

“ オヒアって? ”

“ 来るとき見なかつた? オヒアレフアの木。 ”

“ああ、あの赤い花が付いた木のことか。”

テトがいった。

“ そうそう、あの赤い花がむかつくオヒアの恋人よ。  
せつかく私が一目ぼれして好きって言ったのにアノ男、恋人がいる  
だ、裏切れないだ。私のことふつたのよ。  
誰だと思ってんのよね。女神よ私。

それでもむかついて、オヒアの木にしちゃつたの。  
そしたら、その恋人が泣きまくつてさ。私にむかつて、毎日、彼に  
会わせてくれつて、祈るのよ。

それが耳障りで、たまんなくなつて。そんなに居たいんなら一緒に  
いればつてレフアの花にしてオヒアの木につけたのよ”

その伝説はジルも知つていた。まさか本当の話だとは思つてもみな  
かつた。

“ それって女神ペレの我慢だよな。人の恋路をじやましてさ。  
”  
テトが言つた。

“ 若氣のいたりよ、何百年前の話だと思つてるのよ。だからさ、し  
ばらく自肅して、  
アースの噴火もしないように調整していりしさ、人間の希望も聞い  
てあげてるじやない。文句あるわけ??溶岩かけるわよ。”

ペレがだんだんいらだつてきた。まったく火山のよつに氣性のアッ  
プダウンが激しい人だ。  
微笑んでいるときも、苛立つているときも妖艶な美しさはかわらな  
かつた。

テトが少し慌てて、

“わかったよ。そんなにイライラするなよ。他のピュアソウルは知らないわけ？”

“ふーん。アースが分かりやすいように印つけたからね。

テトが集中すればわかるはずよ。妖精にはわかるように印をつけたつてアースが言ってたし。知らなかつたのテト？”

“ふん。ピュアソウルを探そうと思ったのがこれが始めてだから。ちょっと感じてみる。”

テトが試すようにじっと意識を集中させた。そしてふと隣のジルをみた。

“つて、お前ピュアソウルかよ。”

テトがのけぞつた。ペレがにやつと笑つた。

“連れてきてるのに笑つちゃうわよ。”

“はあ、そうだよな。いくらオレがバカだつて、妖精なんだ。プレジデント探していくて普通の人間を間違えるわけないんだよな。ピュアソウルのエナジーを感じて呼ばれちゃつたわけだ。”

“ぼ、ぼく？ピュアソウルだなんて信じられないな。”

ジルがすっかり驚いて言った。

“ なんで？”

“ だって、普通の家に育つて、普通に大学で、それほどす、ぐくもない会社に就職して、ひょんなことからその会社の社長になつて、なんていうか、地球上の人間の中で希少な人間とはとても思えないんだ。”

“ そつか。そうだな。普通だな。”

“ なんかの間違いじやないかな。”

“ 間違いじやないだうな。お前が普通か。じゃあ、今の状況は普通か？妖精にあつてハワイまできて、女神ペレにあつて、ピュアソウルのエナジー体を作り人類全滅を防ごうとしている。

それのどこが普通なんだ。”

“ いや、それはたまたま。”

“ たまたまな。世の中に偶然なんて本当はないんだぞ。まあ、気にするな。どうせ他のピュアソウルを探さなくちゃいけないんだ。”

“ なんで、僕じやダメなのか？”

“ お前は最後だ。それまで色々やらなくちゃならないし。ピュアソウルはジルを抜かして7人必要だからな。探しに行こうぜ。”

“うん。”

“ とりあえずオアフ島に行け。お前と同じトナジーを感じるやつ  
がいる。”  
テトはそう言った。

“ まあ、頑張りなさい”

ペレはそうこうしてひらひらと手を振ると部屋の中に入つていった。

オアフ島に着くと、ワイキキは人で賑わっていた。

ハワイ島とはまったく違った都市の側面を持つオアフだが、ジルが居たニューヨークとはまったく違い、南国特有のゆったりした雰囲気に包まれている。

そよそよと吹く貿易風がやさしい。あつてもなく、寒くもなくまさに快適な気温のハワイ。

最大の魅力はこの気候だろう。思わずゆつたりと時間を経つのを忘れてしまつ。

“あのさ、とりあえずコーヒーな。それにしてもこのスター・バックスってカフエ。多すぎじゃね？”

テトがそういうので、コーヒー好きな妖精のためにスター・バックスでコーヒーを頼み外の椅子に腰をおろした。

“まずは観察だな。お前と同じナジャーのやつ。”

テトがたっぷりとミルクと砂糖を入れたコーヒーを飲んだ後、そういった。しばらく目をつぶっていたがやたら口をもぐもぐせている。

“人がいっぱいいると、上手い希望がいっぱいある。”

それにしてもや。

そうつぶやいてテトは回りを見回した。

“まあ、皆のんきなもんだよな。絶滅つていつたらさ、その種の動物は結構慌てるけどな。

人間は本当に何もアースの意志を感じ取れないんだな。知らない方がいいってこともあるけどな。

これだけ死を怖がっている動物だ。自己防衛機能かもしけないな。これでもうすぐ絶滅するなんて知つたら、絶望でオレなんか即死だな。

“妖精つて絶望で死ぬのかい？”

“あんまり強いとな。絶望が多いと息ができなくなるんだ。だからかな、陽気な希望にみちた南国に妖精が多いのは。

ニューヨークなんて言つたら、それこそ息ができないことが多すぎ

るからな。アノ町に住んでいる妖精は変わり者だけさ。”

“死を怖がるのは人間だけだつていつたよね？”

“そうや。

“本当にそうなのかな。”

“ああ、病気になつてもひたすら治そうとする動物が他にいるか？みんな天命に従うだろ。家に帰るつて知つているからだよ。生きているときは、子孫を残すことに全力を捧げる。

動物つてのは本当はシンプルなものなんだ。アースの意思で生かさ

れでいることを知っている。

でもな、人間だけだ。どんどん勝手に解釈して独自の世界を作る。面白いよ。ほんとうに変わっている。

特別なんだ。その魅力はアースもわかつていて、愛していたよ。ほんとうに、惜しみない愛だつたよ。

でもな、ちょっと勝手がすぎたな。他の生き物から大クレームだよ。

アースはいつでも決断できた。でもアースは慈悲深いから、決断がちょっと遅すぎたときがある。

それが恐竜の時だ。あいつらも勝手だつたからな。決断が遅かつたばばっかりに、アースは重い病気になった。

体温が極端に落ちて、しばらく眠っていた。恐竜どころか、氷の世界になつたからな、ほとんど絶滅してしまつたよ。

アースを眠りから目覚めさせたのが、火山の女神ペレだ。あの女は極端に体温が高いからな。

唯一氷の世界でも起きていた。それで、火山活動を活発にさせるようにアースを揺り動かした。

やがて、火山が各地でおき、アースは眠りから覚めた。

アースはさ、自分の決断が遅くてたくさんの命を無駄にしたことをお悔やんでいるんだ。今ならまだアースは立て直せる。

にわかには信じがたいその話をジルは冷静に考えてみた。

“それを聞くと、人間は滅びた方がいいんじゃないかと思つてくるよ”

“ そうだな。オレもどちらがいいのかわからないよ。 ”

“アースってどこにいるの？”

“アースは世界の中心にいるよ。”

“中心って？ニューヨークとか？”

テトはそれを聞いて笑い出した。

“ジル、お前本当に世界の中心がニューヨークだなんて思いつかなくてないよな？”

“いや、経済の中心はニューヨークだからそれしか思いつかなくてハワイなのか？”

“アースは地中深く、本当に地球の真ん中にいる。巨大な意思をもつたエナジー体だ。

愛の塊のような地中の太陽のよつな。地球の真ん中にいるつてことはさ、どの国から見ても平等に同じ距離にいる”

“意思を持った。”

人間のように体はないけれど意思があるエナジー体。

“それって神か？”

“そうだな。神っていう人間もいる。人の形に置き換えて見る人もいる。

でもとにかくその存在は確かだ。地球にはアースがいる。そしてその存在は愛で満ちていて絶対だ。”

テトは少し敬うようにアースのことを話した。

“アースを感じなくなつたのは人間が耳をふさいだからだ。他の動物はアースを常に感じながら生きている。”

人が何も感じとれなくなつたのは自然と離れすぎてしまつたからなのだろうか。

“使わない機能は退化するように動物は作られている。”

とテトが言った。

退化した機能。古代ハワイアンは自然界全てに神が宿るとして敬つてきた。

彼らはアースを感じていただろうか。

恐らく・・・答えはイエスだろう。人は大切なものを失つてしまつたのかもしれない。

“おつ。いたぞ。ピュアソウル。追いかけるぞ。”

テトが急に言った。

“あの車を追え。”

“車を追えつて。”

ジルは仕方なく全力で走りだした。車はワイキキの混雑でところどころ止まるものの、ワイキキのはずれまで来ると速度が上がつた。

“ はあ、はあ。はあ。もう。。だめだ。見失う。 ”

“ しつかりしる。 ”

テトの声が遠くなる。テトと違つてこつちは走つているんだ。ジルは恨めしそうに飛んでいるテトを見た。

“ おっ。あそじだ。止まつたぞ。 ”

其の声に氣力を振り絞つて前を見ると、坂を少し上がつた家に追つてきた車が止まつていた。

車から降りてきたのは杖をついた初老の男だった。

ゆつくりゆつくりと車から降り、ゆつくりとポーチの階段を上がつた。

“ 話しかける。 ”

“ な、なんて。 ”

“ ピュアソウルを探していますって言え。 ”

“ そんなこと言つたつてわかんないよ ”

“ いいから、神の使いつて言え ”

ジルは仕方なく声をかけた。

“す、すいません。神の使いできました。”

“お前、バカ正直だな。そんなこと言つて誰が信じるんだよ”

テトがジルの耳元でささやいた。ジルはきつと小さな妖精を睨んだ。初老の男は驚きを隠せない顔でこちらを振り返った。

肩にいるテトに小さな声でジルは言つ。

“ほら。クレイジーだと思われただろ。”

しばらくの沈黙。

“あ、あの。。”

ジルが口を開いたとき、テトの方をみてますます驚いた顔の男が何かを悟ったかのように

“どうぞ、お入りください。歓迎します。”

といつて家に通してくれた。テトが見えるのか。

“ピュアソウルは見えるのかもな。都会にいるやつはほとんど見えなかつたけどな。”

テトが言つた。都会に暮らしていると色々な能力を失うらしい。

シンプルで片付けられた部屋。男一人暮らしなのだろうか。必要なもの意外は何もない。

ジルは通されたそのリビングで静かにソファーに腰を下ろした。初老の男は歩くのもやつとのよつだが、コーヒーを入れて戻つてきた。

驚いたことに、テトにぴったりのサイズのマグカップも添えられている。

そして、当たり前のようにテトの前にそれを置いた。

“み、見えるんですか？妖精が。”

“ん？？見えるよ。

メネフネとはしばらく一緒に暮らしていたよ。

私が暮らしていたメネフネもコナコーヒーが大好きだった。また会えるとは。懐かしいよ。”

男は初めてにつこつと笑つた。

“ メネフネ？？”

“ ハワイの人たちは、俺たちのことメネフネって呼ぶんだ。 ”

話が早いと思ったのか、テトは上機嫌で「コーヒーをすすつた。

“ おじさん、1人か？”

テトの話し方はいつも遠慮がない。

“ ああ、ずっと1人だ。どうも人間とソリが会わなくて、いつも妖精だのといったからな。それでこんなに年とつてしまった。 ”

“ そうか、しばらく一緒にいていいか？”

“ テト、ちゃんと説明しないと失礼だろ。 ”

ジルがそういった。

“ そうか、そうだな。じゃあ、お前頼む。 ”

テトはすっかりくつろいでいる。希望をいっぱい食べたせいしかし眠くなつてきたらしい

“ あの、アースはご存知ですか？”

“ ああ、アースって地球のことですか？”

“ そうです。その、実は。 ”

ジルが言いにくそうにしているとテトが横から口を挟んだ。

“ あのさ、そのアースが人間の絶滅を決めたんだ。 ”

それから、アースが人間の絶滅を決めたいきさつを簡単に説明した。

初老の男は話を聞き終わると、静かに頷いた。

“ そういうことがあってもおかしくない。人は自然に甘えすぎた。 ”

“ そうか、さすが、話が早いな。ピュアソウルは。 ”

“ ピュアソウル？私が？ ”

“ おじさん、死ぬの怖いか？ ”

“ 今は、1人で、家族もないんだ。それほど恐れてはいなによ。全員に来るものだしね。 ”

“ そつか、 ”

“ 死期が近いこと知つているのかもな ”

テトがジルの耳元でさりとつていう。

“ よし、見届けるまで一緒に届け  
テトがいった。

“ 見届けるって死ぬのを待つってこと?”

ジルが相手に聞こえないようにテトに聞く。

“ 事情はよくわからないけれど、家にいたらいよ。

男は一人の会話が聞こえたのか聞こえないのか、ゆつたりと言つた。

“ そ、そんなんでいいんですか。初対面なのに。”

ジルは驚いてしまつたが、テトは  
“ そつか、じゃあしばらくいるね”

と気軽にいった。

こうして、不思議な同居生活が始まった。

## リアン

リアンといつその男の生活は変わっていた。

車で週に一度、食料を買いに行くほかは他の人間と一切触れない。

一人家にいて、毎朝きつちり6時に起きて8時に寝る。

窓からダイアモンドヘッドを眺めたり、庭仕事をしたり、ただ読書をしたり。

しかし、そこにある空気はとても暖かく、一緒にいると不思議と心地良かつた。

会話を特にするわけでもない。ジルも時計が止まつたかのような時間を使い込んだ。

思えば、こんなにゆっくりと空を眺めたことは久しぶりだ。

気分の良い夜は、庭にあるハンモックに揺られながら、男がウクレレを奏でた。

ウクレレに合わせて歌うハワイアンソングは甘く切なく、島に溶けていくようだつた。

食事の前には手を合わせて今日の食事がある喜びを確かめた。

昔、人はこうやってアースに生かされていふことを感謝していたのかもしだれない。

大地に生えた植物を中心とした食事は不思議と優しい味がして、心

が安らかになつた。

音が何もしない夜は庭に出て星を眺めた。そよそよと吹く風に乗つてかすかにブルメリアの花の香りがする。

テトもしばらく南国の静かな生活を楽しんでいたようだつた。ジルは故郷に戻つてきたなと心から思つた。

僕は確かにここで生まれここで育つたんだと、僕のいるべき場所はやはりここなのかもしない。

僕は大地に生かされている。アースの息遣いを感じたような気がした。

ピュアソウルが一人も同じ家にいるとあって、神々が覗きにきたのが、不思議なことが起る日もあつた。

顔をなでられているような風や、ダイアモンドヘッドの後ろ側に大きな男が見えることもあつた。

朝日を見ているとテトとは違う形の小さな妖精がエンゼルトランペツトを吹いて帰つていつたりもした。

“時間がかかるな”

数日たつた日、テトがふとつぶやいた。

リアンとジルは早朝のビーチを散歩しに来ていた。

リアン取つて置きのビーチには人影がない。

真っ白い砂浜、海は朝日をあびて銀色に輝いていた。  
波のない穏やかな海だ。

“待つているのもあれだからさ、いっから仕掛けてみるかな。”

ジルはテトの言つていることがよくわからなかつた。

“仕掛けるってなにを？”

“例えばさ。”

リアンが波際で杖をつきながらゆづくつ歩いているのを見ながらテトが指をぱちんとならした。

急に強風が吹いた。リアンは体をふらつかせる。

それと同時にリアンの身長の2倍ほどある高波がリアンの背後に迫つた。

“危ない！”

ジルが思わず叫んだ。あの足では逃げられない。

リアンは高波に気付いていない。だいたい、いつも穏やかなこの海でこれほど大きな波が起きるなど想像もしないだろう。

“ダメだ、波に飲まれる”

ジルの慌てぶりとは裏腹にテトは平然とそれを見ている。

高波がしぶきを上げてリアンの背後にせり上がり、リアンの体を飲み込もうとした瞬間。

ぴたつと風がやみ、波がすーっと収まった。

“なんだつたんだ？”

ジルには意味がわからない。テトが

“あれ？おかしいなあ。”

とつぶやきながら首をかしげた。

“おかしいなあつてテトがやつたのか？”

“ああ、だつてさ、近いうちに死ぬんだから待つてなくともいいかなと思つて”

“なんだよそれ。妖精つてそんなことしていいのかよ”

ジルが怒りを感じて叫ぶ。

“緊急事態で時間がないんだ。”

テトがなんでもない」とのよつて叫んだ。

“ でも、おかしいな。ちょっと調べよう。 ”

テトがそう言つて眼をつぶつてなこやらぶつぶつ呟えている。

“ 無理やつ命の結晶を作るなんて妖精じゃなくて死神じゃないか。 ”

ジルは納得がいかないようテトの周りをうろついている。

“ まあ、落ち着けよ。 ”

テトはそういって、またぶつぶつ唱えている。

“ そつか、そういうことか。 ”

眼を開けるとテトがそういった。

“ 時間がなくとも待つしかないな。 ”

テトが残念そうにいった。

“ 説明してくれよ。 ”

ジルがいろいろしながらそういった。

“ ピュアソウルには、強力なガーディアンが付いているから、無理やつは無理だな。 ”

“ 守護霊みたいなものかい？”

“ 簡単にいうとそうだな。魂の応援団だ。一人ずつ皆にいるけど、ピュアソウルともなると力が強力だ。こりや、自然にいくのを待つしかない。 ”

テトはそう言いつと諦めたように手をふらふら振った。

“ 仕方ないな。これで人間の絶滅が防げなくても。 ”

ジルは複雑な想いでこの美しい妖精を見つめた。

“ いじわるな言い方をするなよ。 ”

“ 今頃気付いたのか？俺は妖精の中じゃ、飛び切りいじわるなんだ。 ”

## 妖精との恋

テトは頻繁にでかけるよつになつた。

“どうやらトートを楽しんでいるらしい。

無理やり結晶を作れないとわかつた途端のふきなものだとジルは思つた。

数日たつた夜、月がきれいだったので、ジルはビーチにでた。  
波の音しかしない月に照らされたビーチは幻想的で、神々しかつた。

“神が決めたことなら、従うべきなんぢや。”

ジルはここ数日、自分がどうすべきか悩んでいた。

このまま人類がいなくなつて方がいいのではないか。その思いは強くなつていつた。

しばらく、ビーチを歩くと人影があつた。ビーチに生えたヤシの木に寄りかかり海を見ている

“ リアンさん ”

声をかけて近寄ったジルは驚いた

“ 泣いてるんですか？”

“ ああ。  
”

初老の男の涙は静かにほほを伝っていた。

ジルに気づいても涙を拭くこともなく海を見ている。

ジルは隣に腰を下ろして、男が話し出すのをじっと待つた。

“ 前に君たちは僕に、なにか愛しているものがあるかと聞いたよね  
？”

“ はい。ピュアソウルの愛は偉大だと聞きました。  
”

“ その答えはイエスだ。  
”

リアンが水平線に眼を向けたまま言った。

“ 僕の人生は彼女が全てだった。  
”

“ 彼女？？  
”

“ そう、30年も前に一緒に暮らしていたメネフネだ。  
”

そうこうして男は話しだした。

“信じるかい？”

“ はあ。何しろ、最近は毎日メネフネといますから、そういうことがあります。”

ジルがおかしそうにいった。

そうだ。僕らはメネフネと生活している。こんなおかしなことがあらうが

ジルは改めてテトとの出会いとの不思議な状況を見返すとおかしくて仕方がなかつた。

“ 30年前、そのメネフネは僕の庭の隅にあつた蜘蛛の巣にひつかつて動けなくなつてしまつてね。 。

それを助けたのが始まりだつた。僕は小さい頃から、人間に見えないものが不思議と見えてね。

友達は気味悪がつて近寄らなかつた。いつも孤独だつたよ。だから友達ができる嬉しかつた。

其のメネフネの名前はリリー。とても美しかつた。

長い髪を小さな花で結んで。彼女の羽は時々七色に輝くんだ。  
リリーは初め僕が妖精を見られることに驚いたけれど、すぐに仲良くなつて一緒に暮らすよつになつた。

リリーは孤独な僕の話相手になつてくれた。底抜けに明るい妖精と暮らすのがどんな風だかわかるかい？  
そりや、楽しいんだ。後ろ向きなことは一切ない。人間の悲しみなんてちつぽけだと思えてくる。

僕は、その小さな美しい妖精と恋に落ちたんだ。

リリーがなぜ僕を愛したのかはわからない。けれど、彼女と僕は本気で恋に落ちてしまった。

僕は妖精のままのリリーでも充分だつたけれど、彼女は僕の相手には自分は小さすぎると言つ出した。  
そして、ある日、

悪魔と取引をしてしまつたんだ。

たつた、3日だけ、人間の女性にしてあげると。そして、ついにあの夜。

リリーは人間の姿になつて僕の前に現れた。

人間を超えた美しさだったよ。

僕らは一瞬を惜しむように愛しあつた。そして、3日が過ぎたけれど、リリーは僕のもとから去ろうとしなかつた。

僕は悪魔との取引を知らなかつたから。このままずっと一緒にいたら  
れるのではないかと思つたよ。

けれど4日目。リリーは体の調子がひどく悪そつになつた。  
僕には何が起きたのかわからなかつた。きっと悪魔との取引のせい  
だ、様子をのぞきにきたほかの妖精が僕の耳元にささやいて逃げた。  
僕は初めてリリーが悪魔と取引をしたことを知つたんだ。妖精が人  
間の姿になつて現れたのに少しも疑問を持たなかつた自分の浅はか  
さをのろつたよ。

そして、其の夜リリーは姿を消した。リリーは其の後、一度も姿を  
見せない。

僕は毎日探したよ。でもどこにもいなんだ。30年経つた今でも、  
僕はリリーを愛している。  
ヤシの陰や、庭の草木。リリーがもしかしたらいるんじゃないかつ  
て、探してしまつんだよ。

ぼくはね、リリーのままでよかつたんだ。

僕らは欲をかいだばつかりに全てを失つてしまつた。  
”

男はそう言つて、顔を覆つて泣き出した。

“ あまり絶望しないでくれ ”

苦しそうな声でテトが舞い降りた。

“ ピュアソウルの絶望は答える。 ”

テトの羽の光が段々弱くなり、呼吸が本当に苦しそうなので、男もあわてて泣きやんだ。

“大丈夫か。テト。”

心配そうな男を見上げて、テトは次第に元気になってきた。

“よし、それでいい。絶望なんて何も生みはしないんだから。”

テトはリアンに言った。

“すまん。年甲斐もなくセンチメンタルになってしまった。

こんな月の夜は色々考えてよくないな。

“どれ、少し話しそぎた。ウクレレでも弾くか。”

“いや、ウクレレの前に。ちょっと聞きたいことがある。

君の愛したリリーはセイラの母親じゃないか?”

テトの声に男は目をまるくした。

“なんだよ。テト。聞いていたのか?そのセイラって誰さ。”

“最近、僕がテートしている妖精を。どうも、彼女、純粹な妖精じゃないようなんだ。

みかけは完璧な妖精だか、うまく隠しているけど、死を恐れている。人間のようにな。”

“人間のようにな？”

ジルが驚いて声を上げた

“まさか。リリーの子供じゃないのか？”

リアンに生き生きとした希望と同時に不安が浮かび上がった。

## 妖精と人間の子供

セイラに事情を聞いてくると、つい飛び出したテトを一人の男は手持ちぶさたで待っていた。

やがて数時間がたったとき、テトが淡い緑色の髪をふわっとおり、髪と同じ色の瞳が美しい妖精を連れてきた。

“セイラだ。”

セイラを見た瞬間、リアンは眼に涙をいっぱい浮かべた。

“初めまして。ずっと探していました。私も”

ちょっとほにかんで笑ったセイラを思わず手のひらで包み込む。

“言わなくてもわかる。リリーこそっくりだ。”

そうこつてセイラを眺める。

“やつぱりな”

テトは満足げにその光景を眺めた。

“君のお母さんはどうしてる？”

“お母さんは、あのことで体を痛めたけれど、元気にはしています。

妖精ですか？』

セイラはさう言つて微笑んだ。テトと同じように羽から光がこぼれ落ちる。女性らしい柔らかな物腰のセイラを愛しむようにテトが見守つている。

『体を痛めた？？』

『そつ、悪魔と取引してしまつたでしょ？それで。』

『ビリが悪いのかな？？』

心配そうに男が聞く

『取引をしてから3日間。人間の体を手に入れたあと、もしどうで去らなければ、体の感覚を一つずつ失うと言わっていました。あなたの側を離れられなかつた母は、それでもずっとあなたと一緒にようと思つていました。』

4日目の朝、母は聴覚を失いました。耳が聞こえなくなつたんです。そして5日目の朝、今度は声を失いました。そして、其の日、母は私がおなかにいると気づいた。

これ以上感覚を失うと子供を育てられなくなる。母はさう思つてあなた側を去る決意をしました。

もし、母とあなたがもう一度あつたら、一人とも命を失います。

妖精と人間は恋してはいけないことになつていています。私の存在が問題なんです。

人間と妖精とのハーフなんて存在してはいけない命。

私は母と妖精として生きる道を選びました。あなたを探していたのはこのことを伝えるためです。

決して母を探してはいけません。一人ともそのまま命を失います。

母は死を恐れてはいません。妖精ですから。

けれど、わたしは母を失いたくはない。

半分人間の私にはどうしても母の前からいなくなる事実を受け入れられないんです。

母はもう一度あなたに会えるとわかつたらすぐにでも飛んできてしまつ。

私はそれが怖くて怖くて、絶対に会わないで欲しいんです。

“

セイラは懇願した。

“ 妖精が体が悪いなんて聞いたこと無いぞ。

”

“ テトは言った。”

“ そう、全てが特別なんです。悪魔と取引なんて恐ろしいタブーを犯しています。許されないことです。私の存在も。 ”

“ わかったよ。 ”

リアンは優しくセイラに言った。

“ 君を悲しませるようなことはしない。僕の愛する娘だ。だけどね、セイラ、僕と君のお母さんは本気で愛し合つた。そして君が生まれた。そのどこがいけない？生まれてくる命にタブーなんてあるものか。 ”

セイラ。胸を張つて生きてくれ。妖精としてでも、人間としてでも構わない。命を輝かせてほしい。 ”

“ リアン。私は本当にあなたを探していました。 ”

セイラは再び男の胸に抱きついた。

“ 優しい人でよかつた。私のお父さん。 ”

“ そうさ、セイラ、君は特別だ。この世の中に1人だ。 ”

僕は君の特別なところに引かれたのさ。妖精の陽気さの中に、人間の切なさを持つ君に。本当に君は美しいよ ”

テトもそう言つて彼女を抱きしめた。

セイラは初めて自分の命を認められたような安心と幸せの中にいた。

恋人と父親。一人の男性がセイラの命を認めてくれた。それが何よりも嬉しく感じた。

私は望まれて生まれてきた命。リアンの言葉がセイラの支えとなつた。

“セイラ、今夜はどこへ行こつか？”

セイラとのデートが楽しくて仕方がないテトは今夜もセイラを迎えた。

“そうね、ダイアモンドヘッドの天辺で星座を作るつていうのはどう？”

“いいねー。”

そういうと一人はぐるぐる周りながらダイアモンドヘッドに向かう。

一直線に飛んだり、ぐるぐると蛇行したり、夜空を楽しむよつなテトとセイラ。

キラキラと一人の光の粉がまざりあって、夜空を彩った。ワイキキでは金曜日恒例の花火が打ちあがった。

“見てー。花火”

セイラが嬉しそうに振り返って言った。

“ほんとだ。”

テトも振り返ってしばし見とれる。そして一人顔を見合させて、ふふふと笑うとまた飛び出した。

ダイアモンドヘッドの上につくと、眼下にはネオンが広がっている。ごつごつした岩の平らな部分を探して一人腰掛ける。

“きれいねー”

セイラが感嘆の声を上げた。

“ははは。きれいだねー。”

テトも答える。セイラの淡い緑色の髪が風にそよいでいる。長いまつげが美しい。そのまつ毛がふと下を向いて瞳が翳つたことをテトは見逃さなかつた。

“セイラ、君は時々不安を感じるの？”

セイラはテトを見て言つた。

“ええ、妖精なのに、時々恐怖で震えるときがあるわ。おかしいわよね？”

セイラは恥ずかしそうに言つた。

“周りは妖精ばかりで君の気持ちわからないだろ？”

“そうね、ママでさえ氣づいてはくれないわ。”

セイラは人間と妖精の狭間で心が揺れ動いていくようだつた。

陽気な妖精の中、悩みを分かち合えないのはセイラにとってまつらいことのようだつた。

テトは優しく語りかける。

“ 大丈夫。何にも心配要らないよ。僕が全部守つてあげるから。 ”

テトははかなげなセイラが愛しくてたまらない。どうして彼女はこんなに切なげに美しいのだろう。

惹かれあう二人の妖精の恋の色で羽からピンクの光が飛び散った。セイラの不安を打ち消すようにテトは元気に言った。

“ よし、どんな星座を作ろうか？ ”

すぐに明るさを取り戻してセイラもキラキラと光の粉をまく。

“ そうねー。まずは妖精の形 ”

セイラはそう言つて、星を指差すようにゆびをぴゅーっと動かした。夜空の星はビーズのようにすーっと動いて形を作り始めた

“ これが、羽。 ”

“ じゃあ、これがセイラの髪 ”

“ なかなかいいわね ”

“ その隣は？ ”

“ 家族を作りましょ。 ”

“ 家族？ ”

“ そう、テトと、私。ママと、リアンも小さくして入れて。 ”

小さな妖精が4人並んだ。

“ こんな風に家族で一緒に居られたらどんなにいいかしら。 ”

セイラがまたふと寂しそうになる。

“ ママはもう永遠に愛する人に会えないんだわ。悪魔と取引をしたばかりに ”

“ そうだな。生きている限りは会えないね。 ”

“ 残酷よね。 ”

“ 僕だったら、命を失つても君に会つことを選ぶな。 ”

“ 本氣で言つているの？ ”

“ もひろん、本氣だ。愛つてそういうものだろ？ ”

セイラが考え深そうに言つた。

“ ママもそうね。わかっているの。でも私はママを失いたくないだけ。私が、我慢なんかしら？？ ”

テトは愛くるしげにセイラをそっと抱き寄せた。

“ 起こることは自然に起こる。起こらないことは自然に起こらない。今はそんな不安忘れよ。僕といふ時間はただ楽しめばいい。 ”

テトにセツと言わされると、セイラの不安はひと時消えてなくなるの  
だった。

## リアンの死

セイラは其の後たびたびリアンの家を訪れるようになった。初めて父にあつた喜びと自分の存在を見つめなおすきかけになつたのだろう。前にもまして生き生きと美しく飛び回つた。

しかし、リリーは娘の変化に気づいてた。

“恋でもしているのかしら。”

ある日、娘の相手が気になつたリリーはつきつきしてはいる娘の後を追うことにした。

ここは、リリーには見覚えのある小道に入つていく、やがて夢になんども見た白いこじんまりした家を見つけた。セイラが慣れた様子でその窓の隙間から入つていく。

“あの家は。もしかして。まだある人があそこにいるのかしら。”

リリーの心はときめいた。セイラが立派に成長した今、あの人にもう一度会いたい。

リリーの心は再会への期待でいっぱいだつた。悪魔との取引のことなどもう頭になかった。あわてて娘の後を追う。同じように窓のほんの隙間をくぐつて家に入った。

“ああ、このベッド。の人と人間として過ごした3日間。”

昨日のことのよつて蘇る甘い日々。

“ ここの本棚。彼はいつもここから本を取って、私に人間の物語を読んでくれた。 ”

すべてが鮮明に思い出される。リリーは懐かしむようにリアンのうちの家具を見て回った。

リリーと過ごした日々から丁寧に手入れされたそれらは、古ぼけてはこるけれどほとんどんど何も変わらずそのままだつた。

そして、ゆっくりと、下に滑り降りたリリーはついに、リアンと楽しそうに話すセイラを叩きした。

“ あの人は。あああ、あの人は。リアン。間違いないわ。 ”

リリーは一瞬の迷いもなくリアンの元へ飛んでいった。肩をくすぐるような感覚を覚えて、リアンが振り返る。

“ テトかい？ ”

リアンは七色に光を変えながら満面の笑みを浮かべて、この二人の目があった。

“ リリー。リリーなのか？ ”

じぱりくは誰も出ないほどお互いに見つめあつた。

“ああどれほど会ったかっただろう。”

声が出せないリリーも声は静かに笑っている。耳が聞こえなくてもリアンが何を言っているのかわかった。二人は通じ合っていた。

“リリー。リリー。”

そっと手のひらに入れて抱きしめるリアン。嬉しそうにリアンの手のひらの中でほほをすりよせて喜ぶリリー。

二人の様子をみてセイラが青ざめる。

“大変だわ。私の性で、ママがリアンに会ってしまった。悪魔との約束を破ってしまったわ。”

慌てふためいてテトを探すセイラ。

“テト、テト。どうしよう。どうしよう、ママが行ってしまうわ。”

セイラの異変を感じてテトがセイラの横に舞い降りた。

“落ち着けセイラ。”

“どうしよう。ママが死んでしまう。”

悲痛な声のセイラとは裏腹にリアンとリリーは幸せそうだった。一瞬を惜しむように見つめ合い、抱きしめあつた。

リリーは魔羅との取引を思い出した。

“もうあまり時間がないわ”

リリーがリアンに訴える。リアンはリリーの様子を見て悟った。恐らく二人とも死ななくてはいけない。それが魔羅の取引なのだと。

“そうだな。二人が大好きだった浜に行こう。そして一緒にその時をまとう。”

リアンはそいつでリリーをそつと手のひらで包み込んだまま、浜へ降りていった。

“今度生まれ変わつたら片時も離れず一緒にいよう。”

リアンが言った。

“人間に生まれてくれるかな？リリー。それとも、僕が妖精になれたりしてね。神様に頼んでみようね”

リアンがそいつで、人差し指でリリーのほほをくすぐった。

リリーはつまづきながら声をたてずこくすくすつと笑った。

「これから死を迎える一人とは思えない、幸せいっぽいのひと時だつた。」

“ そろそろだな ”

リアンはそつこつと、リリーを抱えたまま白い砂浜に立つヤシの木の根元に腰をおろした。

銀色に輝く海を見ながらリアンがリリーに優しく話しかける。

“ ほくらが大好きだつた海だね ”

リリーはこくんとうなずいて嬉しそうに声を立てずに笑つた。

やがて、日の光に溢れていた浜辺がさーっと黒い雲で覆われて一瞬真っ暗になつた。

黒い影が一人をぐるぐる包み込むと天へ舞い上がつた。後から追いついたセイラが悲鳴を上げる。おろおろするばかりで何もできない。

“ ママが連れてかれちやうわ。 ”

セイラの悲鳴を聞いて横にいたテトがセイラを押さえる。

“ セイラ、もうじつにできない。悪魔との取引は消せないんだ。 ”

テトが慰めるようにいった。

“ ああ、ママが。ママが死んでしまうわ。 ”

二人は幸せそうに横たわったまま黒い影が消えるとともに息を引き取った。

やがて一人の口からすーっと白い煙が抜け出て青い空に吸い込まれた。

テトはそれをみてほほを緩めた。よかつた魂は天に戻った。

セイラはしばらく立ち尽くしていた。黒い影が消えたので、テトはリアンのもとに舞い降りた。

そして、テトはリアンの胸元に手をかざすと静かに祈った。

リアンの胸元が一瞬ぴかっと光ったあと胸から一筋の光が天へと伸び、リアンの胸元に

恐ろしくピュアな透明の小さな結晶が浮かびあがった。

“ ピュアソウルの結晶。 ”

テトがつぶやいて手のひらに收める。テトも初めて手にするその結晶は小さいけれど恐ろしくパワフルだった。

“ セイラ、セイラ、じつにおいで ”

テトが泣きじゅくしがみこむセイラを包むように抱きしめた。柔らかな淡い緑の髪が風にのってテトの鼻をくすぐる。

泣いていてもセイラは美しかった。けれど、この絶望は妖精にはないものだった。

セイラは紛れもなく半分人間だ。

テトの体はセイラの絶望でどんどん重くなる。テトはセイラの悲しみようを少し不思議な気持ちで見つめていた。

絶望で重くなった体を引きずりながらセイラを支えて体を起こしながらやさしく話しかけた。

“かわこわうなセイラ。でも、またきっと呂える。”

“テト、そんなこと今はとても信じられない。”

しゃくりあげながら、セイラは答えた。

“セイラ、僕の顔を見て”

両手でセイラの顔を包むように顔を向き合わせると、テトはいつと言つた。

“本當だよ。セイラ。僕を信じて。君とママの縁はそんな薄っぺらなものじゃない。絶対こまかに会えるよ。それにね。”

といつて、テトはそつと横たわる一人の方を向いた。

“見て、セイラ。セイラ。君のママの幸せそうな顔。”

セイラは涙でかすむ目をこらして、一人の姿を見た。寄り添つよう  
に横たわっている自分の母親と  
、巨大な初老の男。確かにその顔は幸せそうだった。

“セイラ。僕だって君にもう一度会うためなら悪魔とだって取引す  
るさ。そんな人にめぐり合えるなんて奇跡なんだよ”

テトは明るく慰めた。

“絶えられないわ。ママの笑顔ももう見られない。  
うちに帰つてもママのハグはない。テト、わかるでしょ?  
恋人とママとはぜんぜん違う。ママはいつも私を守つてくれ  
た。

私はママにまだ何もしてあげてない。ママは声だせないし、耳も聞  
こえないのに私を育ててくれたのよ。

私がすべてみたいに、いつも私を思い、助けてくれた。その大切な  
私にさよならも言わず、

ママは愛した男の姿を見たとたん飛んでしまったのよ。まる  
で私なんていないかのように私を素通りしてね。

パパの姿を見たとたん、急に私は価値がない存在のようになってしま  
ったのよ。”

テトは言い聞かせるようにセイラに言った。

“セイラ。君のママが君を大切に思つてることと、愛する人がい

るっていうことはまつたく関係ないんだよ。

ずっと会いたかった人が目の前いたんだ。ママが思わず駆け寄つたつてそんなに責められないだろ? ”

“ 嫌よ。もう一度、ママに会いたい。 ”

セイラは赤ちゃんに戻ったかのよつてトトを囲むせると泣き崩れてしまつた。

太陽がまた急にその光を弱めたかと思うと、再びやってきた黒い雲がそつと二人を包み込みそのままもちあげた。

二人を包み込んだ黒い雲は回転するように一人を取り巻き、一人の姿を隠してしまつと、ブラックホールのようにあたりの空気とともにも吸い込み始めた。

“ ああ、ママが。ママが行つてしまつ ”

悲痛なセイラの叫び声とともに、黒い雲はショーンと音を立てて吸い込むスピードを増し、そして消えた。

あたりは何事もなかつたかのよつにまた日の光が浜辺を照らした。

“ ママは。ママは連れて行かれたわ。どこにいったの ”

テトはすぐに答えられなかつた。魂はリアンとともに天に戻つた。けれど肉体の方は悪魔が持ち去つたのだ。どういう風に利用するかは悪魔の取引条件にあつたのだろうか。

魂がぬけたリリーとリアンの肉体はただの抜け殻。彼らに苦しみはない。けれど今のセイラにそれがわかるだろうか。

“リリーは妖精だ。リアンを見たら他の悲しみのことなんて絶対思いつきもしない。妖精は目の前の幸せに夢中になるんだ。”

セイラは泣いたまま顔を上げない。テトはセイラの絶望に押しつぶされて息も絶え絶えだ。

“OK・セイラ。わかったよ。カネの水をとってきてあげる。”

この世の終わつのよづに泣きじゅくるセイラを抱えながら、テトは堪忍したかのように言つた。

“カネの水ですって！”

セイラが驚いたようにテトを見上げた。

“そうだ、巨人が守る洞窟にあるカネの泉。その清水を飲めばママは生き返る。それでいいかい？”

“本当にあの伝説の水が手に入るの？”

“入るぞ。期待していて。だからもう泣かないんだよ。”

セイラの緑の瞳に希望が宿つた。羽が光を取り戻す。立ち直りの速さもまた半分妖精の証か。

まったく不思議な少女だとテトは思った。今泣いたと思ったら、もう笑っている。

人間の弱さと妖精の陽気さをあわせ持つ世界で一人の妖精と人間のハーフ。テトは、セイラが魅力的に思えてならない。

“ ありがとう。テト”

胸に飛び込んできた愛しい少女の髪をなでながらテトは覚悟を決めた。

ピュアソウルの結晶を早々に集めて、カネの水を取りにいって、悪魔からリリーの肉体を取り戻し、セイラのもとへ戻る。

よし、急がないと。セイラの中に湧き出た希望で体を持ち直す。

アースも最終決断だつたんだ。

テトは一度決めたら振り返らない。

世界は過去も、未来もない、一瞬に力を注ぎ、一瞬が運なつてできている。

起きてもいなことを心配して何になるだろう。今。今に力を注げば未来も作られることをテトは本能で知っている。

だから過去をひきずつたりしない。やることが決まつたことでテトはいつもの調子を取り戻した。

と、そういうえば、もう一人のピュアソウルはどうしたんだっけ？  
セイラの父親のもとに居候していたあいつだ。

テトはすっかり忘れていたジルをやつと思い出した。

セイラを送り届けてリアンのつりに戻るとHプロンをして、鍋を片手にキッチンに立つを見つけた。

“ なにしているんだ?ジル”

テトが声をかけると嬉しそうにジルは振り返った。

“ やあ、遅かったねー。色々世話になつやつたから、ディナーをご馳走しようとおもつてた。”

そりこりと、

“ いらっしゃりませ、”

とトトをダイニングに招き入れ

“ じゃじゃーん”

とクロスととつた。そこには食べ切れんばかりの“ご馳走が並んでいた。

“ 我が家特製のフリフリチキンとバーラライス。ゴブサラダ。おいしそうだろ?リアン喜ぶかな。ところでリアンは??”

まつたくのやうなやつだ。テトは説明するのが面倒になつていった。

“まあ、いいや。とりあえず僕らだけで食べよつぜ。”

“でも、rianに作つたんだけど。”

“いいんだ。いいんだ。”

脇に落ちていないジルに苦笑いしながらテトは「馳走をほおぼつた。

まあ、いいかと思つたのか、テトと並んで嬉しそうに「馳走を食べるジルをみながら、

“「こつは本物アソウルなのか？もつと氣高く生き物じやないのか”

とテトは自問自答した。

ジルは自分が料理に専念してこる間に起つた出来事を一通りテトから聞き終わると、ふうっと長く息を吐いた。

“なんて色々起つた日なんだろ。その全てに僕は蚊帳の外だつたわけか。”

ジルは少しいじわるな質問をテトにしてみたくなつた。

“これは君が待ち望んでいた死だろ？どんな気分だよ。”

テトはジルの質問になんの感情もいれずに普通に答えた。

“ そうだな。ピュアソウルの安らかな死はなかなかいいもんだったよ。

リアンの死に祝福を！長い旅を終えて家に帰るんだ。めでたいだろ？”

ジルにはそんな風に人の死を割り切ることはとてもできなこと思つた。

“ 僕はそんな風に思えないよ。人の死はなんであれ悲しい。

テトはそんなジルを少し不思議そうに見つめた。

人間のピュアソウルってこんな思考レベルだったか？テトの頭に疑問が再び浮かぶ。

ジルはそれからふと思つたようにこいつこいつた。

“ 僕つて本当にピュアソウルで、役に立つんだろうか？”

「 いつかが聞きたい台詞だとテトは思つた。

“ 今のところは出番なしだな。きっとこれからだろ”

励ますようにテトは明るくいった。

“ そうなのかな。なんというか、今ひとつ全然実感がないというか、人間が大変なことになつてゐる実感もまったくないし。いろんなこ

とが起きたも僕は一つも見てないし、なんなんだらうな僕の役目は”

“ ぶつぶつぶやくジル。素直なやつだとテトは思った。

“ とにかく、今日はゆっくり休んで、これから大冒険だからな。まだたつ一つだ。”

テトはそういうと自分もするつとベッドに体をいれ、あつというまに眠りについた。

羽をやすめたテトは眠りながらにしても寝息とともにあでやかな光を放つ。煙のように現れては消える光の満ち引きはオーロラのよう

で、

“ まつたく妖精は美しい生き物だなあ”

ジルはうつとりとその様子を見つめ、そして電気を消すと自分も眠りについた。

次の日の早朝、名残惜しげに手を振るセイラをテトはもう一度しつかりと抱きしめた。

一度旅立つとテトは振り返らない。二人は旅立つた。次のピュアソウルへ。

“ あのや、テト。そろそろこの服飽きたんだけ替えて。”

ジルがのんきに言いつ。

“ 色々いわせにやつだな。今度は何色がいいんだ?”

“ そうだな。ちょっと渋めのブルーで草花が入ったアロハにしてよ。  
ビンテージっぽいやつ ”

“ はははい。 ”

テトはそうこうて指をぱちりとならした。

“ うーん、かつこいいね。すりつい高そうなアロハだ。  
ジルは満足そうにいった。 ”

“ さてと、次のピューアソウルはつと。おつと。緊急信号だ。こっち  
が先だな急げ。 ”

テトが急に慌てたので、ジルはアクセルを全開にした。  
リアンが乗っていた黄色いワゴンは古いのかアクセルをいっぱいに  
してもエンジンがうなるだけであまりスピードがでなかつた。

“ リアンの車勝手に乗つて平氣かな ”

“ リアンは死んだんだぜ？ ”

テトが面倒くさがりに答える。

“ でもさ、死んだとしてもその人の財産だから。 ”

“ ぶつぶつ血つジルをひたせるよつにテトが言つた。 ”

“ 人類を救う為に妖精と旅しているヤツが常識で考えるな ”

ぴしゃりと言わされたのでジルは黙つた。それもそうだな。

“ あのせ、 テト、 もつとなんか瞬間移動とかできないの？ 妖精つて  
？ ここの間ペレの所行つたとき使つたみたいなやつ。 ”

唸り声を上げるばかりのエンジンに嫌気がさしてジルが言った。

ビーチの砂のような色の住宅が立ち並ぶ道を抜けてH-1と呼ばれる  
ハイウェイに乗つたものの、

一向にスピードは上がらず周りの車に追い抜かれてばかりだ。

“ あんなのいっぱい使つたらお前の寿命もうないぞ。 仕方ないのさ。  
人間は原始的な物体しょつてるだろ？ 僕だけ先にいつたつてなあ。  
人間の移動手段に付き合つてやつてるんだから、 あああー。 間に合  
わなくなつたら大変だろ。 急げ ”

テトが急かすのでハンドルに力が入る。

“ ついでにさ、 ジル。 どうせ死期が迫つて いるピュアソウルのもと  
に行くんだからさ、  
リアンの時みたいに、 色々説明しなくていいな。 やり方を少し変  
えよう。 もつと自然に近寄つて話せばいいな。 時期が来るのを待つ  
しかないんだし。 ”

テトが行つた。 ジルはそれもそつだと思つた。

あなたの死を待つて結晶を作りますなんて説明受け入れられるはず  
がない。

リアンみたいな人が最初でよかつたな。神の使いなんてかなり怪しいじゃないか。

ついた先は小児病棟のある病院だつた。

丁寧に手入れされた芝の庭を一目散につっさる。周りの普通の人間たちにはテトが見えないらしく、

息を切らして走るジルを不思議そうに眼で追つてゐる。

テトはある病室へと迷いなく一田散へ飛んでいく。ジルは必死で追いかけた。

## 神の使い

“ふう、間に合つた。”

と飛び込んだテトは、

“止めろ……”

といって、少年のチューブに手をかけた母親の前に立ちはだかった。

“えつ。”

といったまま、しばし呆然となるその母親は、すっかりやつれ、  
くたくたに疲れてしまっていた。

ベッドにはまだまな器具をつけた10歳位の男の子が横たわって  
いる。

“私ついに頭がどうかしちゃつたんだわ。妖精が見えるなんて。私  
もすぐあなたたちの世界へ行きますから。。。。”

きりきりと光りながら美しい羽を持つテトを田の前にして

ぶつぶつとつぶやく母親にテトはまつきりといった。

“しつかりしわ。これはまだ、この世で現実だ。”

母親は大きく目を見開いて、つぶつぶし始めた。後から息をきらじて追いついた

ジルは落ち着きまじうと声をかけて母親を椅子に座らせ、そばにあつた水を手渡した。

母親はぼーっと差し出された水を一口飲んだ。

すっかり冷静になるまでテトもジルもしばらく見守った。

“なぜ、自分の息子の命を奪うんだ。”

テトは言った。

“この子はもうダメなんです。

すでに重い病気で脳死状態。産まれてからずっと入退院を繰り返して、散々苦しんだんです。

それでもなお、こんなチューブに繋がれて、これ以上はもう。。。

そうこうして泣き出した母親。

ジルは、母親に同情しつつも、ただ命だけを永らえる最新医療に疑問をもつた。

口から小さな腕から無数のチューブが少年の体から伸び、ぴーぴーと電子音を立てる機械に繋がっている。これで幸せといえるのだろうか。

“そうだな。もう生きているとはいえない。けれど、人の命を人間

が奪うことは許されてないんだ。  
いけない。  
”

とテートは言った。つい数日前、リアンの命を奪おうとしたテートの言葉とは思えないじゃないか。ジルは思った。

ジルは、テトに言つた。

” “ けれど、テト。この子はもう充分戦った。もう樂にしてあげても。

“だからさ、それは人間レベルで判断することじゃないんだ。

わかるだろ。決まりなんだ。

決まりつてのは守らなくちゃいけない。彼が自分で決めて、神がすることさ。人間の領域じゃない。人間がしちゃいけないんだ。

“彼つてこの子のことかい？この子が選べるのか？”

“もちろん、選べる。思い通りにすべてが行くわけじゃないが、ほとんどのことについて人は自分で選ぶ権利を与えられているんだよ。自分の考えた結果が現実に起こる。

上手く意識を「コントロール」できないから、思い通りに行かないよう

に思つだけで、実際は自分で選んでいるだ。

この子のように、幼くして病に倒れる子供は魂のレベルがほんんど人間を超えている。

通常の人間の痛みを忘れないようにあえてこいつの運命を選んで産まれてきたりするんだよ。

この子の場合はまさにそれだ。天使が人間に降りてきたピュアソウルだ。気高いね。短い人生の中で溢れるほどの大愛を回りに振りまいたはずさ。

テトの言葉に母親が顔を覆つて泣き出した。

“ ああ。。。本当に、天使のような子でした。

ジョイクを身にもつたのはリサがすでに子供を諦め始めていた四十歳手前だった。

結婚して八年も子供が授からなければ、希望はだんだんと絶望へとなる。

苦しんだこともあったが、すっと、このまま夫婦一人の生き方もあるのかも知れないと力が抜けた数日後の妊娠発覚だった。

リサの喜びようといったら。大切に大切に愛しむように胎児を育てた。

以前は眼をそらしがちだった小さな子供ずれの家族にも微笑を返せるようになった。

どんどん自分が癒され、優しくなっていくのがわかった。

母になる準備を終えた十ヵ月後、ジョイクは元気に産まってきた。瞳がダークブラウンで黒髪のハンサムな赤ん坊だった。

“ああ、あなたのマミーよ。産まれてきてくれてありがとう”

貿易風が優しくほほをなでる匂下がり、病室のベッドで感動の対面に感激の涙を流した。

だから、ジョイクが産まれて数ヵ月後、生まれながらに心臓の疾患があることが検診でわかつたときは頭をなぐられたようなショックがリサを襲つた。

“「めんなさい。ジェイク。丈夫に生んでもうれしくて、「めんなさい」”

リサはただ無邪気に笑うわが子になんどもそりやつてあやまつた。

“ できることなら私の心臓をあげるのに”

自分の命より大切な存在がこの世にあるなんて、考えもしなかつたリサはわが子の存在の大きさに圧倒された。

この子を救えるなら自分は喜んで命を差し出すと神様に祈った。

ジェイクは体が小さかつたが、普通の子と変わらぬ生活をしていた。時にはビーチで水遊びをしたり、緑豊かな公園を散歩したりもした。

それが3歳をすぎたあたりから病状が悪化してきた。体の成長に心臓が耐えられなくなってきたのた。

少し走ると軽い発作ができるようになつた。2度ほど大きな手術をした。

両親は2つの仕事をかけもちしながら治療費を工面していた。

感謝祭の日、ジェイクは感謝祭の駄走を食べながらリサに語つた。

“ マリー、ぼくはね、クリスマスに元気な心臓をもひうんだ”

ジェイクがいった言葉にリサは

“ そう、サンタさんきつとくれるわね”

といいながら目頭を押された。

“ハワイは雪が降らないじゃない、マリー。サンタさんは何に乗つてくるのかな？”

“サンタさんは波にのつてくるわ。サーフボードでね。”

リサは茶田の氣たつふりに立つ。

“くえ、サンタさんつてサーフィンできるんだ。すばらしいね。”

“そうよ、魔法が使えるんだもの”

“トナカイとか、ソリもサーフボードに載せてくるのかな？ プレゼントがしょびしょになつちやうよね”

リサは笑いながら立つた。

“言つたでしょ。魔法なのよ。だから濡れないの。”

“そつか、マジックなんだね。サンタさんに会いたいなあ。ああ、でも寝てないと心臓交換できなによー。”

“わうね。わあ、ジョイク、マリーが作ったターキーもつと食べて。”

リサは明るく言いながら、小さなジョイクの願いをサンタさんが本当にやつてきてせえてくれたらどんなにすばらしいだらつと願つた。

ジョイクは自分のために働きすめの両親を見てこんなこともいった。

“マリー、僕の性で大変だよね。じめんね。ほくの心臓がちゃんとしていれば、マリーこんなに疲れなくて済んだのこね。”

そんなジョイクといるだけでソサは心がきれいになつて清清しい気持ちになるのだった。

“いいのよ、ジョイク。私あなたのマリーでいることが幸せで仕方ないの。

マリー、あなたに会えるの何年も待っていたのよ。一緒にいれてこんなに嬉しいことはないわ。”

ジョイクは病気を持つていてもいつも前向きで明るかった。人のことばかり気にかけている愛に満ちた子供だった。

ある年の学校のスポーツティーの日、  
フィールドの片隅で、ジョイクは激しい運動ができないので見学することにした。

ジョイクが座りながらみんなの支度を見ていると、すでに太りすぎて運動が嫌いなマイケルがジョイクに近づいてきて言った。

“いいな、ジョイクは走らなくてすむじゃない。僕、やりたくないんだ”

マイケルは本当に走りたくないみたいだった。ジョイクは友達が多かった。

優しくて何か話を聞いてくれるジョイクはみんなの相談相手として尊敬を集めていた。

マイケルもそんなジョイクに愚痴を聞いて欲しくてやつてきたのだ。

“ 本邦にひりやましこよジョイク。 ”

隣にひかつと座つてため息をつくマイケルにジョイクは言った。

“ マイケル、ぼくはわ、毎晩神様に祈つてゐるんだよ。走つても平氣な体になれますように。 ”

マイケルはさ、僕が毎日欲しがつてゐるといつても素敵なものを持つてゐるんだ。

僕の望みをもう叶えてもらつて。すいことじやない？ ”

“ ふーん、走れるつてそんなにいことなのかな？ぼく走るの嫌いだから。 ”

“ 嫌いでもさ、走れるつてことはすいことだよ。それだけで宝物だ。 ”

“ そつか、そういうもんかな。 ”

しばらくフィールドを走る友達を眺めていたマイケルがふと叫んだ。

“ そうだな。なんだか僕、走れるつてことがとつてもいことな気がしてきたよ ”

ジョイクは素直な友達に嬉しくなつて言つた。

“ マイケル、遅くてもぼく応援しているから。楽しんで。 ”

ジョイクに言つられてマイケルも笑顔になつた。

“ オッケー。ジョイク。僕走つてくるねー。遅いけどね ”

“ ははは。遅くてもいいんだ。風を楽しんで。ジャストエンジョイ ! ”

ジョイクが明るく声をかける。

マイケルは本当にどこどかと走つていった。

その日、うちに帰つてからジョイクはリサに言つた。

“ みんな普通に健康だとどれだけありがたいことかわからないのかな。 ”

僕なんて健康さえ手に入れば他に何もいらない、ぐらいなの。僕は小さなことでも人一倍嬉しいからラッキーなのかもな。毎日、朝マミーに会えるだけで時々泣きたくなるほど嬉しいんだ。今日も無事に会えたつて。 ”

“ ああ、ジョイク。あなたに毎日会えて、マミーもどれだけ嬉しいか ”

りさはジョイクを抱きしめた。小さな幸せに溢れた暖かいひと時だつた。

ジョイクは母親思いの優しい子に育つていった。

学校に行くと、学校の庭に咲いていたといつてはプルメリアの花を持ち帰つたり、

“ マリー、僕が持つてあげるよ。 ”

と小さな手を差し出して重い荷物を持ってくれようともした。

急なスコールに降られると

“ マリーがぬれちゃう ”

といって、大きな葉っぱをとつてきてリサにかざしてくれたりもした。

毎日、ジェイクと過ごす喜びでリサは自分の心が洗われるのを感じていた。平穏な日々は長く続かなかつた。

ジェイクが9歳になろうとしていたとき、大きな発作がジェイクを襲い、そのまま昏睡状態になってしまった。

意識が戻らないまま、祈るようになってしまった日々はもうすぐ一年になろうとしていた。

心身ともにリサは限界に近づいていた。

もう、楽になろう、ジェイクと一緒に私も行こう。

そつ思つてチューブに手を伸ばした瞬間、

テトが入ってきたのだった。

## 天使が天に帰る日

“ジョイクは私の生きがい、

私にたくさんの愛をくれたんです。

だからなぜ、神様はこの子にこんな不運をと恨んだこともう一度や一度じやありません。”

“恨んじやだめだよ。この子があなたを選んで産まれてきてくれたことに感謝しなくちゃ。

すばらしい幸運だったのだから。

ピュアソウルの子供をもてるなんて、ものすゞくラッキーなことだ。

いいかい。人間の死を人間が決めるることは許されていないんだ。覚えておいて。どんなときも。”

そういうと、テトは天に向かつて祈り始めた。

“そうか。この子はね、どうしてこの世にまだ残つていると思つ?

自分が死んだあと、あなたが後を追つて命を絶つてはいけないと。そのメッセージにあなたが気づくまではいけないと残つてくれているんだよ。

痛みに耐えながらね。

早く楽にしたいならあなたが気づかなくてはいけない。

彼は一度死ぬけれど、魂は天に戻るよ。

そして、また産まれる。

人は「この世の死を恐れず、命は繰り返す。永遠にね。

そして、ピコアソウルを田指す。

そのあとは人間を超える。

やつこつ風にできているんだよ。

すべては神のもとに行く。

「」を開放して、「」のナのメッセージが聞こえるはず。

テトはそうじうと、母親の胸をそつとなでた。テトの光がすつと母親の胸に入つて消えた。

“ ほり、手をかざしてこらん”

ちこさなおでこのあたりに母親がそつと手をかざす。

“ ああ。。ジョイク。聞こえるわ。夢にまでみたあなたの声。あなたの笑い声。あなた、ママと念えて幸せだった?”

そして、母親はほりほりと涙を流した。

“ そう、わたしもよ、ジョイク、

アイラビュー。

わたしの子供に生まれてくれてありがとう。わかった。

わかった。ママ、死んだりしないわ。

あなたが消えないとわかったから、

そう、ママを見ていてくれるの？

ありがとう。ジェイク。もういいのよ。ママは大丈夫。

そういうと、母親は最後にしつかりとジェイクを抱きしめた。

“一端、さよならね。ジェイク。ありがとう。”

つきものが落ちたように穏やかな顔になつた母親の肩をジルはしつかり抱き寄せた。

ジェイクの体がぴくつと動くと、ぴっぴと電子音を立てていた機会がぴーと長い音をたてた。

リサもジルも神聖なものを見るように少し離れて見守る。

ジェイクはいった。体から抜け出た魂はやっと痛みから解放され、天に帰ったんだ。

ジョイクの体から真っ白に輝く光の玉がすーっとてきた。

目の高さまで上るとぴかっと一瞬田のくらむような光を放ち一筋の光が高速で天にむかって昇つっていく。

“ ジョイク。みていてね。ジョイク。マミーがんばるから。 ”

その光をみながらリサは生き抜く誓いを立てた。

ジョイクの胸元には一筋のかげりもない、恐ろしく透明な水晶のようなちいさな玉ができていた。

これがピュアソウルの結晶だ。

純度の高い愛の結晶。

テトはそうじつて、少年の胸元から持ち上げるとジルに渡した。

人として産まってきた小さな天使のピュアソウル。

それはジルの手の上で痛いほど純粋なパワーを放つていた。

自分に少しでも邪心があつたなら、触れたものを溶かしてしまつようなパワーだった。

ジルは完全にもてあましていった。

“ テト、僕はこれを持っていて大丈夫かな?なんだか怖いのだけれど。 ”

“恐れることはないわ”

その様子を見ていたテトはいった。

“きちんと持っているじゃないか”

テトは少年のピュアソウルを不思議そうにながめているジルを見ながらこう思っていた。

ピュアソウルを普通に持てるひとはやっぽりこいつ、ピュアソウルなのか。  
信じがたいな。

ピュアソウルは少しでも邪心があるものには触れることがきできな  
い。

純度の高いソウルはそれだけ強いエネルギーを持つ。

とても普通の人間が近寄れるものではないのだ。

それを証拠に少年の母親は涙を流しながらベッドで氣を失ってしま  
つている。

テトはすこし暗示をかけた。テトはリサが氣を失っている間にマナ、  
生命の力を充電してあげる。

リサは憔悴しきっていた。これで次日覚めたとき、多少は体が楽な  
はずだ。

ピーという電子音もすでに聞こえない。病院の関係者すら一人も部  
屋に入つてこない。

ピュアソウルの結晶は不純の多い人間には強すぎるので。

人は苦しいはずのこの世で長生きすることを望む。けれど往々にして魂のエリートは早く旅立つ。

この世の役割を早く終え、自分の課題を早くクリアして帰っていく。この子のように子供のうちに帰ってしまう子はまさに天使の生まれ変わり。

短い人生だが恐ろしく影響力を残し、周りの家族の魂を清めて帰つていいく。

今は悲しみにくれるこの母親も天使に選ばれた魂。乗り越えられる力を秘めた強い魂をもっているのだ。

人はその力量に応じて課題を決めて産まれてくる。

だから乗り越えられないことは初めから起きない。悲しみも、苦しみもすべては自分の魂を磨くためにやつてくる。

磨ぐ。小さな傷をたくさん作って輝かせる行為。傷がなければ魂は永遠に光らない。

人生で一番恐ろしいことは何も起きないことなのだ。

ジルが心配そうに言った。

“この母親はこの子がいなくとも大丈夫だろ？

“誰かがいないと生きられないなんて依存でしかない。

孤独を恐れなければ孤独になることもない。

人は一人では生きていけないけれど、それはそれぞれがきちんと独立した上で助け合つということだ。

まずは自分だ。誰かに依存している限り、本当に幸せにはなれないんだ。

離れていても魂に結びつきは変わらない。この人も子供から自立しなくてはいけない。

テトが諭すように言つた。

自立と依存。

誰もが心のよりどりを求める、見つけるとそれに頼りすぎてしまう。

“執着してはいけないんだ。

人へも物へも。執着を捨てると本当に大切なものが見えてくる。

そして心は自由になる。

離れていても大切なものは側にあることに気づく。

ジェイクはただ息をしていればいいわけじゃない。

ジェイクの死を受け入れればジェイクの魂は自由になつてより母親の側に居られるんだ。

“そういうものなのだろうか。”

ジルは幼い少年が死んだといつ痛みを引きずりながら語った。

生に執着するのは生きている動物なら皆あるひとのよつこも思える。

“ 本当は自由な魂を自分で壁を作つて檻に入れている。

人間つて不思議だ。苦しみですら自分で作り出すんだ。それは趣味と言つてもいい。

”

“ 趣味？”

“ 苦しまないと魂が成長できないと思い込んでいたとしたら間違いだ。

物事はどうえよ。心はありよつだ。

楽しんでいたつて進化はできる。それなら笑いながら生きていた方がいいだろ”

悩みや不安のない妖精といつ生き物をつべづべ羨ましことジルは思つた。

テトはいつだつて楽しげで幸せそつだ。

自分が死ぬときでさえ、テトは微笑んでいるのではないだろつか。やつと家へ帰れると。

そつと病室をでて車に乗り込むときジルはぽつつと語つた。

“ テト、この世は不思議なことばかりだよ”

“ ははは。はじめから全てを知りうなんて傲慢なんだ。  
知らないことは必要になったとき、絶妙なタイミングでわかるよう  
にできている。

もっと見えないものに敬意を払わなくては。人の眼に見えるものな  
んて世の中のほんの少しにすぎないのだから”

精悍な顔立ちのテトは手のひらに乗るほど小さいのに、  
ジルにはとても大きくみえるのだった。

さて、次はマウイだ。テトが言った。

## サーフィンの為に

“ ジュイクの時は、緊急事態だったから、特に説明がいらなかつたな。

普通に近づくときはどういう感じでいったらいいかな。

テトが始めてジルを頼つたような言い方をしたのでジルは少しうれしくなる。

世界を悟つたような妖精よりも人間の扱い方は僕の方が上手い。

“ 何事も経験を次に生かさないとな。

意外とまじめなテトがジルにはなんだかおかしかつた。

“ 飛行機で行こうか。

“ だからさ、瞬間移動もう一度しようよ。

ジルが言つた。

“ お前そんなに寿命を縮めたいのか？”

“ いや、だつてさ、寿命が縮んだ実感もないし。

本当なのかな。害がないようなきがするし。便利だし。

ジルが移動を面倒だと思う気持ちもわかるが、肉体を持つ人間になんども使って良い訳がない方法だつた。

“ うるさい。俺は飛行機にのりたいんだ。 ”

“ ・・・・ そうなの？ 飛行機が好きなの？ ”

“ ああ。 ”

不機嫌そうにテトが言つ。

“ わうなんだ。 それなら乗つてもいいけど。 ”

ジルが面白そうに言つた。

飛行機に乗つている間も、ジルはテトに

“ ほり家があんなに小さく見えるよ。 ”

とか、

“ テト、 飛行機に乗れてよかつたね ”

と子供によつに扱つて扱つてふてくされていた。

まったく、 普段から空を飛んでいる妖精が飛行機に乗りたいわけないだろ。

心の中で悪態を付く。 気づけよ。 鈍感なんだから。

オアフ島とマウイ島は飛行機であつと聞だ。

都会的なワイキキやダウントウンを持つオアフ島と違い、  
のんびりしたマウイはメインランドから来る余暇を楽しむ観光客に

は大変な人気の島だ。

この冬の時期はザトウクジラが6000頭もアラスカからやつてきて、雄大な姿を見せてくれる。カフルイ空港に着くとすぐレンタカーを借りてハナハイウェイをかづ飛ばす。

テトに案内されてついたのは海を眼下に望む小高い丘にたつた小屋と言つた感じの質素な家だつた。

すでに壁の木は海風にやられ所々白いペンキがはげて朽ちている。眠ればいいんだとこの小屋の主人に言われている気がした。

“ この人はサーフィンするために生まれてきたピュアソウルだ。 ”

“ それだけの目的で生まれてくる人もいるのかい？ ”

“ 生まれて来る目的はさまざま。このソウルは本当にサーフィンが好きだつたみたいだな。 ”

強風に煽られながら、見知らぬ家を訪れる不安にノックを躊躇するジル。

“ ノックしろ。そして神の使いつて言え。 ”

まったく、経験を次に生かして自然にするんじやなかつたのか。ジルはテトに関心した自分を浅はかだと反省した。妖精があれこれ計画し計算して何かを言つわけないか。

“ あのせ、そんなこと言つて、またクレイジーだと思われるだろ。 ”

テトは眞実を伝えるだけだとまだぶつぶつ言つている。

“僕がなんとか上手く言つてみるよ。”

ジルはそういった。

“あなたがサーフィンしている所を取材に来たとかいつてみるか”  
ジルは海風で煽られている古びた木製のドアをノックした。

“誰もいみたいだ”

ジルが拍子抜けして言つ。

“もうすぐ帰つて来るだろ。ここで待つていよう。”

テトが言つので車の中で待つことにする。

“ああ、待つならコーヒー買つてくれればよかつたな。”

テトが人間の親父のよつなことを言つので思わず笑つてしまつ。

“妖精も疲れたりするの?”

“あんまり、しない。”

テトが言つた。

“眠くなるときはあるけどね。”

“退屈はするの?”

“退屈?しない。世界の全てが美しいのに何が退屈ことがある?海を見ているだけで、風を感じているだけで日の光を浴びているだけで楽しくてしかたない。”

テトはそう言った。ジルも待つことを楽しむことにした。

海を眺める。青い海。強い風を感じる。  
腕を広げたら飛べそうなくらい強い。

日の光を感じる。ハワイの日差しは強くそして優しい。

そんなことをしていたら、ここにこうしていられることがとてもありがたい気持ちになってきた。

“隙をみて心を洗うんだ。色々なことに感謝して、有難うって呴くと心をクリーニングできる。

自分の心のありようでいつでもそこは天国になる。”

テトは楽しそうに言つた。

“天国とか地獄って本当にあるの？”

“あるよ。心のありようだ。人の場合、心がすさんで、誰かを恨んだり、憎んだり、攻撃的になつてている心が地獄。  
戦争なんてしているときは心が地獄になつている人がうじやうじやいで、絶望が多くて妖精がたくさん死んだ。

だんだん時代が進んで、螺旋状に魂のレベルが上がつてきているから、妖精も少しずつ増えた。

人の心が穏やかで愛に満ちて感謝に溢れている状態が天国。

人生のうちでどの状態が長かったかでその人の魂のレベルが決まる。

魂は一つ残らず皆上を目指している。

そういう風にできているんだ。

”

“魂のレベルが全体的に上がっているのだとしたらどうしてアースは人間の絶滅を決めたの？”

“タイミングかな。”

“タイミング？”

“そう、アースにしてきた人間の仕打ちは時間を経て表に出る。例えばたつた今、一つの森を焼き払つたら、その影響が色んなところに出るのは50年後とかだろ？”

先人たちのミスを今、責任取らされているっていう感じだらうな。

でもまあ、仕方ない。未熟だつた自分の魂がしたことかもしれない。人間は何回も生まれ変わっているのだから。

過去の人間の行いが今、火山が爆発するように吹き出て、アースが悲鳴をあげたつて思えばいい。

絶えられないから出した苦渋の決断だと思つよ。”

“人はアースにそれほど酷いことをしたのかな？”

“そうだな。まあ、やりたい放題だつたからな。”

妖精はくすくす笑つた。

“ひどい問題児だ。”

“僕になんかよつ?”

小屋の側に止められた車を覗くようにその男はあらわれた。ウェットスーツをきてサーフボードを抱えてびしょぬれのままこちらを見ている。

ジルはあわてて外に出た。肩に乗つたテトをみて男は目を丸くする。

“気の性じやなればメネフネが見えるんだけど。”

目をぐるぐると見てメネフネを見ている。

“テトつていうんだ。見えるんだね。”

テトが見えるならサーフィンの取材なんて通用しないか。とジルは思つた。

“初めてみた。”

感激したように笑つた男はまだ30歳前後だろうか。がつしりと鍛えられたからだに褐色の肌。

くしゃくしゃになつた金色の髪。グレーかがつた魅力的な目。

少年のようにくつたくなく笑う。

## ピュアソウル。

テトに教えられなくても男の純粋さが伝わるような笑い方だつた。

“ ナイスツミーツコ。僕はダン。 ”

“ ハーイ。僕はジル。こつちは妖精のテト。君を待つていたんだ。 ”

“ オケ。とりあえず、シャワーを浴びてくるから、家で待つていて。コーヒーを入れるよ。 ”

“ ポーヒーだつて！ ”

テトが嬉しそうに叫んだ。

“ メネフネつてポーヒーが好きなのか？ ”

おかしそうにダンが言つ。

“ ああ、コナポーヒーならパーフェクトだ。 ”

“ オケ・コナポーヒーを入れるから待つていて。 ”

テトは本当に嬉しそうにぐるぐると飛んだ。テトが飛ぶたびに光が舞い散る。

“ きれいだなあ。 ”

テッドはテトをまぶしそうに見ながら言つた。

ダンの部屋の中はいたつてシンプルで生活に必要なもの意外は一切

なかつた。

壁にはたくさんの気象情報や、天気図。偉大なサーファーたちの写真や、大波の写真がぺたぺた張つてある。

色々な書き込みをしたカレンダーは12月14日の部分だけ大きく赤いペンで囲つてあり」AWSと書いてあつた。

“ジョーズ。”

ジルが呟く。もしかしてダンはジョーズに乗るのか。

ハワイアンならみんなが知つてゐる化け物のように大きな波、

通称ジョーズ。

プロのサーファーでも命を落とす危険な波だ。

人間が陸から見る事が出来る世界で最も大きな波が立つポイントがマウイにあるのは知つていたが、

ジョーズを実際に乗りにいくサーファーに会つたのは初めてだつた。

パイナップル畑が広がるのどかな田舎道を抜けた海岸の崖の下にジョーズのポイントがある。

最低でも15・2フィートの北のうねりが入らないとブレイクしない。

とてもなく大きな波なのでパドリングでのテイクオフは不可能、ジェットスキーに引つ張られながら波に乗るのだ。

もちろんマウイでも超エキスパートだけがジョーズに挑戦出来る。

ダンはその一人らしい。こんな小屋に一人で住んでいるとこりを見ると生活のすべてがジョーズを待つためにあるのではないだろうか。シャワーからあがつてくるとダンは上半身裸のままサーフパンツを履いてコーヒーを入れてくれた。

キッチンに立つダンの上半身は完璧に鍛えられていて、左の腕にはフィッシュフックのタトゥーが入っている。

フックの数だけ幸せをひっかけるといわれている幸運のシンボルマークだ。

褐色に焼けた肌を見ている限り、純粹な白人ではなく色々な国のがミックスされた混血なのだろう。

白人とアジアとヨーロッパ、メキシコ。色々な血が混ざったダンのような青年はそれぞれの良さだけをミックスしたように魅力的な人が多い。

“うーん。いい香りだ。久しづりのコーヒーだ。”

テトが出されたコーヒーに器用にミルクと砂糖をたっぷり入れるとおいしそうに飲んだ。

“つかりたいくらいだ。”

テトがしみじみ言つので、ジルとダンは笑つた。

“それでさ、”

ダンは身を乗り出すよつて手を膝に置くとゆっくつと言つた。

“僕に何か用なの？”

ダンが聞いた。用事がなくとも構わないといった雰囲気なのでどこまで説明するか一瞬戸惑つ。

“テトがさ、君のサーフайнを見たいっていつから。”

“メネフネが？僕のサーフайнを？”

おかしそうにダンが笑つた。

急に話題に出されてコーヒーをおいしそうに飲んでいたテトが迷惑そうにジルを見る。

話をあわせると田でジルが合図する。

“そうだ。ダンのサーフайнは妖精の中でも有名だから。”

初めてついたような下手なウソをテトが言つた。

“有名？妖精有名なの？”

信じられないとダンは驚いた。信じられない信じているとジルは驚いた。

“まあ、いいさ。だからジョーズの前に来たんだろ？”

ダンがカレンダーをさす。

“前にもジョーズに乗ったことが?”

ジルが聞いた。

“3年前に一度だけ。あの日数本のジョーズに乗った。忘れない興奮なんだ。神と一体になつたような。自然と対話しているような一つになつた感じ。無心で波を駆け下りていると神を感じる。”

ダンが思い出すように恍惚の表情を浮かべた。

“どうしてももう一度乗りたい。そのチャンスが来るんだ。”

“明後日だな。”

ジルが言った。

“ああ、一週間前からジョーズの予測は付くんだ。でも外れることもあるけど、メネフネが見に来たぐらいだから、きっとジョーズはブレイクするんだな。”

ダンは嬉しそうに言った。

“こんな小屋でよければ明後日のジョーズまで泊まつていけよ。”

ダンは気軽に言った。

“妖精のお客さんなんてめつたにないし。”

そういつてウインクした。そしてダンは気象情報を聞くためにラジオのヘッドフォンをついた。

“ よし、いいぞ。きっと巨大な波がジョーズにブレイクする”  
ダンは興奮していた。

“ その波で死ぬんだ。 ”

テトがジルの耳元でささやいた。一瞬でジルに緊張が走る。心臓がぱくぱく音を立てる。

“ 止めたほうがいいんじゃ。 ”

“ おいおい。お前に命をコントロールする権利はないだろ？  
俺たちはピュアソウルの結晶を集めに来ているんだぞ。死を止めた  
ら一生結晶は手に入らないじゃないか。 ”

“ でも。 ”

死を知っているのに告げないことが心苦しくてたまらなくなつたジ  
ルがテトに訴える。

“ ジル、君がそれを知っていることで苦しむのは本末転倒だ。  
どちらが先でもピュアソウルが自分で決めて生まれてきて帰つてい  
く。君が口を出すことじやない。 ”

テトはぴしゃりと言つたので、ジルはそれ以上何も言わなかつた。

翌朝、色々考えすぎてすっかり目がさえて眠れなかつたジルは日の中出と共にベッドから抜け出た。

ダンはすでに起きて、双眼鏡で波を見ている。

“ 今日も海に入るのか？ ”

“ ああ、少しだけ、後は明日に備える。  
モーター・ボートの調子を確かめて、撮影隊とスケジュールの確認を  
しないと。 ”

ダンは興奮を抑えきれないようだ。

“ もし、もしもだよ。ダン ”

“ なに？ ”

“ ジョーズで命を落とすとしたらどうなの？ ”

ジルが恐る恐る聞く。自分の中だけに抑えられなくなつていて。  
人の死を前もって知つて知つているなんてやはり恐ろしいことだった。

“ マイプレジャー。 ”

ダンがすぐに答えた。

“ 本望だ。海で死ぬなら僕は後悔しない。  
僕はね、生まれてきた目的を知つていてる。 ”

これで、サーフィン。

これをするために神様にお願いして生まれてきたんだと思うよ。

ダンはそう言ってハングルーズを胸の前に作るとサーフボードのメンテナンスを始めた。

“ そうか、本望か。

”

## アクシデント

ダンはジョーズに見せられる3年前まで、  
ワイキキで消防士の仕事をしていた。

消防士と言つても火事よりもライフセーバーのような仕事の方が多く、  
ワイキキの黄色いファイアートラックはサーフボードを常備している。

たくさんの海を知らない観光客は時にハワイの海への敬意を忘れて  
海に入り、  
波に流されたり、リーフでぞくくりと足を切つたり、毎日色々な事  
故が起きるのでとても忙しい仕事だった。

ハワイの波は引きが強く、初心者のサーファーでは手に負えないよ  
うな場所も多い。

ローカルが注意しても聞かず、どんどん沖に流されてしまつて、水  
死体があがるのも実は日常茶飯事だ。

観光の島ハワイは観光に都合の悪い事実をあまり公にしないけれど、  
南国で浮かれて海を甘く見ると大変なことになる。

波が立つ場所は底が砂ではなく岩場になつてるので波にまかれる  
と簡単に足を切つてしまつ。  
ざつくり足を切つて戻れなくなつたサーファーを救出したことも数  
え切れない。

その日ダンはオフだった。オフの日は知り合いのショッピングを手伝つ

てサーフィンレッスンをして収入を得ていた。

ダンはいつだつて海にいたかつたので幸せな仕事だつた。

簡単なストレッチと説明を終えて、パドリングの仕方とボートの立ち方を砂浜でレッスンする。

その日は、15歳ぐらいの少年と太つた40歳ぐらいの男が二人。動きが機敏な少年はともかく、ぶよぶよとした肉が海水パンツからはみ出している白人の男二人は先が思いやられた。

真剣に説明を聞く少年と違つて二人で時々私語をして笑いあうなど真剣さもない。

“あんまり無理をしないで、海に入つたら僕の指示を聞いてくださいね。”

最後に一人に言うと、わかつてゐるよとぶつきらりぼうに言った。もう一人ダンの友人がアシスタントして生徒のボードを後ろから押すために一緒に海に入る。

2人で3人を見る。それほど危険なレッスンではなかつた。

ワイキキの海はその日、それほどの混雑ではなく波のサイズも程よい、サーフィンレッスン日和だつた。ダンは少し油断していたのかもしれない。

波乗りには暗黙のルールがある。波のキヤッチは早い者勝ち、先に波をとらえた人がいたら波を譲らなくてはいけない。同時に何人もが同じ波に乗ると危険だからだ。

少年は運動神経がよく後ろからボードを押してやると2回目ですつとたつて波を掴んだ。

“ イエーイ！いいぞ。グッドジョブ！ ”

ダンと友人が後ろから声をかける。少年はサーフィンを楽しんでいた。

これをきっかけにサーファーが一人増えたらしいな。ダンは思った。サーフィンは最高のスポーツだ。

一方白人の男たちは散々たるものだった。パドリングも水の表面を数回かくだけで体重が重い為に前にちつとも進まない。波に押されるままにひっくり帰つて海水を飲み込んで帰つてくる。

“ こりや、ダメかもな ”

ダンは友人と目配せをする。

“ 一時間半たつぶり海水を飲んで帰るパターンだ。 ”

友人が皮肉たつぶりに言つたのが運悪く一人の男に聞こえてしまつたらしい。

“ お前らの教え方が悪いんだ。大体待つている時間が長すぎてなかなかトライできないじゃないか。 ”

男は怒りだした。

“ 仕方ないだろ。ちつとも言つとおりにできてないじゃないか。 ”

男の言い方にかつとなつた友人が言い返す。

“やめる。けんかするな。”

ダンが言つたが、海の男は気が荒い。友人は聞かなかつた。

“悔しかつたら一本ぐらい波に乗つてみる。”

言い放つた言葉に激情した男は少年が乗つている波を横切るようにパドリングし始めた。

“危ない。”

少年が男をよける為に進路を無理やり変えた。

数十メートル先にはワイキキのビーチを仕切るよう人工的に作られた岩の壁がある。

“ゲットダウン。波から降りろ。”

友人とテッドが少年の背後から叫んだが聞こえない。少年は一度乗つた波を逃したくないようだつた。

“くそ。”

ダンが猛烈なパドリングで少年を追いかけた。

ダンはみるみるうちに波を搔き分けて前方の少年に追いついて行く。

“ぶつかるぞ、降りろ。サーフボードから降りろ。”

後ろから声をかける。少年は

“なんだって？”と振り返るだけで降りようとしない。

“間に合わない。”

ダンは自分のリーシュコードをはずすと少年のサーフボードに飛び乗ると少年を海に突き飛ばした。

バシャーン。

ダンの体が波によって岩にたたきつけられた。

“オーマイガー。”

あたりで悲鳴が上がる。海水がダンの血で染まった。

ダンは薄れ行く意識の中、波に巻き込まれ下へ下へと体は引っ張られていく。

なすがまま。波に巻かれたら自分の無力さを感じるだけ、何にもできないんだ。自然の前に人間は無力だ。

“ダン、ダン”

友人によって波から引きづり出されて浜へ上げられる。応急処置を手早くしながら、友人は言い続けた。

“ゴメン、ダン、ゴメン。”

“いいんだ。気にするな。”

ダンは弱った意識でハングルーズを作るとにこっと笑った。結局、額と足、お腹もリーフに傷つけられて、数十針を縫う怪我だつた。

“散々だつたなダン。”

次々病院に見舞いにきたファイヤーマン仲間やサーファー仲間が声をかけていく。

全治1ヶ月。軽症だつた方だと仲間たちは励ました。

“こんな傷すぐ治るさ。”

ダンは明るく言った。

“いや、怪我だけじゃない。

今週末、お前が待ち焦がれたジョーズがやってくる。  
でもその体じや乗れないだろ。”

ダンは友人の一人が言つた言葉が忘れられなかつた。

がっくりした。

傷よりもチャンスを逃したことが悔しい。

“ジョーズ？ジョーズが来るのか。くそつ。”

ハワイにいてもジョーズに乗れるチャンスはそれほど多くない。しかも仕事を持つていればジョーズが来るときにタイミングよくマウイに渡れるチャンスも多くない。

プロサーファーたちはいろんなことを犠牲にしてジョーズを待つている。

ダンは既に3年、ジョーズに乗れる機会を逃していた。

3年前、神様のご褒美のように訪れた機会を掴んでたまたま一週間滞在したマウイ旅行でジョーズに乗つた。そのときの気持ちよさと興奮が忘れられなかつた。

“せつかく週末、ホリデーをはさんで絶好の機会だったのにな。でも次があるぞ。”

ダンの傷は順調に治つたが、ジョーズのシーズンは過ぎていった。ジョーズのシーズンは11月から3月。チャンスはそう多くない。

“俺はロマンを取る。”

ダンは怪我が治ると友人たちにそつ宣言をして仕事を辞めた。

“ おい、本気かよ。何の金にもならないんだぞ。 ”

“ 後悔したくないんだ。 ”

ダンはそういうて、ジョーズのシーズンが始まる冬、マウイに移り住んだ。トランクにはほんの少しの荷物と貯金を全部。今まで命を救つた人たちから定期的に送られてくるクリスマスカードやお礼の手紙。

それをダンは仕事の誇りとして勲章のように大切に箱にしまって、この小屋に移ってきたのだ。

## 伝説のサーファー

ダンが海へ行ってしまったのですることがなくて部屋に戻ると  
テトが木の箱の中をあけて熱心に何かを見ている。

“ なに勝手に見てるんだよ。 ”

ジルが声をかけた。

“ 見るよ、ダンが命を救つた人からの手紙だ。  
ダンは人助けのためだけに生きてきたピュアソウルだ。  
最後くらい、好きな海で、好きなこととして死んでも誰も責めないだ  
ろ。 ”

ジルがテトから手紙を受け取る。

ディアー、僕のヒーロー

ハイ。ダン

君に命を助けてもらつたマイクです。覚えてますか?  
僕が沖に流されて浮き輪に必死につかまつて泣いていると後ろから  
すーっと  
サーフボードにのつたダンが現れて、ひょいって僕をサーフボード  
に乗せると  
当たり前のようにすいーって動き出したんだ。

水をいっぱい飲んで気持ち悪かったし寒かったけど、ダンが大丈夫

だよって言つてくれて、僕は不思議と安心したよ。

浜に着くとゆつくり休んでから帰るんだよってマリーと僕にハングルーズして笑顔でサーフー ボードを抱えて去つて言ひやつて、マリーがからうづじて名前を聞いていたからなんとか探して手紙を書いています。

一言お礼が言いたかったんだ。

ダンは僕のヒーローさ。

僕も将来ファイヤーマンになりたいよ。  
サーフボードを積んだ黄色いトラックに乗つて困つている人を助け  
るんだ。

本当に有難う。

ダンへ

あなたに危ないところを助けられたクリスです。

足を切つて、海水が見る見る血だらけになつて、私は失神寸前でした。

気づいたら、あなたに引き上げられて、浜に寝かされ、足には包帯を巻かれていました。

娘と一人、やつとお金を貯めて行つたハワイ旅行であんなことになつて、あそこで命を失つていたら、娘はどうなつていたかと思つと恐ろしくて、

くてなりません。

私はシングルマザーです。あの子には私しかいないです。今、娘と暖かい暖炉の前で笑っていられるのも全てあなたのおかげです。

お礼をしたいのですが、と言つたら、あなたは当たり前のことをしただけだからといってにつこり笑いました。あのハワイアンがする手のサイン。ハングルーズといったかしら。それをしてにつこり笑つたあなたの顔が忘れられません。本当にありがとうございます。

またきつとハワイへ行つてあなたを探し出し、命の恩人にティナーをおじらせくださいね。

もちろん、あなたの家族も一緒に。ありがとうございます。

“これ全部助けた人からの手紙か？”

ジルが手紙の束を見ながら関心したようにいつた。

“本当にヒーローだな。医者より命を救つているんじゃないかな？”

テトが笑つた。

“ジョーズか。そんなに乗りたいのかな。”

遠い目をしてジルが言つた。彼を死なせたくなかつた。

“ テト、ダンはサーフィンをするために生まれてきたつていつたよ  
な？どうして分かるんだ？ ”

テッドの死に納得がいかないジルがテトに訪ねる。

“ ふーん。大昔からサーファーなんだ。  
エディ・アイカウていうサーファーを知っているか？ ”

結構有名だったみたいだけビ。 ”

“ エディー！ ”

尊敬をこめた声でジルが答えた。

“ エディーなら誰もが知っているさ、ハワイの英雄だ。 ”

“ それが彼だ。 ”

何回もある前世の一つだ。

彼が生まれ変わってダンになつてゐる。 ”

テトが言つたのでジルはびっくりした。

“あの伝説のサーファーがダンだつていうのか?”

“ああ、だからジョーズに乗りたいんだる。

エディーはジョーズにまた乗りたかつたのかな。

”

エディー・アイカウ。

マウイのカフルイに産まれた彼はホノルルで人望のあついライフガードだった。

ワイメアベイで40フィートの波に挑んだビックウェーバーとしても有名だった。

彼はカメハメハ王朝の神官の家系に生まれ、小さい頃から母の教えに習い、サーフィンに熱中し、オアフ島のノースショアでビッグウェーヴ・サーフィンが流行る頃、ビッグウェーヴ・サーファーの頂点に立った。

彼はその後ノースショアのライフガードにスカウトされ、数多くの人々の命も救った。ダンの人生とリンクする。

サーフィン競技にも積極的に取り組み、デューカ・カハナモクに次ぐ先住ハワイ人系プロサーファーの先駆けとなつた。

1978年、航海力ヌー「ホクレア」に乗り込みタヒチまでの航海に参加する。

ホクレア号は運悪く嵐に見舞われてしまう。

4メートルの高波がホクレア号の横腹を叩きつけホクレア号は転覆遭難する。

船はモロカイ海峡で遭難し、ラナイ島までやうに20キロはある地

点だった。

全員死に直面したその状況で、彼は救助を求める、1人、そうする」とが当たり前のようないつもサーフボードに乗り、パドリングで荒れ狂う海に漕ぎ出した。

その後、消息を絶つ。

彼以外の遭難者は翌日偶然通りかかった大型船に救助され、皆一命を取り留めたが、その1週間後、彼のロングボードだけが見つかり、

そこには深く深くサメの歯型が残っていた。彼の英雄的な行動と悲劇的な最後はハワイの伝説となり、死後、ハワイの英雄になつた。

その生まれ変わりがダンだというのか？

“ また海で死ぬのか。 ”

ジルが苦しげにいった。

“ そうだな。波の神が彼を迎えて来る。それが決まりのようなソウルだな。 ”

“ ハワイはまた一人英雄を失うのか。 ”

“ 大丈夫。また会える。役割があるんだ。だから生まれ変わりの周期が激しい。 ”

テトが言つたが、ジルは全てを理解できなかつた。愛くるしいダンの笑顔が頭をよぎる。

“若すぎないか？”

“そうだな。魂のエリートは意外に若く死ぬ。”

テトはこともなげに言つた。

ジルは無性に悲しかつた。たいした説明もなく初対面のジルを歓待し家に泊めてくれた。

くるくると表情を変えて笑うダンの少年のような笑顔が浮かぶ。

たくさんの人が彼を愛しているだろ？

容易に想像が付くナイスガイだ。誰もが彼と友達になりたいと思つだろ？

そんな男だつた。

## 波の神ナルオラ

ジョーズが来る朝、ダンは興奮気味で田を覚ました。

丁寧にボードのワックスを塗りメンテナンスをする。  
大波に備えてボードには錘をついた。

マリンボートを操縦するジャステインに連絡をいれる。  
撮影隊の準備も万端だ。

“ジョーズに大波がブレイクしたぞ”

早朝からサーファーたちに情報が駆け巡る。

海は世界中から集まつたプロサーファーたちで混雑していた。

“風が強くうねりが安定してない。危険だな”

ダンは波を見てすぐに簡単なライドにはならないと判断した。

よし、いくぞ。

ダンが海に入る。マリンボートに引っ張られるようにポイントへ。

海になれたダンでも恐怖を感じるほどの大波が向こうから押し寄せ

てくる。

何度見ても怖い。

ものすごいエネルギーだ。マリンボートに乗つてジョーズチャレンジ。

成功！

波の壁を白いしぶきを上げてボードが滑り降りる。自然と対話し、神に近づく無心の時間。

“ああ、この感覚を僕は待つていたんだ。”

ダンは幸せだった。

崖の上からテトとジルがそれを見守った。

“命知らずとはこの事だな。”

ジルは巨大な波に圧倒されて言った。

ダンのライディングは目を見張るようだった。あれほど巨大な波を恐怖心無しで笑みさえ浮かべながらテイクオフしたダンにサーファーから歓声が上がった。

“彼は只者じゃないぞ”

他のプロサーファーたちが目を見張る。

“ どこのサーファーだ？”

“ オアフの消防士？ 無名なのか？ ウソだろ。 ”

“ 世界一級の腕じゃないか”

瞬く間に丘にいるサーファーのなかでダンのことが話題になつた。

次々とブレイクする大波。ダンは次々とチャレンジ成功させ、一気にサーファーと撮影隊の主役になつた、7本、8本、ダンのライディングに皆釘付けとなる。

“ まるで、Hデイーのようじゃないか。 ”

白髪のハワイアンサーファーが呟いた。彼は懐かしむようにダンのライディングを見守る。

“ Hデイーのようだ。 ”

“ ほんとつだ、まるでHデイーのようだ。 ”

口々に皆がそつそつと笑う。

9本目だった。以前にも増して今日最大のビックウェーブ。

ジョーズといふ名前にふさわしい波の壁がダンの背後に迫る。

“この波だ。”

テトが呟いた。  
ジルに緊張が走る。

“ナルオラだ。”

“ナルオラが見えるぞ。”

ダンのライティングに釘付けだった観衆たちが叫んだ。

波の神、ナルオラ。

“ナルオラだ。ジョーズの向こうにナルオラが見える”

ポリネシアンの顔立ちの精悍な男の顔が波の壁に浮かび上がる。

ダンが波を掴んだ背後だった。

ダンは波の壁を滑り降りながら声を聞いた。

体の力みはない、ライティングはいたつて順調だった。

楽しい。ダンは心から波乗りを楽しんでいた。

そんな中、聞こえた太く響く男の声。神だ。ダンはすぐにわかった。その声がダンに呼びかける。

“ダン、いったん家へ帰るのだ。迎えに来た。”

ナルオラ。ハワイアンが畏怖と尊敬の念を持つ波の神ナルオラ。僕は前にもこの声に呼ばれたことがある。ダンが遠い記憶に思いをはせたその瞬間。

テイクオフ寸前波に巻かれた。ぐるぐると巻かれ、水圧に意識が遠のぐ。

“ダン、迎えに来た、家に帰るのだ。”

ナルオラの声が響く。ナルオラ。波の神。そうだやはり、僕は前にも彼にあつた気がする。

やつぱりこんな風に波に巻かれて、嵐の夜だった。波にはなんども巻かれたことがあったのにそのときも不思議と苦しくはなくて。ダンの意識が遠のぐ。

“神がじきじきに迎えに來た。”

崖の上から見守っていたテトが呟いた。

“ だめだ。ダンが波に飲まれた ”

丘にいたサーファーたちが叫んだ。浜に緊張が走る。

ダンは波に飲まれながら、心は不思議と穏やかで苦しくはなかつた。

“ ダン、迎えに来た。一緒に帰ろう。 ”

ナルオラの声にこたえる。

“ 僕はここで死ぬのですか。 ”

“ 一端死ぬ。お前には役目がある。だから迎えに来た。ただ身をゆだねていればいい ”

優しい声だった。

“ OK 。ジョーズにも乗れた。あなたに従います ”

ダンはそう答えた。そして微笑んだ。

胸の辺りでハングルーズを作つた。

本能が知つてゐる。神には逆らえないのだと。ダンの体は海の底に引き込まれた。

丘に引き上げられたダンの横には真つ二つに折れたサーフボードが置かれた。

サーフボードが折れるほどの波の衝撃だったのに、彼の顔には傷一

つなく、体も無傷に近かつた。

悲しみにくれた人々が彼を取り囲んだ。

“ また偉大なサーファーが死んだ。 ”

彼らは口々に言った。

“ 彼のライドはエディーのようだつた。 ”

“ 僕らはまた英雄を失つた。 ”

沖からあがつたプロサーファーたちや撮影クルーもぐるりとダンを取り囲み畏敬の念をこめて頭をたれる。

テトはそつと彼の胸に舞い降りると何かを祈つた。  
すーっと光が天に伸びて、純度の高いピュアソウルの結晶が胸元に  
浮かびあがつた。

数人のサーファーにはテトが見えたらしい。

“ 天使が迎えにきた ”

と涙を流した。少し後ろでその様子を見ていたジルも涙が止まらなかつた。

## 神に愛されたソウル

オアフ島に戻つてからもジルはふわふわしていた。ダンの死が思つたより思えている。

落ち込んでいるジルにテトは言った。

“ そんなに落ち込むな。役割があつてダンは一端帰つただけだ。 ”

“ そんな風に簡単に考えられないんだ。 ”

ジルは苦しそうだった。

“ こんなこと普通は人間に説明しないんだけどな。 ”

テトはそう前置きして話し始めた。

“ アースから魂の循環の一部を任せている神がいるんだ。神々の中で頂点に立つカネ。 ”

アースを支えている偉大な神だよ。カネはタイミングよく必要なソウルを生まれ変わらせる。

ナルオラはカネの指示でダンを迎えている。

つまりさ、ダンはこれから30年後、一番体力がある若々しい体を

持つてやるべき役割があつたんだ。”

“ どひこつ意味。 ”

“ まれなことだけど。ダンはあと一週間もすれば新しい命で帰つてくる ”

テトは楽しそうに言つた。

“ 神々に愛されたピュアソウルは役割が色々あつて忙しいんだ。 ”

ジルは半信半疑でテトの言葉を聞いた。ジルの疑いを見抜いたようにテトが言つた。

“ 妖精がつそをつくるとでも思つて居るのか？ ”

そうだな。テトは絶対につそはつかないだろつ。ダンについた下手なウソを思い出していくつた。

“ いや、信じるよテト。 ”

ジルはそう言つた。そうだ、信じよつ。きっとダンはまた生まれてくる。

そのころ、ノースショアのダンの実家ではダンの姉のレイナが悲しみに沈んでいた。

弟の死から一週間。誰もがダンの死を悼んで悲しみの中にいた。

レイナの幼い息子マイクもダンが大好きだった。

ダンはよくノースショアにくるとマイクを連れて海にいき、実家の愛犬チコをロングボードの前にのせ、マイクを肩車して波に乗った。

ダンは絶対に転ばなかつたのでマイクはそれが大好きで、大きくなつたら偉大な叔父のようにバー・チボーイになろうと憧れていた。

“ダン、あなたがいなくてどれほど悲しいかわかる？”

弟の写真を見ながらレイナが呟く。

“帰つてきて。ダン。私たちがどれほど悲しいか。”

ぽろぽろと涙をこぼす。悲嘆にくれて写真を抱きしめてベッドにひれ伏してレイナは泣いた。

涙に咽ぶレイナを急に吐き気が襲つた。

“何かしら。”

慌てて、洗面所に駆け込むレイナ。

“もしかして。”

レイナは自分のお腹に手をやる。

赤ちゃん。

そこへ2歳のマイクが入ってきた。

洗面所の鏡の前で口を手で押さえているマイキーを見つけて嬉しそうに近寄ってきた。

そして小さな指でレイナのお腹を指差すと言った。

“マイキーのお腹に、ダンがいる”

“ああ。”

レイナは全てを理解してマイクを抱きしめると泣いた。  
涙でぐいぐいになつたレイナの顔をマイクが不思議そうにそつとなでる。

“マイキー、悲しいの？”

“いいえ、マイク。マイキー嬉しいのよ。ダン、ダンが戻ってきたのね。”

“ さあ、次だ。うーんとマノアだな ”

テトが張り切つて言ひ。ピュアソウルを念じて探し出すのにも大分慣れたようだ。

“ なんでも経験を積むと上手くなるな。 ”

テトは実感したように言つた。

“ きつとピュアソウルの結晶を集める速度もどんどんあがるぞ。もう4つめだ ”

短期間に人の死が3回。ジルの心は沈んでいた。

オアフ島に戻つてきてから時折考え込むようなジルを励ますようにテトが言つた。

ピュアソウルのはずなのに、アップダウンが激しいな。ジルは本当にピュアソウルなのか？

間違えるはずないよな。テトが確かめるようにジルを見る。

“ でも、その前にコーヒー飲もつぜ ”

テトが言つたのでジルはスターバックスを探す。

“ 本当にスターバックスはどこにでもあるな ”

テトが関心したようにいった。

“ 妖精つてみんなコーヒーが好きなのか？ ”

ジルが言つた。

“ みんな、みんなつてさ、俺が好きなんだよ。お前ら人間も皆コーヒー好きか？ それそれだろ？ みんなさまざまだ。 ”

テトはジルの質問におかしそうに答えた。

“ 普通の人には本当に妖精つて見えないんだね。 ”

店内の人々は誰もテトに気づいてない。

“ そうだな。ピュアソウルの側にでもいないと見えないのかもな。見える見えないは俺たちにもよくわからないんだ。俺たちの状態にもよるのかも。

見つかりたくないっていう意識の時は大抵見えないみたいだし、こうやつて積極的に人間に関わろうとしているときは見え易くなつているらしい ”

砂糖とミルクたっぷりのコーヒーを堪能すると車をそのまま山に向けて走らせる。

坂道をどんどん登つていぐと山が迫つてくる。雨が多いマノアは虹

の山。

濃いグリーンが目に鮮やかだ。いつも少し雲がかかっていて、ビーチサイドとはまた違った魅力を放っている。

何より空気がおいしい。閑静な住宅街はハワイの島をいたわるような優しい白いうちが多く、ゆつたりと景色に馴染んでいる。自然を敬い、気を使って立てたような家々の庭は色とりどりの花々で飾られていた。マノアの山に手が届きそうな場所に目的の家はあった。

“代々続くかカフナの一族だ”

テトは言った。

カフナとは同祭やドクター や靈能者を兼ね備えた能力を持つ人のこと。

体を触つだけで悪い場所がわかつたり、ロハロハというマッサージを通して体のメンテナンスをしたりする医者のような役割を担つてきた。

マナを操るカフナは常にハワイアンの尊敬を集めてきた伝統の一族だ。

“カフナか。いかにもピュアソウルって感じだな。”

“ああ、この人は本物のカフナだ。そうだな。人間としては充分に生きている”

テトのその言葉を聞いてジルは少しホッとした。理屈では分かっていても若い魂が旅立つのは忍びない。

“カフナなら余計な説明は入らず僕らを家に入ってくれるかな?リ

アンの様に。 ”

“ 多分平氣だろ。半分人間を卒業しているような人だ。 ”

とテトが言った。

“ 人間を卒業すると何になるんだ？ ”

“ さまざまだよ。人間に神と呼ばれるようなエネルギー体になる人もいる。悪魔と戦う天使になる人もいる。 ”

“ 人間が天使になるのか？ ”

“ 中にはそういう人もいるな。 そういえばさ、人間が想像する天使つて妖精っぽいよな ”

テトはおかしそうに言った。

“ だいたい、赤ちゃんと羽が生えているだろ？ ”

“ そうだな。僕の中でもそんなイメージかなあ。 ”  
ジルが言った。

“ 妖精の眼から見るとさ、天使は結構ごつついんだ。 ”

テトが本当におかしそうにいった。

“ 人間のボディーガードみたいなもんだからな。悪魔と戦うんだ。結構ごつついよ。 ”

テトは天使の姿を思い出したらしくまた笑った。

“ あんな赤ちゃんでし、悪魔と戦えないだろ? ”

マッチョな天使? ジルは想像できなくて苦しむ。

“ 人間の思い込みってなんで伝染するのかな?

人間のほとんどは天使が赤ちゃんに羽が生えていると思つていてるもんない。なんでかな。本当はごつい男だつたりするぞ ”

とテトが言つた。天使がごつい男。ジルは軽いカルチャーショックを受ける。

常識つて簡単に覆るんだな。

扉を開けて中に入ると白髪を後ろに一つで束ねている深いしわの老人がロッキングチェアに座つていた。

訪問者に気づいて静かに微笑んでいる。

どうやらテトも見えるらしい。驚いた様子もなくすつと突然の訪問者を受け入れるあたりが器の大きさを思わせる。

“ アロハ。 ”

ジルがそつと声をかけるが答えない。

“ 耳が聞こえないんだ。 ”

テトが言つた。

“僕は話せるけどね。”

テトは言った。

“あの人のが聞こえるの?”

“そうだな、声が聞こえる。頭のなかで直接話すんだ。もともと神々とつながりの深い人だからね、特殊なんだけどコミュニケーショングが取れる”

テトと老人カフナの静かな会話が始まった。

その会話が聞こえないジルは何をしていいのか分からずラナイのステップに腰をおろした。

しばらくするとテトがジルの側に飛んできた

“カフナの名前はカイ。僕らが来ることも自分が死ぬことも知っていたよ。満月の夜に自分は死ぬんだと言っている。”

“明日だ。明日がフルムーンだ。”

“そうか、明日だな。今日はここにいようか?カイは歓迎するから一緒にいろいろ言つて言つてている”

“ああ、偉大なカフナと僕も一緒に過ごしたい。”

ジルはそういった。人が死ぬことに少し疲れてきていた。

短期間に3人の命を見取った。カイは死期が近い性か、いつもなんかとても静かでほとんど動かすにロツキングチェアに腰掛けている。

“ それにしてもほぼ完璧なピュアソウルだ。徳の量が半端じゃない。

”

カイを見つめながらテトが言った。

“ 徳の量？？”

“ そうさ、人に喜んでもらうことやると眼には見えない” 徳 “ つていうのが溜まつていくんだ。

魂が唯一来世まで持ち越せる財産みたいなものかな。この人は長い人生の中で数え切れないほどの人を助けてきた。

損得抜きでね。だから徳の量が半端じやない。人間の大好きなお金でいつたらミリオネアだな”

とテトがいった。

“ 徳のミリオネアか。すごい人なんだなあ。どうして耳が聞こえないんだろ”

“ 8歳の時、高熱にかかって聴力を失つたらしい。でもそのかわり眼がとてもよくて人には見えないものやマナが見えるからいいんだと言っている。

”

“ なるほど。一つ失つて一つ得たからいいんですね”

とカイに言うと

カイはジルに向かつて静かにうなずいた。

聴力を失つてからカイはいつも一人だつた。能力を授かりカフナとして生きることを選んだが、人と違うということは時にとても孤独なのだ。

けれど、カイは孤独を恐れてはいなかつた。

静かに孤独に身をゆだねるとそれは不安ではなく安らぎにさえなるのだ。

人々はカイの特殊な能力を求めて必要なときだけ癒しを求めてきた。カイはどんな要望にも誠心誠意応じた。

カイのヒーリング方法は生まれつきカフナとして備わつて いる特殊な能力もあつたが、ハワイに昔から伝わるヒーリングメソッド、ホ・オポノポノを用了した独特のものだつた。

患者は特に何をされたという実感がないので、誤解を受けることもあつた。

“カイのところへ行つてヒーリングしてもらつたのに、母の病気は治らなかつた。あいつはいんちきだ”

と心無いことを言いまわる人もいた。

ホ・オポノポノというハワイ伝統のヒーリング方法をカイは良く使つた。

ホ・オポノポノは現実に起きた全ての事柄は自分の中に原因があると考える。

カイは患者をヒーリングするのではなく、患者の悩みを聞き、この問題を持ち込まれたということはこの患者の痛みの原因が自分の内部にあると考える。

潜在意識の記憶が引き起こした問題だからと。

そのため、ひたすら自分を清める。

自分をゼロの状態に戻すことで、神格からの愛が充電され、全ての事柄が良くなるのだ。

ハワイアンマジックと呼ばれるこのメソッドは偉大なカフナに伝承されてきたハワイの秘法だ。

カイはできる限りのことをしたが、命を操れる神ではなかった。

けれどどこまでできどこまでができないのかカイにもはつきりと説明することは難しかった。

眼には見えないだけに余計誤解を産む。

カイはひつそりと生きることを選んだ。目立てばたたかれるのがわかつたからだ。

「えることは惜しまないが、奪われることを恐れた。

そして、ひたすら自分を清めることで世界を清めようとしてきた。

孤独な人生ではあったがいつも優しいものに包まれて居るような感覚があつたので不思議とカイはさびしくはなかった。

そんなカイも長い人生でたった一度、恋をした。

褐色の肌に凜とした涼しげな眼を持つサラだ。  
彼女はなぜかいつも同じ箇所の足が痛むので一度カフナであるカイに診てもらおうとやってきたのだつた。

“私の悪いところわかりますか？”

カイはいつものように何も言わず手をかざす。  
右足に悪いものがたまっているのが分かつた。

ゆっくりとチャクラをあけてエネルギーを通すと滯っていた血液が  
再びまわりだす。

そして、痛みの原因であるカイ自身の内部に対してホ・オポノポノ  
をして清めていく。

ホ・オポノポノのキーワードは I love you。ひたすら I  
love youと自分の潜在意識に呼びかけて自分の状態をゼ  
ロにする。

I love you。ありがとう。許してください。ごめんなさい。  
い。

この4つの言葉をひたすら唱える。

やがて、カイの心はまたならゼロの状態になり、神格から愛が充  
電し始める。

ゼロの状態になると靈感はさえ、ビシすればいいのかを伝えてもら

えるのだ。

サラの足は3・4回、カイの元を訪ねるとすっかりよくなっていた。

“ ありがとうございます。カイ。あなたに言われたとおり、水を飲んだだけで、本当に痛みがなくなつたわ。あなたつて本当にすばらしいのね。 ”

サラの喜ぶ顔をみてカイも幸せになつた。

サラはカイのもとに来る理由がなくなつてしまつたけれど、なんだかカイが気になつてしまつたがなかつた。

“ あんなに優しさに包まれたような人がいるなんて ”

カイもサラが気になつていた。カイは毎日、手紙を書いた。

サラ、

僕は今日、おいしいチキンを食べたよ。

君は何を食べた？

今日も星がきれいな夜だね。

カイ。

サラ、

今日は隣のおばあちゃんがヒーリングのお礼にポキをあいていったよ。

おいしかつた。

なんだか僕はいつも食べ物の話を書いているね。

カイ

カフナという不思議な職業のわりにいつも食べ物の話が書いてあるのがサラにはおかしくて、カイとはすぐに仲良くなつた。一人の交流はいつも手紙だった。

カイ

カイがいつも食べ物の話をするから、私、カイの手紙を見るとおなかが減るようになつちやつたわ。今度おいしいものもつて行くわね

サラ

サラ

君の好きなものってなんだる?

僕の好物はね。よく熟れたマンゴーとアボカドのサンドウイッチ。僕が好きなものを書いたからつてそれをくれつてことじやないよ。

カイ

オッケー。マンゴーもつていくわ。リクエストには答へなくちや。

サラ

カイ

若い二人が恋に落ちるのにそれほど時間はいらなかつた。

二人はツインソウルのように仲のよい夫婦となつた。  
そしてサラによく似た瞳を持つ娘を授かつた。二人はナタリーと名づけた。

ナタリーはすくすくと成長し、

カイはカフナとしてどんどん能力を高めていた。

代々のカフナがそうであるように、歳を重ねることにカイの行いは尊敬を集めた。

カイのことを受けなす人は次第にいなくなつていった。  
ハワイの有力者もカイのもとに助言を求めてきた。

カイは政治的なことには一切関わらず、人々の小さな悩みにも心を碎く本物のカフナとなつた。

人を癒し、徳を積むことでまた新たなエナジーを得る。  
カイは人を癒すたび自分も元気になるのを感じていた。  
充分幸せに、そして充分に生きた。

数年前、サラは先に天に召された。

次は自分の番だな。

カイはふとそれが近いことに気づいた。

いつなんだろう。瞑想していると頭の中にふとビジョンが見えて、  
今度の満月だとわかつた。

そして、満月の前日、メネフネが家にやつてきた。明日なんだ。力  
イは確信した。

ナタリーを呼ぼう。

カイは決めた。お別れに愛する娘を。

ワイキキで駆け出しの歌手として働いているナタリーは週に何度も父親の元を訪ねたが、今日はその日ではなかつた。

カイはナタリーの側で逝きたかつた。カイは強く思う「ことで小さなことは実現できた。

マノアの山がすっかり闇に包まれたナタリーがやつてきた。耳が聞こえない父親への念図はハンドライトをちかちかつと点滅させると決まつていた。

車の中からライトを点滅させながら細い山道を運転してナタリーがやつてきた。

カイは嬉しそうにロッキングchoraをゆすつた。

“ダディーわたしよ。アロハ。なんとなく呼ばれた気がしたの”

ナタリーが入つてきた。

“あら、お客様ねー。だから呼んだの?」んばんは。始めて。”

ジルに丁寧に挨拶をする。なんできれいな声だわ。ジルはアロハと答えながらそう思った。

“あつ。メネフネ。なんできれいなのかしら。私はじめてみたわ。

眼を丸くしながらテトを眺めるナタリー

“テトが見えるんですか？”

ジルが穏やかに聞いた。驚きはしなかった。カフナの娘なのだから。

“うん、普通にアロハ着てる。おもしろーい。羽もあるのね。きれいねー。”

テトもナタリーに挨拶をする。

“アロハー、ナタリー。”

“まあ、名前を知っているの？光榮だわ。メネフネと話せるなんて。感激よ”

ナタリーははしゃいでいる。

“君のパパと話したから。”

“ダディーと話せるの？すごいわ。”

ははは。一人とも楽しそうだ。

いい夜だった。ジルはこのまま静かな時が續けばいいのと思つた。カイも死なず、ナタリーも泣かない。皆が笑つてゐる静かな夜が續けばいいのに。人の死に少し疲れていたのだ。

“それで、パパの声はどんな声？声が聞こえる？”

“声か、そうだな、少しハスキーだけど魅力的な声だよ”

“やっぱり、私の声がハスキーなのはパパの遺伝ね。”

ナタリーが嬉しそうにいった。

ナタリーの声は本当にすばらしかつた。少し切なくて、ハスキーだけれど伸びやか。

“君の歌はすばらしいだろうな。”

“まあ、ハワイにいて私の歌を聴いたことがないなんて、あなた本当にハワイアン？”

ナタリーにからかわれてジルは少し気まずくなつた。

“どうして今まで聴いたことなかつたのかな。失礼だつたね。ごめんよ。”

“なーんて、うそよ。気にしないで。まだ駆け出しだもの。”

ナタリーが明るくいつた。

ダディーなにか食べる？

ナタリーが手話をつかってカイに話しかける。

そうだな。月がきれいだから外でバーベキューでもしようか？  
カイがそう言つたらしい。

気をつけていれば、ジルにもカイの声が聞こえそうだった。そんな  
錯覚をさせるぐらいカイは自然だった。

“ オッケー。すぐにしたくなるわ。 ”

ハワイの人は本当にバーベキューが好きだ。  
庭に出るカイの家のほかにもバーベキューを楽しんでいる家が何件  
かあつて、おいしそうな匂いが漂つていた。

パンの木の大きな木の根元にグリルを置いて、ナタリーは手際よく  
準備をする。

今夜の月もきれいだった。ほぼ丸の明るい月だ。  
月明かりが明るいので、庭は思ったより暗くはなく、ライトがなく  
ても足りるほどだった。

明日はフルムーンだ。

バーベキューで手馴れた様子で肉を焼いたりしながら、ビールを片  
手にナタリーが歌つた。

“ ハーナレイ。ハナレイムーン ”

切なく響く月夜の歌。

“君は大スターになるよ。”

ジルはお世辞抜きでそう思つた。冷えたビールがおいしい。

“ほんとここ？嬉しいわ。自分を信じれば叶つてダーティーもいつもいつの。”

お前はきっと歌で皆を癒す為に生まれてきたんだねって。うちは代々ヒーリングの一族だから。”

“そうだね。きっと歌でヒーリングするために生まれたんだ。”

ジルは確信したように言つた。優しい夜だった。

カイは自分でバーベキューをと言つたわりにほとんどロッキングチニアから動かず、食も進まなかつた。

“もう、ダーティーが言つたのにあんまり食べないのねー”

ナタリーは文句とは裏腹に楽しそうに笑つた。

よく笑う娘だ。笑い声は人を幸せにする。  
悲しくても無理にでも笑つていれば幸せになる。

本当の幸せは後からついてくる。そう信じて生きていけるような笑い方だった。

カイの最後の大仕事は、今から数年前、ハワイの精神病院でカウンセラーを頼まれたことだった。病院のスタッフたちも患者たちにはほとほと手を焼いていて、すぐに辞めてしまい、患者たちの暴言や暴力もひどく、病院はすんだ状態だった。

カイは赴任すると、職員のミーティングに出るわけでもなく、患者と直接あつて手当をするわけでもない。しばらくふらふらと過ごした。

何もしないこのカフナを初めはみな不思議そうに眺めていたが、カイがいつも楽しそうなので、すぐに入気者になった。耳が聞こえないカイとは手話や筆談がメインだったが、すんだ病院の光のようにカイはいつも朗らかで楽しそうだった。

やがて患者たちにも不思議なことが起きはじめた。

暴力的だった患者は次第に穏やかになり、スタッフの勤務態度も熱心になった。

詰まつてばかりいた病院の水道パイプやトラブル続きだった電気系統もほとんど問題を起こさなくなつた。

“あのカフナは何をしたんだろう”

病院関係者は首をかしげたが、激的な変化に歓喜した。

カイは、赴任してからずっとホ・オポノポノで病院や患者、施設の全てを清め続けた。

カイは自分自身を清めることで患者の心へも影響を及ぼす。

キーワードはLōvē。

この不思議なヒーリング方法の効果はてき面だった。

軽度の患者たちは次々に退院していった。

重度の精神障害を持つた暴力的な患者は足かせをはずされ、自由時間を探しむまでになっていた。

スタッフは余剰になるほど集まり、病院は見違えるような活気を取り戻した。

スタッフたちはこのヒーリングに、ただただ驚いた。

“まさにハワイアンマジック。カイは奇跡を起こした”

口々にそう褒め称えた。病院が清められ、もう大丈夫だと感じたカイはそつと身を引くようにカウンセラーを辞任した。

魔法使いのようにもてはやされ、有名になりすぎることを避けたかったのだ。

カイはいつでもひつそりと平和に生きることを願った。

耳が聞こえないカフナカイにとつて静寂は心が安心する場所だったからだ。スタッフには手紙を残した。

親愛なる私の友人たちへ

私が去つたあとも、ぜひ、ホ・オポノポノを続けてください。

問題はすべて自分自身の中にあります。

I love youと呟え続けてください。

自分自身の記憶をゼロにして、神格からの愛を受け取つてください。いつも、自分をクリーンにして愛で満たしていればすべての問題は解決されます。

スタッフたちは今も口癖のようになにかI love youと呟えている。

いよいよ満月の日、カイはベッドから起きれなくなつた。

“ダーティー、急にこんなに弱つてしまつて、どうしたのかしい。”

心配そうなナタリーにテトなんでもないことにテトはこつた。

“カイは満月の夜旅立つよ。”

妖精はの明るさは時に無神経だ。

“満月つて今日じゃない！”ナタリーが驚いていった。

“ダディーが言つたの？カフナは自分の死もわかるつていうの？残酷だわ。”

ナタリーが涙ぐみながら言つた。

“ そ、う、か、な。準備が、でき、て、幸、せ、だ、る。君、に、も、会、え、る、し、カ、イ、は、充、分、に、生、き、た。人、間、で、8、0、年、生、き、た、ら、充、分、だ、ろ、？”

“ 充分つてことないわ。私はできるだけ長生きしてもらいたいもの”  
ナタリーが必死で訴える。

“ あんまりよくばらないことだ。引き際つてのも大切だよ。  
特にカイはピュアソウルだ。引き際は心得ているよ。君に迷惑がか  
からぬよう、そして静かに。”

“ ああ、なんてこと。迷惑だなんて、迷惑をかけられても私はダディーが生きていた方がいいのに。”

ナタリーはしきしき泣き出した。

愛しい人を引き止めたい。ジルはナタリーの気持ちがよくわかつた。  
けれど、カイが本物のカフナなら、きっと今日旅立つのは間違いの  
ないことなのだろう。

やつぱりこうなるんだな。ジルは少しがつかりした。  
そのまま楽しい時が続けばいいと願つたのに。ナタリーは結局泣いて  
いる。

それにもしても、満月に見守られた静かな夜。カフナの旅立ちにぴつ

たりじゃないか。

テトはなぜナタリーが泣いているのかよくわからないようだった。

“ 幸せな死を喜ぶつてこと人間には無理なのか？ ”

ジルに聞いた。

“ 田の前からいなくなることに耐えられないんだ。 ”

“ そうか、そういうえばセイラもそういうっていたな。 ”

人間でいうのは恐ろしく短い時間の感覚しかないのかもな。

待つていうことができないんだ。また会えることも信じられないみたいだし ”

“ なかなかそう思えないな。 ”

ジルは人にはそれは無理だと思った。

“ ナタリー、きっとダディーは君の笑顔が好きだよ。 ”

ジルはそっとナタリーに言った。

“ さびしいわ、ジル。ダディーを失つてしまつ日が本当に来るなんて。 ”

ナタリーは泣いた。それでも少し泣くとナタリーは決意したようになりに寄り添い、  
セレナーデを歌いながら微笑んで見せた。

カイも時々、娘の髪を優しくなでて微笑んだ。痛みも恐怖も感じていないうちに聖者の微笑みだった。

少しずつ弱っていく呼吸の中でカイはテトを手招きすると何かを云えた。

“ さうか、どうしたらいいかな。 ”

テトが少し考えていた。

“ なんていったの？ ”

ナタリーがテトに聞く。

“ 最後に一つだけ我慢を聞いてくれって。君の声が聞きたいんだって。 ”

“ まあ、私の声を。 ”

ナタリーが声を詰まらせる。

“ 一つだけ方法があるな。 ”

“ 何十年も聞こえなかつた耳を一瞬だけ復活させる方法が。 ”

テトがいった。

## 最後の願い

“ でもな、痛いんだよなあ。生きている間に聞かないダメなのか？”

テトがカイに確認する。

“ 今聞きたいか。仕方ないな。本当に我慢だな。仕方ない、やるか。”

テトがぶつぶつ言いながらそういうと、カイの眼が輝いた。

ナタリーの声が聞きたい。愛しいわが子の声。

どれだけ聞きたいと思つただろう。

君の笑い声。君の泣き声。僕を呼ぶ声。色々なことを話したかった。

カイがテトに訴えた。

“ わかったよ。カイ。”

決心したようにテトがいった。

“ ジル、僕の羽の一部を切り取ってカイの右耳に入れて”

“ 羽を切り取る？？痛くはないのかい？”

“ 痛いこきまつて いるだろ ”

怒った様にテトは言つた。

“ 君は指を切られて痛くないのか?  
くだらないことを聞かないで早くやれよ ”

テトは本氣で怒つて いるようだ。  
光がくるくるまわつて いる。

ジルは痛みを我慢して いるテトをなるべく傷つけないようこ羽の一  
部を小さく切り取つた。

“ ふう、 さあ、 早く右耳に入れて ”

痛みに耐えるようなテトの声に急かされてカイの耳に羽を押し込む。  
テトは痛みに耐えて少し震えている。

テトの羽を耳に入れると、 カイが涙を流し始めた。

自分の耳を指差して、 聞こえる。 聞こえる。 といつ合図を必死にし  
て いる

“ ダディー 聞こえるの? 私の声が? ”

ナタリーが涙声で言ひ。

ああ、なんて素敵な声。

サラの声に似ているのかな。僕はなんて幸せなんだ。  
愛しい娘の声が聞こえるなんて。ナタリー、あの曲を歌つて。

虹の歌を。

僕が子供の頃聞いて唯一覚えていた歌なんだ。

テトになのかナタリーになのかわからないが必死にカイが訴える。

“ナタリー、虹の歌を歌つてつてぞ。”

テトが言つ。

“虹の歌。ああ、あの曲ね。”

立ち上がつたナタリーが静かに歌いだす。

“S o m e w h e r e o v e r t h e r a i n b o w . . .”

こんな歌詞だった。

虹の向こうのどこか空高く、子守唄で聞いた国がある。

虹の向こうの空は青く、信じた夢は現実となる  
いつか星に願う、目覚めると僕は雲を見下ろし、

全ての悩みはレモンの雲となつて

屋根の上へ溶け落ちていく  
僕はそこへ行くんだ。

虹の向こうのどこか遠くへ

青い鳥は飛ぶ

虹を超える鳥たち、

僕もそこへ飛んでいくよ。

優しい歌声が月夜に響く。

ああ、虹の歌。

僕が唯一覚えていた虹の歌。

ナタリー、子供の頃、いったよね。

君は虹のふもとに何があるか見たいといつて、  
マノアにかかる虹のふもとまで何度もいったね。

今度虹を見たら僕を思い出して。きっと虹のふもとにはダディーが  
いるから。

ナタリー愛しているよ。ずっと見守っているからね。だんだんカイ  
の意識が遠のいていく

“Somewhere over the rainbow . . .”

“この歌の通りだ。カイはそこへいくよ”

テトが家を懐かしむようにこういったので、ジルは静かな死を祝福  
できる気がした。

そんなに素敵な場所に帰れるなら、80年生きて帰れるなら、最愛  
の娘に看取られ、

その声を聞きながら静かに旅立てるならこの死は祝福すべきかもしない。

ジルの心も穏やかになった。立て続けに死に遭遇して疲れた心も癒されたようだつた。

ナタリーの歌声とともに、カイはナタリーに静かに微笑むとすつと息を引き取つた。

ナタリーは静かに涙を流しながらけれど歌をやめなかつた。

テトがカイの胸元にすつと手をかざす。

すーっと一筋の光がカイの胸から天へ伸びて吸い込まれた。

“ダディー。ダディー。どうだつた私の声。聞こえた？虹を見たらダディーを思うわ。

マノアは虹がたくさんかかるからダディーにたくさん会えるわね。”

歌い終えてナタリーがカイに話しかける。

静かな死だつた。

偉大なカフナにふさわしい美しい死。

苦します、静かに旅立つた。

ジルの眼にも清らかな涙がこぼれた。

僕もこうやつて人生を終えられたら幸せかもしれない。

悲しいけれど、満ち足りた死。

こんな死もあるんだな。カイの優しい表情をみているとそんな風に

思えた。

幸せな死を喜べないのか？テトが言つた言葉を頭の中で繰り返す。

こんな風に死ねたら確かに幸せかもしれない。ジルは心からそう思った。

カイの胸にまた純度の高いピュアソウルの結晶が光った。

ふと夜空を見上げるとマノアの山に夜なのに虹がかかっている。テトの羽の光に似た7色の淡い光。闇夜に幻想的に浮かび上がっている。

“ああ、虹よ。ナイトレインボー。ダディーだわ”

ナタリーが感嘆の声を上げる。

“ナイトレインボー。”

ハワイには夜でも虹がかかる瞬間がある。  
けれどそれを見られることはほとんどない。

虹を見たら神様の祝福と考えるハワイアンの中でもナイトレインボーを見たものは少ない。

” “ダディー。ありがとう。ダディー。虹を見たらダディーを思うわ。

ナタリーはもう一度そういった。

“ 雨が降るのが待ち遠しいわ。きっと虹がかかってダディーに会えるわね ”

ナタリーの優しい声がいつまでもジルの心に響いた。  
優しいフルムーンの夜。老人の人生が終わった夜。けれどこの清清  
しさはなんだろう。  
清らかに生きた人は死さえも美しい。

“ カイ、僕はしばらく飛べそうにないよ ”

情けない声でテトが言った。

“ ああ、わかっているよ。ピュアソウルが言った我僕の一ついで  
聞いてやるさ ”

カイと話しているようだった。

“ テト大丈夫かい？ そんなに痛いのか？ ”

ジルがテトに話しかける。

“ まったく、人間つてやつは待つのが苦手だよな。  
体を抜けたらいくらだつてナタリーの声が聞こえるのにさ、まあ、  
いいさ。今がこの瞬間が大切なときもある。 ”

傷ついた羽を気にしながらテトが言った。

“ 君は本当に優しい妖精だな。 ”

“人間の基準でなんでもいうなよ。僕は妖精の中じゃ冷たい方なんだ”

テトがふてくされたように言つたのでジルはおかしかつた。

“テト、ぼくはカイの死を祝えるような気持ちがするよ。”

テトは不思議そうにジルを見た。

“さつき、人には無理だつていつたばつかりじやなかつたか？ そんなにすぐに気分が変わるのもなのかな？”

まあいいさ、眞実に気づいたらそこから幸せが始まる。人間つてのは何回生まれ変わつても色々忘れちゃうからな。進歩が遅いよな。

お前の魂は色々知つているのに、気づくまで時間がかかるんだ。一

つずつ思い出すしかない。”

魂は眞実を知つてゐる。なぜ色んなことを忘れて生まれてくるんだろい。

“能力の問題だ。仕方ないさ、訓練するしかないんだ。”

“テトは神様のようだな”

“なんで妖精が神なんだ、お前意味わかんないな。”

テトはおかしそうに笑つた。

“ そういうばせ、服また替えてくれる？飽きちやつたんだ。 ”

“ まつたく ”

テトは呆れたように笑つて指をぱちんと鳴らした。

今度のアロハはベージュにシダの柄のビンテージ柄だつた。

“ 色んなレパートリーがあるんだな。 ”

“ ああ、アロハシャツ辞典とかいつたかな？そこから順番に真似でいる。 ”

テトが言つたのが、なんだかおかしかつた。

“ 本を真似ているのか？ ”

“ 本、記憶が悪い人間が生み出した傑作だ。あれは便利だな。誰でもめぐれば誰かの記憶を覗けるんだから。 ”

妖精が関心したように言つた。

“ 本当に人間つて記憶が悪いのかもな。僕も少しは生まれて来る前のこと覚えていたかつた。 ”

“ まあ、ふとした瞬間に思い出すかもな。魂は忘れてないんだから。思い出すかどうかの問題だ ”

何かがおかしい。

ここ数週間感じだした疑問を確かめるように病院のカルテ室を訪れたジエニーは今月に入つてからのカルテを見返してそう呟いた。

ハワイで一番大きな産婦人科の施設を持つこの病院で看護士として働いて5年。

ジエニーは数多くの赤ちゃんの出産に立ち会つてきた。

産婦人科はいつ陣痛が始まるかわからない妊婦を大勢抱え、スケジュールが変動的でハードワークだ。

あまりお金にもならない仕事の為か、医師の数も充分でなく、看護士の役割は多かつた。

実際、ジエニーたち看護士がほとんど世話をして、最後だけ医師が立ち会うという出産が通例だつた。

異変に気づいたのが医師より看護婦が先立つたとしてもおかしくはない。

“ 一体どうしたのかしら。

”

カルテ室からでたジエニーにはあることが頭から離れなかつた。

“ 今月に入つて、流産の数が昨年比の2倍。死産の数が3倍。何かがおかしいわ。 ”

医師たちは偶然としか思つていなにようだったがジョニーにはとても重要なことに思えてならない。

産婦人科の医局長が通りかかったので、呼び止めて聞いてみる。

“ 先生、今月の流産と、死産の数異常だと思いませんか？先々月に比べても右上がりで増えています。これは偶然だとは思えないんですが。 ”

医局長はこの道30年のベテランだった。

“ ジョニー、たまたまだよ。妊婦の数が減るとデータ上の割合は跳ね上がる  
。妊婦が減つているからそう思つだけだよ。 ”

“ そうでしょうか。 ”

ジョニーは腑に落ちない様子だ。そもそも妊婦の減少もおかしくはないだろうか。医局長は言った。

“ みんな自分の人生を勝手に生きたいと思つてゐる。子供は邪魔だ  
とでも思つてゐるのかなあ。 ”

ジョークとも思えないその言葉にジョニーの顔が曇つた。

その様子を見ていたテトがジルのもとに戻つて言つた。

“驚いたな、アースの決定に気づいた人間がいたよ。”

“どうやって接触しようか。

とテトとジルは悩んだ。この病院は大きすぎるし、ジニーは病院では忙しすぎて、近寄れない。

仕事が終わるまで待つことにする。

テトはジニーの働き振りを観察することにした。

小さな妖精は光を消せばほとんど気づかれず人間の側にいることができる。

カーテンの隅っこに、時には戸棚の上に、ジニーにまとわり付きながらテトは感じた。

“確かにピコアソウル。マザーテレサのような献身ぶりだ。”

ジニーのもとには大勢の患者が来ていた。検診といつよりジニー一言いに来たという様子の妊婦たちにいつも取り囲まれている。

“ジニー、さわってみて、動いたのよ今。”

嬉しそうに駆け寄るもの。

“ジニー、体重が増えすぎちゃって、でも食欲がとまらないの”

など、子供を授かって幸せな悩みと裏腹に、不妊治療に来ている女性たちも多い。

“ジニー、子供ができる私たちにとって、たくさんの妊婦さんと同じ待合室はつらすぎるわ。”

そつもらじした若い女性の肩を抱くヒューニーは優しく囁く。

“ そうよね。わかるわ。でもあれがあなたの未来の姿よ。私もあるなれるつて信じるの。強く、強く信じると願いは叶うのよ。まだ若いんだもの。きっと赤ちゃんが授かるわ。 ”

ヒューニーに声をかけられた女性は涙ぐんだ。

次々とやってくる妊婦さんを手際よく診察台に導き、先生のフォローをしながら、暇をみては患者さんと声をかけ、相談に耳を傾ける。またに息つく暇もない忙しさだ。

食事を見る暇もないのか、デスクにおいてあった、サンドウイッチは食べかけのまま袋に入れる。

“ それにしても、人間の出産は大騒ぎだな。 ”

テトはおかしそうにいった。

ヒューニーの仕事が終わるまで特にすることがなかった、ジルはすっかり待ちくたびれていた。

車のなかでうとうとしているとテトが飛び込んできた。

“ ジル、ヒューニーが出てくる。話しかけてみよ。 ”

ジルははつとして慌てて車からでてヒューニーを追つた。

“ エクスキューズミー。 ”

ジエニーが振り返つて田を丸くしている。

“まあ、メネフネ。”

ジルの肩先で光を放ちながら飛ぶテトに釘付けとなる。あたりが暗い性でテトの羽から出される7色の光がくねくねと美しかつた。

“僕が見えるかい?”

テトが楽しそうに言つた。

“私、疲れているのかしら。妖精と話しているなんて。”

ジエニーがくらつとしたようだったので、ジルが慌てて側にあつたベンチに座らせた。

“僕たちあなたに会いにきました。神様の使いです。”

マザーテレサに似た面差しを持つジエニーにうそは通用しないとテトは判断した。

テトが丁寧な言葉を使って説明したので、ジルは面食いつ。

“レディーだから始めは少し気を使つただけだ。”

とテトが言い訳がましくいった。実際はじめだけですぐ遠慮のない言葉に戻つた。

“ ジュニー、昼間言つてただろ？ なんかおかしいって。 ”

“ ええ、聞いていたの？ ”

“ ああ、君が初めてだよ。アースの決定に気づいた人間。 ”

テトが誇つていいよといつよつにウェインクした。

“ アースの決定？ ”

“ そう、最近決まつたんだ。人間の絶滅が。 ”

あっけに取られて言葉を失うジュニー。

“ テト、なんでもストレートに言い過ぎるんだよ。 ”

ジルがたしなめる。

“ いつもことをくねくね曲げて言つとなんかいいことでもあるのか？ ”

話がややこしくなるだろ。 ”

“ でもさ、ショックは和らぐんだ。 ”

衝撃を和らげる為にクッションをおくことも必要だ。 ”

ジルは言葉足らずの妖精のために変わりに説明をしだした。

“絶滅といつても、天変地異や、巨大な核ミサイルが落ちてくるわけじゃないんです。

つまり、ジエニーが気づいたように、人間の赤ちゃんが減っていくということです。

そして最終的に誰も産まれなくなつて人間は絶滅するということです。

”

“まあ。”

言葉を失つて何かを考えるジエニー。

“そうですか。アースというのは神ですか？”

テトを見ながらジエニーが訪ねる。

“そうだな、神だと思つてくれていい。”

“ですか。本当に最近おかしいのです。

現代人の流産は多くなつてきてはいますが、3人に1人の割合は異常です。

妊婦さんの数も30%ほど減少しました。

死産にいたつては現代の最新医療の進化で本当に少なくなつていたというのに、

今月だけで3件も起きています。異常な数値です。”

ジョニーは悲しげに言った。流産が発覚したときの患者の悲しみようが眼に浮かぶ。

顔を覆つて泣き出すもの。夫の胸に崩れ落ちるもの。冷静に唇を噛締めるもの。

生まれてくるはずだった赤ちゃんの心臓が止まつたという事実に、若い夫婦は打ちのめされた。

“赤ちゃんが生まれてこなくなるなんて、絶望的だわ。”

絶望といつ言葉に反応してテトがビクンと震えた。ジルが慌てて続きを説明する。

“でも方法があるんです。ピュアソウルを探し出して、結晶を作ればアースは決定を覆してくれるはずだとテトがいつので。”

“ピュアソウル？”

初めてきいたといつジョニーにテトが言った。

“君だ。”

“私が？”

“そう、だから少し側にいきせてもいいかな？”

ジルが優しく言った。さすがに君が死ぬときにできる結晶が欲しいとはテトも言わなかつた。

“なんだかわからないけど、私がお役にたてることならなんでも。”

ジエニーは快く応じてくれた。

“ これから家に帰るのかい？”

ジルが聞くと

“ いいえ、これから子供たちに会いにいくのよ”

とジエニーは嬉しそうに言った。

“ 子供がいるのか。”

とジルは悲しそうに言った。母親を失つたら悲しむな。

## 子供たち

着いた先は小さな教会だった。

“ ここに親を失った子達の施設があつてね。私、毎晩ここに子供たちに会いに来るの。まだ小さじから、母親が必要なのよ。 ”

ジョンニーがそうつて、扉を開ける。中から元氣の良い声で子供たちが飛び出してきた。

“ ジョンニー。ジョンニー。来てくれたの？ ”

ジョンニーはまわりづく子供たちはまだほんの5・6歳で、どの子もジョンニーが来た喜びで眼がキラキラしている。

“ 今日はお客様を連れてきたのよ。 ”

ジョンニーが楽しげに言つた。

“ だれー。だれー？サンタさん？？ ”

ジルとテトが恥ずかしそうに顔を出した。

“ うわーメネフネ。 ”

子供たち全員が叫んだので、テトは

“ まじかよ ”

と呟いた。全員見えるのかよ。まいったな。テトはやうひ語っているようだった。

一人の子供がテトを捕まえようとこちらに向かってくる。

“ メネフネ、メネフネ。 ”

手をぱちん、ぱちんと鳴らしながらテトを追いかける。

“ うわー、潰されちゃうよ。 ”

情けない声をだして飛び回るテト。

そのたびに7色の光がキラキラと舞い散る。

吹き抜けの天井から流れ落ちるテトの光が子供たちの頭上に降り注いだ。

“ うわー、きれいだなあ。 ”

一人の子供が立ち止まってその光に手を伸ばした。

走り回っていた子供たちも立ち止まり上を見上げて、うつとりする

“ きれいだなあ。 ”

本当にきれいだった。テトから舞い落ちた光の粉がキラキラキラと宙に舞い踊っている。

7色に光る光の粉はゆっくりと下に舞い落ちて消えた。

“さあ、お客様って言つたでしょ？追いかけたりしたら失礼なのよ。

”

ジユニーが優しく子供たちを諭す。

“ごめんね。メネフネちゃん。もういじめたりしないから。

”

くるんとカールした髪がかわいい女の子が言つた。

“ふう。子供に追いかけられて潰されるのはまっぴらだ”

テトがジルのもとに戻ってきて汗をぬぐつた。

ジユニーは手早く8人分の子供たちの夕食を作つた。

パンに、野菜を煮たスープ。贅沢とはいえない食事だったが子供たちはジユニーのご飯が大好きなようで歓声を上げた。

“ジユニーが作るご飯は本当においしいんだ。”

“きつとなんか特別なスペイスが入っているのかも”

“そうだな。”

テトが言つた。

“ジユニーが作るご飯はマナがいっぱい入っている。”

スープを確認しながら言つたので、子供たちは

“やつぱりなー。やつぱりだー”

と口々に言つて笑つた。

本当においしいスープだった。ジルもテトもすっかり幸せな気分になつた。

と、そこに大きな花束を抱えた老人が入ってきた。白髪を後ろになでつけ、身なりの良い老人はジエニーを見ると顔をほころばせた。

“ハーヴィ、子供たち”

“ハーヴィ、アンクルジエイ。”

子供たちが口を揃えた。

“ハーヴィ、マイディア。”

ジエニーに近づくとそつと手をとつて口付けをし、あついハグをする。

花束を渡しながらジエニーに言つた。

“これを君に。”

“まあ、ありがとうございます。アンクルジエイ。”

ジエニーは顔をほころばせた。

けれど心の中でこう思つ。

こんな大きな花束を買つてくるなり、子供たちにパンとミルクをく  
れればいいのに。

“ 今日はお客様かい？ ”

ジェイはジルを見るとそう言つた。

“ ええ、病院の関係のお客様が子供たちの様子をみたいとおっしゃ  
つて。 ”

“ そうですか、僕はジェイ、始めまして。 ”

ジェイはジルにそういって握手を求めた。テトは見えないらしい。

ジェニーはその様子を興味深げに見ている。

“ ジェニー、今日は、君の顔が見たくてよつただけだからこれで失  
礼するよ。 ”

僕はいつだつて本氣だから、いい返事を待つてゐるね。 ”

“ わかりました。 ”

“ アンクルジェイ。メネフネちゃんにはsay helloしな  
いの？ ”

くつくりした眼の少年が無邪気に聞く。

“ はは、メネフネだつて？子供の想像力には関心するね ”

アンクルジョイは少し面倒くさそうに軽く少年をあしらつた。

ジェニー意外には興味がない様子だった。

ジェニーが出口まで見送る。老人は待たせておいたリムジンの後部座席に乗り込むと走りさつた。

“ はあ。  
”

とジョニーはため息をつきながら花束を見つめた。

この教会の財政難は深刻で、8人の子供たちの世話を限界を迎えていた。

心ある人たちの誠意の寄付でなりたつてはいたこの施設も、経済状況の悪化で寄付が激減し、子供たちの生活に暗い影を落とした。ジエニーのようなボランティアだけでは支えきれなくなつていた。

アンクルジエイと呼ばれるこの老人は毎年多大な寄付をしてくれる一人で、

ハワイが好景気だったころ、不動産売買で一生贅沢しても使いきれないぐらいの大金を手にしたミリオネアだった。

多くのお金持ちがそうであつたように、本当に信頼できる家族が作れず、

お金日当で近寄つてきた前妻は結婚後わずか1年で正体を現し、離婚裁判でもめにもめて以後、

すっかり懲りてしまつたジエイはその後結婚を敬遠し、自由気ままに生きてきた。

けれど、70を過ぎて、孤独が身にしみるようになつていて。気づけば心許せる友人もいない。

ビジネス上のつきあいで擦り寄つてくる人たちは数多くいるが、プライベートの時間を一緒に過ごしたいと心から思えるパートナーが欲しかつた。

どうせ長くはないのだ。最後の時を一緒に過ごしてくれる女性に全てを譲るつ。

ジエイはこの孤独からとにかく逃れたかつた。

毎晩のように飲みに出歩いて派手にお金を使っても、家に帰つてふと一人になるときには、襲つてくる孤独に耐えられなかつた。愛している人に側にいてもらいたい。僕の最後を看取つてくれる人を探そう。ジェイは本気でそう考えた。

ハワイで観光バスが出るほど豪邸が並ぶカハラ地区。緑の木々に囲まれ、ダイアモンドヘッドに程近いこの道沿いには立派な門構えの豪邸が立ち並んでいる。

ジェイが今回眼をつけた物件はそれほど大きくはないが、海に面した側のよく手入れされた住みやすい邸宅だった。

高く売れそうだ。ジェイは直感的にそう思った。

“ミスター、スマス。もう少し高く買つてはいただけないでしょうか？”

必死にすがりつくカハラの豪邸のもと主をジェイは冷たく見つめた。

“これ以上は出せない。嫌なら断つてもいい。”

“そんなこと言わずに。このうちにはミスター・スマスが支払う10倍のお金を払つて手に入れた家です。

事業が失敗したとはい、私の大事な資産がこんなに安値では会社の借り入れも返せません。家族がこれからどうしたらしいか。”

“それならば、他の業者を当たればいい。けれど、ミスター・ジェフ・アーヴィン。

あなたが希望する日時へ入金できるのは私だけだと思ひますよ。”

ジョイのやり方は辛らつだつた。

お金に困つた相手の足元をつついて物件を買い叩き高く売り抜ける。不動産売買はそれが鉄則だとジョイは信じていた。

そこに感傷など無駄なだけだ。

ビジネスで生き残れなかつたものは負け犬だ。

即金で物件を買い取るやり方は乱暴だか、お金に困つて不動産を売りに出すオーナーたちに支持を受けるのも事実だつた。

将来の利益より目の前の力ネに人の心は動く。ジョイは札束で人の頬をなでるようなビジネススタイルで資産を築いてきた。

“所詮、金で買えないものはないのか。”

事業が成功するとともに広がる虚しさ。

自分の冷めた信念を誰かに否定してもらいたくて突っ走つてきたのかもしけれない。

けれど、ジョイの本音とは裏腹に、予想を裏切らず、皆金で動き、金にひざました。

世の中は金じやない。そうジョイも信じたかつた。けれど、それを証明するような事柄は一つも起こらなかつた。

金があるから、ジョイのもとには人が集まり、金があるからパーティーの中心にいる。

金があるから政治へも影響力をもち、金に眼がくらんだ美女たちがジョイを取り囲んだ。

いい女も、家も、車も、友人も全てが僕の金を目指して集まつてくる。まるで真っ暗な夜、光を求めて集まる虫けらのようだ。

金の匂いに群がつてくるんだ。ジョイは金を武器にしながら、どこかそんな連中を軽蔑していた。

初めて本当の恋をしたと思つて結婚した妻が、結婚した途端、本性を現し、ジョイの資産を吸い取ることだけを生きがいにしているよ

うな姿を見てから、

その思いはどんどん強くなつていった。孤独だつた。孤独はジョイの心を蝕んでいった。

ジョイはそんな時、つきあいで寄付をしているこの小さな教会に招かれた。

そこで初めてジョニーに出会つた。瞳の美しさに吸い込まれそうだった。

“アンクルジョイ。始めましてジョニーです。あなたの多大な寄付に私はいつも感謝しています。”

ジョニーは控えめにそういうとすつと奥に入つて、あれこれと子供たちの世話をしたり、パーティの支度を手伝つたりしていた。化粧化もあまりなく、すらつと伸びた手足が印象的な美人だつた。ジョイは一目で気に入つた。

ジョイはその後、厚化粧をした金持ちのご夫人やフォアグラを食べ過ぎたようなでっぷりと脂ぎつた不動産王仲間に取り囲まれ、ジョニーと録に話もできないことに苛立つた。

ジョニーの美しい瞳が忘れられないジョイはその後、ジョニーが夕食の支度にたびたびこの施設を訪れていることを知り、通いつめるようになつていた。

そして、ジョニーの人柄にますます強く恋こがれるようになつた。

一方のジョニーはジョイの経済的な支援に感謝はするものの、

親子以上に歳が離れたジョイは親切なお金持ちの一人でしかなく、だんだんとエスカレートする求愛に辟易していた。

誘いにのつてこないジョニーにいらだつたジョイはついに最終手段を用了つた。

ジョニーが自分と結婚してくれることを条件にこの施設に財産を投じ、

子供たちが成長するまで支援し続けるとジョニーに詰め寄つたのだ。教会の神父は救世主のようにジョニーにすがり、

なんとかこの結婚を承諾してくれと頼み込んできた。ジョニーの心は揺れていた。神父はこうも言つた。

“ジョニー、一時の辛抱さ。ジョイはもう二十歳。そつぱくはない。君はまだ若い、少しの間我慢すれば、この施設は安泰。君も莫大な遺産を手にしてずっと楽して暮らせるんだ。こんなにいい話があるかい？”

神父も必死だつたのだ。

子供たちを路頭に迷わせるわけにはいかない。全てはジョニーの決断にゆだねられていた。

ジョニーはジョイになんの感情も沸かなかつた。特に好きなわけでも特にきらいなわけでもない。

けれど、自分が手に入れたいものがあつたとして、交換条件を出すようなやり方は好ましいとは思わなかつた。

“それで私を妻にして、虚しさが増すだけではないでしょうか？”

ジョニーはジョイにストレートにこう訪ねた。

“私はあなたを愛してはいません。それでも構わないと？あなたの欲しいものはそれで手に入りますか？心の寂しさは埋まりますか？”

ジョニーはジョイに真摯に話しかける。

“君が僕を愛してくれないかもしないのは分かっている。けれど、私は、心のきれいな人と少しでも長く一緒にいたいと思う。心穏やかな日々にただ側にいて付き合ってくれたらそれでいい。多くは望まないよ。”

ジョイはそういった。ジョイはジョニーの瞳に自愛に満ちたディーバを見ていたのかもしれない。ひたすらに心の安息が欲しかった。

さびしそぎないだろうか。ジョニーは何もかもを得てきたような恵まれた身なりのこの老人に心を痛めた。そんな愛の形で人生を終えるのがこの人の望みだったのだろうか。私にそれができるだろうか。この人の側について、この人の心を癒し、穏やかな日々を一緒に過ごす。

“ほとんど介護よね。”

ジョニーは事情をテトとジルに説明した後、そつぽつとつぶやいた。

“私は結婚までボランティアなのかしら。”

ジユニーはそういうて少し寂しそうに笑った。

“君はどうするつもりなの？”

ジルは聞いた。いろんなことが少しずつ間違っているような気がする。

結婚を条件に施設を救うことも、それがいちボランティアのジユニーに向けられていることも。必死に頼みにくる神父も。

“テト、魂は生まれ変わるのよね？それならば、今回はこんな人生もありなのかしら？”

ジユニーがテトに聞く。

“魂は生まれ変わるけれど、今回の人生は。。。と言つて手を抜いていいわけがない。

今回は今回だ。世界は今が全てだ。今が未来を作るし、少し古くなつた今が過去だ。

そんな風に現世を投げやりにしていい理由は何もないよ。”

“私はどうしたらいいのかしら。”

ジユニーは悩んでいた。

“心ままに。後悔しない決断を自分自身で選ぶことだね。”

テトはそういった。

“たいしたアドバイスにならないな。”

ジルはつぶやいた。

“ テト、彼女はどうするだろ？ ”

“ そうだな、結婚を選ぶかもな ”

教会の外にでてからテトが言った。

“ 何かに奉仕したくて産まれて来たピュアソウルだ。 ”

“ 自分を犠牲にして結婚を選ぶのか？ ”

“ いや、彼女は犠牲とは考えないだろう。誰かに奉仕できることが彼女の喜びだ。 ”

喜びを感じる理由は人それぞれだからな。それに考えてみろ。ジェイが老人だから悩むのか？俺たちが近づいたってことは。 ”

“ そうか、ジェニーの方が早く死ぬんだな。 ”

“ 若い人は死に無頓着だが、他人事の話ではない。むしろジェニーの方が死の隣にいる。いつだって、適当に過ごしていい時間はないよな。 ”

“ いつ家に帰るか自分は忘れているんだから。 ”

テトが面白そうにいった。

“ ジェニーは何かを感じているかもしないな。なにしろ、始めてアースの決定に気づいた人間だし。 ”

“自分が長くないってことかい？”

“そうだな。予感みたいなものかな。長くないなら教会の役にたつて死ぬのもいいだろ？？”

とにかく見守るうつとテトが言った。

次の日、教会の施設に行くと、ジエニーが晴れやかな顔でそこにいた。

ジエイが年甲斐もなく緊張した面持ちでジエニーの前にいる。

“ジエイ、私あなたと結婚します。”

ジエイは喜びに顔をほころばせた。そして、ふと頭に過去、ジエイの側にいた人たちの顔が浮かぶ。

所詮、ジエニーも金で動くのか。やつと女神をみつけたと思つたが、ジエニーもまた私の資産が目当てか

。喜びと同時に浮かぶ軽い絶望。けれどジエイはもう慣れっこだつた。今回は眼をつぶるうつ。

“有難う。ジエニー、有難う。”

ジエイは絶望を隠すように言った。僕はそれほど長くはない。だまされたとしてもまあ、いいだろ？

どこか投げやりな気持ちがジエイの頭によぎる。もう孤独には耐えられない。

ジエニーはそんなジエイを微笑んで見つめた。ジエイの心の中が透けて見えるような女神のような優しい微笑みだつた。

かわいそうな人。

自愛に満ちたジョニーの微笑がそう言つてゐるようだつた。

ジョイがジョニーの心変わりを心配したのか、結婚式は大急ぎで執り行われた。

“私はシンプルな結婚式でいいの。この教会で子供たちに祝福されてお嫁に行くわ。”

ジョニーの希望もあつて、ジョイは不服そうだつたが、いく身近な人を招いた小さな結婚式が執り行われた。

神父は救世主ジョニーのために最善をつくした。

子供たちは細かい事情がわからないまま、ジョニーのウェディングドレス姿に歓喜した。

祭壇の前に並んだ二人は新婦とその父親よりも歳が離れている。それでもジョイは微笑ましいほどに緊張し、その姿はジョニーに愛らしくうつつた。

女神のような微笑を持つ新婦は神々しい美しさだつた。慎ましい花嫁にジョイは少し期待する。

ジョニーは本当に僕の資産田当てではないのではないか？そんな気持ちをすぐに否定する。

まだわからぬ。前の妻は本性を出すまでに一年かかった。

“清清しい花嫁だな”

ジルは心から思つた。なにかをふつさつたようだ。

祝福の声に包まれながら一人が腕を組んでゆつくつと教会を出る。

テトにすれ違ひ様、ジョニーはそつとこつた。

“ テト、私はあとどれくらい生きられるのかしら？ あまりジョイを悲しませたくないの。 ”

猫は死期を悟るとすつと人前から姿を消すといつがジョニーもそういう能力があるのだろうか。

そばで聞いていたジルが驚きで眼を見開いた。

“ さうだな。僕にもはつきりとはわからないけど、ジョニー、自分の心に耳を澄ませば君ならわかるんじやないかい ”

テトは優しく答える。

“ そうね。1週間、ぐらいかしらね。 ”

不思議とジョニーは悲しそうではなかった。すでに悟ったよつな柔らかな表情をしている。

“ ウエディングドレスも着られて、幸せよ。 ”

ジョニーの言葉にうそはないようだった。

シャンパンを飲みすぎたジョイを支えるようジョニーとジョイはリムジンに乗り込みジョイの豪邸へと帰つていった。

“ 一週間か。じゃあ、一週間後にジョイの家に行こうぜ。 ”

テトが言つ。

“ 本当なのか？”

“ ジエニーが感じるんだ。多分間違いないだろうな。一週間か、セイラに会つて来ようかな。”

テトが思いがけずできた休暇に想いを馳せている。のんきなもんだな。七色に輝きながら楽しそうに恋人とのデートを想像するテトをみながらジルは複雑な想いでいた。

穏やかな日々だった。ジェニーは仕事を休んでいた。

“もひ、ナースは辞めてもいいんじゃないか？”

ジェイが言った。自分を待つてゐるであろう妊婦たちの顔が次々と浮かんだ。

けれど思い直す。そうだ、時間がない。私には時間があまりないのよ。

不思議と焦りはなかつた。とにかく今はこの人を。この人の孤独をなんとかしたい。ジェイはこの結婚の決意を思い出していた。

“そうね。考えておくわ。”

ジェニーが優しく言う。何事も頭から反対しない穏やかな性格のジェニーと一緒にいるだけでジェイは癒された。

愛されているんじゃないかと錯覚するぐらいジェニーはジェイに優しかつた。

ジェニーはどんなことにも感謝と喜びを表現した。

一緒にいてこんなに気持ちがいい女性は初めてだ。ジェイは心が優しく満たされていくのを感じた。

一人きりの時間を邪魔するようにたびたびジェイの秘書が家を訪れた。

“社長、例の件ですが、先方がなんとか考え方直してくれとしつこくて。”

ほとほと参ったようにジョイの秘書が分厚い手帳を抱えながらやつてきた。

“オレがノーといったらノーだ。あの件は手を引かない。どんな手を使ってでもあの物件は手に入れる。金のなる木だ。徹底的に価格をたたいて、現金を目の前に積んでやれ。”

ビジネスの話をしているジョイをジョニーは少し悲しげに見つめた。

“担当者は誰だ?”

“Jの担当はジニーです。”

“ジニーか。失敗したらくびだと伝える。成功報酬は弾んでやる。”

ジョイは社員にも常にハイリスクハイリターンの精神を求めた。くびをかけて仕事に取り組めば、社員は必死になつた。

そうやって結果を出したらどんどんボーナスを弾んでやる。

社員も所詮金だ。

金を積んでやれば人は動く。

ジョイの考え方はある意味正しいのかもしれない。

けれどジョニーはジョイの虚しさや寂しさを作り出している原因に気が付いて欲しいと願つていた。

“ジョイ、お金の話はもういいわ。あなたはもう充分持つているし。”

ジョニーがジョイの髪をなでながら優しく言つ。自分には時間ががない。

この人の心を少しでも癒してあげたい。ジョニーは仕事を一週間休むよう提案した。

“ お金とビジネスの話をあなたの頭から一度消したいの。 ”

新妻の初々しい願いをジョイは聞き入れた。仕事をことを少し忘れてジョニーと過ごしてみよう。

ジョイは秘書に細かく指示を出した後、携帯電話の電源を切つた。

“ ジョニー、今日は何を食べようか？ ”

毎日些細な会話が楽しかつた。

“ そうね、一流シェフにはかなわないけれど、私が作るつてうのはどうかしら？ ”

“ パーフェクトだ。 ”

ジョイが言つ。

“ あなたも一緒に作るのよ。 ”

“ えつ？ ”

ジョイは面食らつたように言つ。

ここ数十年、専門のシェフに食事を任せた行きつけのホテルに行くぐらいで自分では作ったことがなかつた。

“一緒にやれば楽しいわ。”

ジェニーの言葉一つずつがジェイには新鮮だった。

ジェニーは決して贅沢を望まなかつた。

一夜にして大富豪の妻となつたのに、ジェイには不思議なことだつた。

結婚指輪にダイアモンドをねだるわけでもない。せつかく仕事を休むのだ。新婚旅行に豪華客船での世界一周を考えていたジェイは

“キャンセルして。一緒にお家にいたいの”

といつたジェニーの言葉に耳を疑つた。

“本当の友人でないなら、パーティーも遠慮するわ。あなたの顔を潰すつもりはないのだけれど、あなたとお家でゆつくりしたいの。何もいらないわ。”

そんなことを言つた女性は初めてだつた。

ジェイの側にくると女性は必ず何かを欲しがつた。宝石のときもあれば、豪華な食事の時もある。

高級ブティックでの買い物の時もあれば、贅をつくした旅行の時もある。女性たちは何かを欲しがるものだといつ常識がジェニーによつて覆された。

ジェニーに促されるように照れくさそうに一緒にキッチンに立つ。慣れない手つきでにんじんの皮をむくジェイを楽しそうにジェニーが見ている。

シェフたちも普段笑顔の少ないボスの楽しそうな姿に興味深々だ。

“ あの方も、あんな風に笑うんだな。 ”

シェフの一人がしみじみと言った。

“ 僕らが何十年修行したってさ、愛する人の手料理にはかなわないのさ。 ”

決して上手とはいえない『ごはん』した二エンジンが入ったポトフの味は最高だった。

“ こんなにおいしいポトフは初めてだよ。 ”

ジョイは関心したように言った。

“ 自分で作るとおいしいでしょ？ 特別なスパイスが入るからよ。 ”

“ 特別なスパイス？ ”

“ マナよ。マナがたっぷりと入るの。 ”

マナか。これがマナの味か。ジョイは子供の頃、母親が作ったステーキよりも僕は死ぬ前にこのポトフを食べたいと思う。

“ 家庭料理にはマナが入るからおいしいんだな。 ”

極上のシャンパンよりも、世界の三大珍味よりも、チャンピオン牛のステーキよりも僕は死ぬ前にこのポトフを食べたいと思う。

ジョイが言った賛辞にジョニーは頬を赤らめる。

“ そんなに大げさに喜んでもらうとなんだか悪いわ。 ”

そんなジェニーがジョイにはかわいくてたまらなかつた。僕は人生の最後に女神を手に入れた。

ジェニーは本物だ。僕が人生をかけて欲しかつたものをジェニーは持つてゐる。

1日追うごとにジョイの疑いはジェニーへの信頼と変わつていつた。

そんなジョイをジェニーは少し悲しげに見つめた。

そんな生活が一週間続いたある日、ジョニーはついにベッドから起きあがれなくなった。

ついにその日が来たとジョニーは悟った。体が鉛のように重い。

“じめんなさい。ジョイ。今日は調子が悪いわ。”

“大丈夫かい？ジョニー。今日はベッドにいたほうがいい。シェフになにか作らせよう。きっと環境が急に変わったから疲れたんだ。”

ジョイは優しく言った。

“新鮮な空気を入れるよ。”

ジョイがいつて窓を開けると、虫のよつたキラキラした親指ほどの物体が飛び込んできた。

“な、なんだ。”

ジョイが驚いて眼を見開く。

“テト。”

ジョニーがつぶやいた。

“テト？ああ、なんてこった。妖精なのか？”

ジョイが驚いたまま口をぽかんと開けている。

“ おお。すごい進歩だな。ジョニーと一緒にいて、清められたか。僕がみえるなんて。 ”

テトが楽しそうに言った。

“ テト。今日がその日なの？”

“ さあ、君が一週間後つていったから、僕は来た。それだけ。きっと君のほうがよく知っている。 ”

“ な、なんなんだ。まったく。今日がなんだっていうんだ。 ”

訳がわからないうことに少し苛立ちながらジョイが部屋をうろつりまする。

“ ジョイ、落ち着いて、ジョイ。話があるのよ。 ”

ベッドの側に寄ってきたジョイにジョニーが優しく話しかける。

“ ジョイ、私にはね、少し特別な能力があつて。わかるの。 ”

“ なにが、なにがわかるつていうんだ？君は具合が悪いんだ。今日は休んでいた方がいい。 ”

“ ジョイ。私は多分、今日死ぬわ。 ”

“ な、なんだつて？”

“ 私にはわかるの。多分今日よ。 ”

“ おお、なんてことだ。僕は信じない。

君はまだ若い。昨日まで元気だったじゃないか。たとえ、急に妖精がきたつて僕は信じない。

妖精がきたら死ぬなんて、まるで死神じゃないか。

ジェイはすっかり取り乱し、テトを追いかけまわしだした。

“ そんなきれいな姿をして、お前は死神か。ジェニーを渡しはしないぞ。 ”

鬼の形相でテトを追いかける。

“ 勘弁してくれよ。ジェニーなんとか言つてくれ。 ”

テトは動きの緩慢なジェイの動きを交わしながらジェニーに言つた。

“ ジェイ、違うのよ。私が今日かもしれないと言つたから、テトが来たの。順番が逆なのよ。 ”

ジェイが肩を落として、ジェニーの側に戻つてくる。

“ 君は死ぬ時期を知つていたといったよな。 ”

“ ええ、予感よ。 ”

“僕をだましたのか。死ぬとわかつていて、1週間我慢すれば教会が救えると、そうわかつていて結婚したのか。”

“ジョイ。『めんなさい。でもね、死ぬとわかつていたからあなたと結婚したわけじゃないわ。

信じて、この1週間の穏やかな日々を思い出して。何かを無理やり手に入れようとすれば必ず自分に返って来るわ。

けれど、信じて。私は望んであなたといったということを。”

ジョニーの声は次第にかすれていぐ。ジョイの手を握り、髪をなでる。

“あなたの孤独がいえますよ。”

そう最後にいうと女神のような頬笑みをジョイに送った。そしてすっと眠るよつて息を引き取った。

“ああ、僕の女神。ジョニー、ジョニー。”

ジョイが取り乱す。

“ジョニー、ジョニー。僕の宝物。僕をだましたのか？死ぬとわかつていて僕を利用したのか？”

ジョイの嘆きよつをなだめるよつてトトが言った。

“ジョイ、聞いてなかつたのか？ジョニーは望んで君といふことを選んだ。貴重な死までの1週間。愛する子供たちや生まれ育つた家にいることを選ばずに君に全ての時間をあげた。

そのジョニーを疑うのか？

心が洗われたのを感じなかつたか？見えなかつた妖精が見えるほど  
清められた魂で君は疑うのか？

彼女を信じないでこの世の何を信じられるといつんだ？”

テトがジョイを落ち着けるように優しく諭す。

“ジョニーが最後をかけて過ぐした時間を否定するのか。”

涙にくれたジョイが肩を落としながら静かになつた。

“いいや。”

ジョイは目を閉じてジョニーといった時間を瞞締めるようについた。

“決して否定しない。この一週間は本物だつた。

この一週間ほど心が癒された時間はなかつた。僕はついに女神を手  
に入れたと思ったよ。”

テトは静かにうなずいて、ジョニーの胸元に舞い降りると祈つた。

ジョニーの胸からすーっと白い光が天に伸び、純度の高い清らかな  
結晶が胸元に転がつた。

“ジョイ、気づいたか？本物は人の心を動かす。ジョニーに会えた  
ことに感謝しろ。

君はジョニーに選ばれたことを誇りに思えばいい。”

“僕は、僕の人生はジョニーに誇れるほど清らかじゃなかつた。ジョニーにあつて、何が大切なのかを思い知つたよ。本物の愛に心を打たれた。

何もなくとも一緒にいるだけでこんなに心が安らかになつたことはない。

。僕は、ジョニーを無理やり手に入れたといつのこと、神はそんな僕を罰したのだろうか。

無理やり手に入れた宝は無理やり奪われてしまつた。

ジョイは悲嘆にくれた。

“物事には原因と結果がある。自分の行いは必ず自分に帰つてくる。

けれど、これは呪いではない。

人生はいつだって気づいた瞬間からやり直せる。

君はこれからジョニーに誇れるように生きればいい。ジョニーも喜ぶよ。

そして、君が人生を全うして生き抜いた後、また会えばいい。楽しみは後にとつておけ。

テトは言った。

## 癒し

“アンクルジェイ。また来てくれたの？”

子供たちの顔が輝く。

ジェニーが死んでから、ジェイは私財を投じて教会の中の施設の増強を決めた。

毎日のように子供たちへのプレゼントを持つては教会を訪れる。すっかり穏やかになつたアンクルジェイに子供たちはなついた。

“ほうら、絵本を読んであげるよ。アンクルジェイのところに集まつておいで。”

子供たちが歓声をあげて、ジェイのもとに集まる。

“ねえ、アンクルジェイ。ジェニーはどこに行つてしまつたの？”

一番幼いエイミーがジェイの膝の上に上りながら聞く。

“ジェニーはね、天使になつたんだ。眼には見えないけどいつも側にいるよ。”

“アンクルジェイ、ジェニーに会えなくて悲しい？”

エイミーが心配そうに言った。

“ そうだね。少し悲しいよ。僕はジョンニーを本当に愛していたからね。 ”

“ I know!! アンクルジェイはジョンニーが本当に好きだったよね。 ”

子供たちが自信たっぷりに言った。

“ でもさ、ジョンニーと会えてラッキーだったよね。 ”

エイミーが言った。

“ だつて、ジョンニーに会えない人もいっぱいいるでしょ？ ”

“ そうだね。 ”

ジョンニーは幼いエイミーの言葉に心を打たれる。

“ 本当に出来ただけで奇跡だよね。僕は最高にラッキーだったよ。最後の一週間、ジョンニーを独り占めしたんだからね。 ”

“ いいなあ。ジョンニーといったかったなあ。 ”

子供たちが口々に叫んだ。

“ ジョンニーといふことを、とっても安心するんだ。 ”

“ また会いたいなあ。 ”

僕もだ。ジェイは心から思った。

けれど子供たちとジェニーの話をすると幸せな気持ちになつた。

“ 僕の知らないジェニーをもっと教えて。ジェニーといつもどんなことしていたの？ ”

一つずつ、子供たちの声に耳を澄ます。

ふとジェニーの笑い声が聞こえた気がした。

“ ジェニー、僕はこの歳になつて生まれ変わつた気分なんだ。 ”

ジェイは心の中で呼びかける。

“ これでいいんだよな。ジェニー。 ”

ふふふとジェニーが微笑んだ顔が脳裏に蘇る。

“ 僕ももうすぐそつちへ行くよ。そしたらまた一緒にポトフを作ろう。 ”

この次は同じ歳に生まれるよう神様にお願いしよう。そしたら君と長い時間ともに生きれるからね。 ”

ジェイはたくさん子供たちの笑顔を見ながら思った。僕はもう孤獨じゃない。

“ 次も大往生だな。97歳のおじいちゃんだ。 ”

よかつた。ジルは思った。カフナに続いて静かな死を見守れるだろう。

“ ハワイカイのほうだ。ミリタリーのタウンハウスに住んでいる。たくさんの似たようなうちが並ぶタウンハウスは軍関係者が住む家賃の援助が出ている特権住宅だ。 ”

“ ミリタリーの人だつたのかな？ ”

“ ああ、日系2世だ。同じ日本人と戦つた兵士だつた。 ”

テトが言った。ジルはハワイで育つたので、大まかな歴史は把握していた。

ハワイにはたくさんの日本人がいる。1世2世の苦労はハワイの歴史に刻まれている。

彼らによって持ち込まれた文化や功績は数知れない。

南国の夢のような生活を目指して遠い海を渡つてきた日系1世の多くは沖縄出身者だった。

彼らの生活は過酷を極めた。鞭を持った白人の下1日10時間以上の肉体労働、

出身の国別に分けられ名前ではなく番号で管理される生活は奴隸のようだったという。

日本人の中でも沖縄出身者は同じ日本人にも下に見られ苦労したといふ。悲しい歴史。

1世の子供である2世は祖国と生まれ育つた国との間で始まつた戦争に翻弄される。

真珠湾攻撃の際、ハワイの人口の約40%は日本人だつた。日本は何を思つてこの島を攻撃したのだろうか。

一度でもこの美しい島を見ていたら、焼き払おうと考えただろうか。

たくさんの日系人がこの攻撃のあと収容所へ送られた。

それでも彼らの多くはアメリカに忠誠を示すため、アメリカ兵士として自分の祖国と戦つた。

白人兵士からの差別と戦い、祖国の日本人と戦つた。彼らの苦しい立場は後々の日系人にも語りつがれてい。

繰り返される悲しい歴史。戦争。

彼らは日本のみならずフランス、イタリアでも最前線で戦つた。数多くの手柄を立てて帰国したが、

最前線で格闘したこの部隊は多くの戦死者と負傷者を出した。

彼らの勲章は7つの大統領感謝状、6000を超える個人勲章。2つの部隊で獲得したその数はどの部隊よりも多かつた。当時の大統領ハリートールーマンは彼らを讃えてこういつた。

“君たちは敵軍との戦いに勝つただけではない。偏見との戦いにも勝つたのだ。”

日系2世の功績によりハワイでの日本人の地位は格段に向上し、今の平和なハワイを日本人が快適に訪れる事ができるのも彼らのおかげだ。

“ Go for Brake ”

当つて碎ける。彼らのスローガンだった。常に腹をくくつて生きてきた人たちだ。

“ 人を殺したピュアソウルだ。 ”

けれど、テトが言つたので、ジルは体が硬直した。  
戦争で得た勲章は名誉かそれとも人殺しの証か。

“ 人も少しずつ進化して戦争が減つてきているけれどね、  
もつとも低俗な風習の一つだ。同種なのに殺しあう動物は人間と虫  
けら位かな。  
母親の腹を食い破つて出てくるマムシの類と一緒に。けれど個々の  
ソウルに罪はないんだ。 ”

彼も殺したくて戦争に参加したわけじゃない。そういうのは殺人に  
はカウントされないよ。彼個人が背負う責任じゃないからだ。 ”

テトが言つた。テトがそういつたので、ジルの心は少し軽くなつた。  
戦争に備り出された上に、人殺しと責められてはあんまりだ。  
けれど、戦後生まれのジルには所詮、戦争は遠い過去だった。

“ 人間つて集まると時々恐ろしく負のエネルギーを高めるんだ。  
それが一方に憎しみとして向けられると戦争が始まるらしい。個人  
レベルではそれほど低いソウルじやないんだけれど、  
心がすさんてきて、負のエネルギーがどんどんたまる瞬間がある。 ”

心が地獄の状態だな。誰の性でもないその感情を誰かにぶつけないと収集できなくなる瞬間が。

そうすると変な理屈をつけて誰かを攻撃し始めるんだ。小さければ個人の殺人。

大きくなると一つになつて戦争に向かつ。その渦に色々なソウルが巻き込まれる。

竜巻みたいなもんだ。ピュアソウルですら逃れられない。ただ受け流すつてことができないんだ。負のエネルギーはただ受け流せば消えるのに。”

テトが言った。

キヨシ金城。沖縄出身の97歳。

ハワイカイに静かに暮らす彼は大家族のようだった。

ベッドから起き上がりれないキヨシのもとにひっきりなしに人が出入りしている。

“グランパ。お水が欲しい？”

“グランパ、どこか痛い？”

“グランパ。今日は何が食べたい？”

かわるがわるキヨシのベッドを訪れては何か聞いたり話かけて出で行く。

ある者は日本語で、あるものは英語でキヨシに話しかけては出たり入ったりしている。

キヨシの周りには子供大人も常に3、4人いて、どうやら家族以外、近所の人もちよくちよく来るらしい。

しばらく外から様子を見ていたジルはテトに言った。

“なんだかたくさんの人には囲まれたピュアソウルだね。”

“そうだな。戦後、この人はハワイの日系人のために全てを捧げて生きてきた。

おかげでハワイの日本人は大分快適になつたはずだ。同じ人間なのに住んでいるエリアだけでなんで区切るのか人間つて不思議だな”

“ 妖精はないのか？”

“ ないね。世界中、妖精は妖精だ。それ以外に何があるっていうんだ？”

テトは國という認識が理解できないようだった。

“ 言葉も文化も違うからな。”

“ そんな些細な事気にする方がおかしい。  
人間は一緒だ。目が一つ。鼻が一つ。口が一つ。2本足で歩いて羽はないから飛べない。

光らない。

身長も似たりよつたりだ。大まかに分けると、  
犬や鳥やキリンや象とは全然形が違うし、誰がみたって人間は人間だ。他の動物から見たらみんな一緒だ。”

テトがそういうので、ジルは心から納得した。そうだな。人間はただ人間だ。

それにして、人と少し違うという意味で孤立しがちなピュアソウルに珍しく大勢の家族と人に囲まれたピュアソウルだな。  
テトは感心したようにキヨシを取り囲む人々を見た。どの人も心からキヨシと少しでも一緒に居たいようだった。

“ これだけ人が多いとな。そーっと俺一人で夕方にいくよ。”

ジルはうなずいた。僕が行つたら、まるで死神だ。

キヨシは今でも時々悪夢を見る。

銃を構えた日本人兵士が目の前に立つ。

“お前もこれで終わりだ。”

にやりと笑つて引き金を引こうとした瞬間、キヨシが日本語で話しかける

“まつてくれ。”

日本兵がびっくりして一瞬戸惑う。

“日本人なのか？”

一瞬ひるんだ隙をついてキヨシの後ろから同じ部隊の日系2世兵士が引き金を引く。

目の前に崩れ落ちる日本人兵士。

“なぜだ。なぜ日本を裏切る。”

その日本人兵士の悲しげな責めるような目が頭から離れない。

“なぜだ、なぜ日本人がアメリカ側にいるんだ？”

裏切り者、裏切り者。

日本兵の断末魔がキヨシの頭にいます。

“うーつ。”

“グランパ。大丈夫？グランパ。”

孫娘のケイレンが心配そうにベッドの横にいる。

ぐつちよりと汗をかいたかいたキヨシが夢から目覚める。

“大丈夫だよ。ケイレン。”

“グランパ、少し熱があるのね。うなされていたわ。”

キヨシは平和なベッドの上にいることを確認してほつと安心する。

英語と日本語を話す愛孫娘がハワイの空で笑っている。

戦争中は想像もできなかつた平和な光景だ。よかつた。終わつたんだ。全部終わつたんだ。

思えば、戦後の数十年。

キヨシは日本と戦ったことへのお詫びのような気持ちで日系移民たちにつくしてきた気がする。

日本からハワイに移りすむ人を歓迎し、サポートし、彼らのビジネスや生活が整うよう奔走してきた。

ハワイの日本の文化交流にも力をつくした。おかげでハワイは真珠湾の悲劇を忘れたように日本と仲良くなっている。

それでも若い人がパールハーバーを訪れると日本を嫌いになつて帰つてくることも多い。

父母の祖国を愛する気持ちと故郷を攻撃した国が同じなんてまさしく運命の皮肉だ。キヨシは今でもそう思つている。

一度戦争で戦つたものは普通の精神状態には戻れないんだ。キヨシは平和になつた今も心に闇があるようを感じる。

一度、人を殺めた人間は魂が汚れた。キヨシはそう思つていた。それをなんとか清めたくて人から喜ばれたくてなんでもしてきた。

“ Go for Brake ”

当たつて砕ける。軍に居た時のスローガンはそのままキヨシの生きる道となつた。

常に覚悟を決めてことに取り組んできた。

命がけで生きてきた。

結局自分のためだったのかとふと自分本位な生き方を責めるような気持ちにもなる。

僕は偽善者ではないだろうか。

人に良くして、けれど実は自分の魂を救いたいだけなのではないか。

繰り返された自問自答。

けれど、あの時、僕はああするしかなかつたんだ。  
言い訳じゃない。自分の家族を守る為、自分のアイデンティティー  
を示すため。

孫娘がアメリカを讃える歌を胸に手を当てて歌うたびにキヨシは不  
思議な気持ちになる。

祖国つてなんだ？この子は100%日本人の血を持つて生まれた。  
けれどアメリカに住み、アメリカの言葉を話し、アメリカ人として  
国を讃えている。

国なんて所詮そんなもんだ。ただそこに生まれたというだけ。そこ  
に住んでいるというだけ。

見えない線を引いて、先人が勝手に線を引いて決めた国境に翻弄さ  
れただけ。

キヨシはほとんど戦争のことを家族に話さなかつた。

つらい過去はふたをして捨ててしまうに限る。

今、今にエネルギーを注げば未来はきっと開かれる。あたつて砕け  
ろ。今だけを考えていいきるんだ。

先の見えない苦しみの中で今に集中して最善をつくすことで人生を  
生き抜いてきた。

けれど、ここ数日、キヨシの頭の中には走馬灯のよつに過去が浮かび上がつては消えていく。

きっと長くないんだ。キヨシは穏やかにそうつたつていた。

夕方、

“夕焼けがみたいな”

ぽつりと娘にいふと、車椅子でラナイに連れて言つてくれた。

“なにか飲む?”

“じゃあ、寝る前に暖かいホットチョコレートでももらおうかな。”

“まあ、子供みたいね。”

“なあ、ジエシカ。”

娘に話しかける。日本系3世の娘の笑顔は屈託がなく生粋のハワイアンのようだ。

彼女もグラナマと呼ばれる歳になつた。

キヨシは最近、ジエシカをなくなつた最愛の妻に重ねることが多くなつていつた。

ともに人生を歩んだ妻に話しかけるよつにキヨシは聞いた。

“僕は人を殺さなくても生きれたと思うかい?”

ジエシカは驚いたように父親を見つめた。

キヨシが戦争について自分の口から話すこととはほとんどなかつた。

父親の受けた深い傷はジェシカも充分承知している。

父親が何に苦しんでいるのか知りたくて、父親が所属していた部隊について一通り調べたこともある。

少し間を置いてジェシカが答える。

“Noway!”

“ありえないか。”

キヨシがゆつくりと微笑む。

“無理だつたわ。パパ。”

そう、無理だつた。

キヨシは自分を納得させるように娘の言葉を反復する。

軍隊の命令は絶対だつた。

群集は大きくなると罪の意識を薄れさせる。

人を殺すことは間違つていいという状引きが、戦争になつた途端、仕方ないことに変わる。

群集は命令されれば統率され、それに従つようにしていく。

そこに個人の意思は反映されない。

あの時、キヨシ一人が僕は誰も殺したくないといったところで、何になつただろう。

代わりに友人が殺され、キヨシは反逆者の汚名を着せられる。

けれど、あの波に流された自分を肯定することもできないでいた。

近づく死に気づいた今、思い出すのはそれが正しかったのか、そうでなかつたのかという疑問ばかりだつた。

“パパ、あまり昔のことばかり思い出すのはよくないわ。今は夕日を楽しんで”

娘が微笑みながら家の中に消えた。

久しぶりに一人きりだ。いつも賑やかで楽しいがたまには一人になりたいときもある。

高台にあるキヨシの家のラナイからはハワイ海の海が一望できる。今日の夕日はひときわ赤く美しかつた。

大きな太陽が大分水平線へと近づいていく。

太陽の光にシルエットとして浮かび上がつた海岸沿いのやしは黒い陰となりながらかすかに風に揺れている。広大な海が次第に赤く染まり始めた。

“ やあ、”

一人になるのを待つていたかのようにふ一つと目の前に妖精が舞い降りた。

“メネフネ。気のせいか？”

“気のせいじゃないぞ、しつかり見てくれ。”

テトがぐるぐると回って見せた。美しい羽からあでやかな光が飛び散る。

“妖精が来るなんて長いこと生きてこるけど始めてだ。”

目を細めてキヨシが言った。

“ そうか、長いこと生きてきた割に、初めてのことがあってよかつたな。”

テトの生意気な口ぶりに思わず頬が緩む

“ 充分生きただろ？ 家に帰るときがきた”

テトは遠慮なく言った。

“ 家に帰る？”

キヨシはしばらく意味を考えてから  
キヨシは顔をしかめていった。

“ 死ぬのですか。”

“ いやなのか？ こんなに生きたのにまだ嫌なのか？”

テトは驚いたように言った。

“死ぬのが怖いんじゃない。”

“じゃあ、なんだ。”

“死ぬ前に答えが知りたいのです。”

許し

“ なんの答えた。 ”

キヨシはテトを神の使いのよつに思つた。救われたかつた。死ぬ前に。

“ 教えて欲しいのです。

私の魂は汚れていますか？

私は戦争で人を殺した。

汚れているのではないかと、  
取り返しが付かない間違いだつたんじやないかとそれだけが気になるんだ。

テトはじばりくキヨシを見つめた。

キヨシの中に起つた過去を確認しているよつ眼だつた。

そしてしつかりと確信を得たようにテトはこう答えた。

“ 大丈夫だ。ピュアソウル。 ”

キヨシが驚いたように目をあける。

“ ピュアソウル？ ”

“ そういへ、あなたは魂の中でもまつたくの汚れのない選ばれしピュアソウル。

汚れてはいない。戦争の出来事はあなた一人の魂が背負つて出来事じゃない。

あの時代を生きたソウルは大きな渦から逃げられなかつた。

心配するな。あなたは生まれてからずっとピュアソウルのままだ。

”

“ ああ、”

キヨシは皺だらけの手で顔を覆つて泣き出した。

テトの言葉が神からの許しのように感じた。

肩を震わせて嗚咽する。やがて顔を上げて涙でぬれた顔をテトに向けるといつた。

“ 私はずつと苦しんできたのです。 ”

“ 戦場の最前線にいて、もうだめだと思つたとき、銃弾が自分だけを避けて飛んでいくよつた気がしたことはなかつたかい？”

“ そう、なんどか奇跡を味わいました。僕たちの部隊はいつも一番危険な任務についていた。

Go for brake! スローガンどおり、いつ砕け散つてもおかしくはない状態だつた。

けれど、不思議な力に守られてゐるよつた感覚がいつもあつた。

私はあの銃弾が飛びかうなかにいて不思議と恐怖に震えることはなかつたのです。”

キヨシが思い出すよつてぱつぱつ、ぱつぱつと話した。

“ そつだらうな。ピュアソウル。あなたのガーディアンは強力だ。あなたが果たす戦争後の役割に導くため。あなたの本当の役割はあの戦争が終わつたあとにこゝあつた。

そのために生まれたソウル。

役割を充分に果たしたとは思わないか?”

“ 私は、私なりに最善をつくしてきた。”

キヨシは思い返してそつと語つた。

“ それならば、苦しむな。必要ない。”

テトはほらねーと言いたげにぐるんと周りながら語つた。そして続けた。

“ たとえ、罪を作つてカルマを負つたとしても、必ずやり直せるようできている。

神は魂にことん甘いんだ。何度もやり直せるよつて設定してあ

る。

天使ですか、聖人ですかカルマは作ってしまいます。

けれどそれは呪いではないよ。

いつでも気づけば消える。けれどあなたは、生まれてから今までずっと純度の高いピュアソウル。

妖精の俺が言うんだ。信じろ。

そして、自分の家族を思い出せ。周囲にいた友人を思い出せ。

ピュアソウルが引き寄せるにふさわしい素敵なソウルじゃなかつたか？

“ああ、家族も友人もすばらしい。みんな私の宝です。”

“そうだ。そしてあなたは孤独じゃない。”

“そうだ。私はいつも常に愛する人に囲まっていた。”

“幸せだった？”

テトが穏やかに言った。

“ああ、幸せだった。”

“自分自身に矢を向けてはいけない。  
自分の心に矢を刺して何になる？

もつと自分自身の魂、インナーチャイルドを愛し、許してあげなくては。”

“自分のインナーチャイルドを？”

“ わたし、他人をいたわるより、自分自身を愛し、許すことも同じくらい大切なんだ。

考えてみてよ。世界中の人々が自分を愛し、許し、そして、身近な家族を愛したら、戦争なんて起きるか？

愛は自分の周りほんの少しでも充分なんだ。

皆がマザーテレサのように世界平和に貢献できるわけじゃない。自分のソウルのレベルにあつたこと、まず自分を愛し許し、そしてそれができたら、隣にいる人を愛してみる。

ステップバイステップなんだ。

一人残らずそうしたら、それだけで世界が変わる。

ゆびをぱちんと鳴らすように簡単な事なのに。”

“ けれど。戦った兵士たちも、家族を愛していた。

一部の人間によつてコントロールされた世界ではその小さな愛への尊敬など踏み潰されのです。”

“ そうだな、未熟な魂に引きずられる。

そんな魂も気づけば変わったはずだ。チャンスは一度じゃない。

そうやって少しずつ魂は進化してきた。何度もやり直せる。気づいたときからそれは始まる。

キヨシは考え深げに空を見つめた。

“ピュアソウル、君はよくやったさ、難しい時代を魂を傷つけずに生き抜いた。あとは自分を許すだけだ。”

自分を許す。キヨシが長年かけてできなかつたこと。

“自分の潜在意識に呼びかけるんだ。アイラブユー。ごめんなさい。そして有難うってね。”

テトが優しく言った。

“僕は先日偉大なカフナにあった。”

テトはカイを思い浮かべながらいった。

“彼はこのメソッドを使いこなして人々を癒していったよ。ハワイアンヒーリングシステム、ホ・オポノポノという名前で呼んでいたな。知っているかい？”

キヨシはその名前を知らなかつた。

“自分をクリーニングして過去をゼロにする方法さ。

自分の中の潜在意識に呼びかけ、いたわり、愛し、許す。そうすると驚くほど未来は開ける。

人間つていうのはさ、こんなクリーニングが必要なぐらいネガティブなことに意識を向ける生き物なんだよな。

考えなくてもいいことを考えてそこにマナが流れてしまう。

そうすると現実になつてしまつ。余計なことを一切掃除してゼロに戻すとや

、愛のエネルギーがたくさん充電されて幸せになるんだ。

その愛はどこから来ると思う?

無限なんだ。

アースを飛び越えて宇宙の神と繋がる。

宇宙の神の愛はどれだけ与えても消えることがないほど深く、大きい。

いくらでももらえばいい。

ひとを愛する以上にまずは自分のインナーチャイルドをひとつ愛するんだ。

ハワイアンに古来から伝わる伝統の秘法。ホ・オポノポノ。ハワイの選ばれたソウルにだけそつと教え伝えられた取つて置き魂をクリーニングするメソッド。

心をゼロの状態に戻すことで過去から自由になり、問題を解決する。驚くほど簡単で確実な方法。

これを使いこなすと、ネガティブなエナジーをそつくりポジティブな愛のエナジーで満たすことができる。

すべての出来事の問題は自分自身の中にあるという考え方はすぐに何かの性にして生きる人間には気付きにくいメソッドだが、記憶や想いは思ったよりずっと現実の問題に影を落としているのだ。これをクリーニングすることで心は驚くほど元気に、伸びやかに開放される。

そして満たされた愛のエナジーは想いを現実にし、次々と大きな変化として実際に現れる。

人間はこれに気付けばもつと上手く未来を作り出せるのだ。ネガティブな意識のない妖精たちは常にホ・オ・ポ・ノ・ポ・ノを実践していると言つていい。

自分の心を自分で清め、常にポジティブな愛のエナジーで満たしている妖精たちに不幸なことは起こらない。

当たり前のこととして日常にあつたこの方法が人間たちには未知の世界なのだとテトはカイから聞いた。

人間の中で使いこなせる人はまだまだ少ないらしい。

テトはキヨシko過去の記憶から解放されるべき人だと感じた。

“ 妖精から教わるなんて光榮だろ？ こんなこと知らないなら早く言ってくれればいくらでも伝えたのになあ。

妖精の常識は人間には通用しないんだな。 ”

テトがキヨシについているのが独り言だかわからない声でぶつぶつ言った。

妖精の言葉にキヨシは素直に目を閉じて呼びかける。

“長い間、苦しめてごめんなさい。私は君を愛しています。今まで有難う。”

なんどもなんども呼びかける。I love you. I lo  
ve you I love you...

キヨシの目から涙がこぼれ落ちた。自分で自分のソウルを清め救う。心が清められていいくのが分かる。大丈夫だ。と心の声が聞こえたようで、不安も恐怖も消えていった。

“世界中の人々が今日からI love youと自分自身に呼びかけ始めたら、世界は一瞬で癒されるな”

テトは苦しみから解放されていく気高い老人を見つめながらそう思つた。

“思い返せば、そうだよなあ。これだけネガティブなことばかり考えている生き物も珍しい。

人間に必要なのはホ・オポノポノだな。自分で自分をクリーニングできれば世界は自然に変わるもんなあ。”

テトはキヨシの様子を見ながらつづく思つた。アースにさじを投げられた人間に今、必要なのはクリーニングだ。

テトがキヨシを見て言った。

“ ああそろそろだ。家に帰る時がきた。 ”

キヨシは聖人のように穏やかな顔になっていた。

“ ありがとう。ありがとう。神様。私を生かしてくれた神様。ありがとうございました。 ”

キヨシは戦争の罪が今やつと許されたように顔の緊張を緩めた。長く深く引きずっていた後悔と苦悩が溶けた瞬間だった。

そしてすーと車椅子にもたれるとそのまま息を引き取った。

丁度そのとき、ハワイカイの広大な海に大きな夕日が沈む。

真っ赤な太陽は水平線すれすれで完全に沈む前に光を放つた。

一瞬、瞬くようにグリーンの光が瞬く。

“ グリーンフラッシュ。 ”

テトが言った。グリーンフラッシュを見たものは幸せになるといふ。

“ ピュアソウルの死に祝福を ”

テトがそう祈つて、キヨシの胸元に舞い降りた。

手をかざすとすーと白い光が天に伸びキヨシの胸元に輝く結晶が浮かび上がった。

テトはピュアソウルの結晶をそっと手にとった。

“ グランパ。今、海を見た？ グリーンフラッシュよ。きっと幸せになるわ。 ”

キヨシの孫娘がラナイに飛び込んでくる。

キヨシの手がだらんと車椅子からたれている。テトには気づいていない。キヨシに駆け寄りながら彼女は叫んだ。

“ グランパ？ グランパ？ 大変よー。マミー ”

キヨシの家が大騒ぎになっている。テトはその光景を横目で見ながらそっと飛び立った。

“ それにしても大勢に囲まれたピュアソウルだつたな。 ”

と思い出してくすくすっと笑った。次はもう少し静かな人生を選ぶかも知れないな。

それにしても、あれほど氣高い魂の持ち主でも自分のことになるとあまり分からなくなってしまうらしい。

“ すべてはあの恐ろしく記憶の悪い頭の問題だな

。生まれて来る前のことだつてなんにも覚えちゃいないんだから。変な記憶しか残つていらないのなら、クリーニングして完全にゼロにしたほうがましだ。 ”

車に戻るとジルが待っていた。

“ 終わったのかい？ ”

“ああ、終わったよ。 ”

“次はもつといい時代に生まれ変わるよ。 ”

テトが確信を持っていった。

“人を殺さなくても生きられる時代だ。 ”

テトがいつた言葉にジルは自分の幸せを感じた。  
少なくとも俺は、人を殺さなくてもいい時代に生まれている。  
それだけを望んでいた先人たちもたくさんいたんだ。ジルは歴史の  
重みを感じた。僕らは贅沢なんだな。

“お前さ、今回何にもしてないよな？ジヨニーの時もいなかつたし。  
”

テトがふと思いついたようにジルに言った。

“リアンの時もご飯作っていただけだったよな？ ”

“何が言いたいんだよ。 ”

ジルがテトに言った。本当にジルはピュアソウルかな。テトはたび  
たび起き上がるこの疑問を消すことができなかつた。

“テト、コーヒーおじるよ ”

ジルがお疲れさまといつもうな眼でそついた。

“ ハーヒーか！ よし早く行け！”

テトが嬉しそうに言った。

“ ジル、 お前いいやつだな。 ”

“ なんだよ、 急に。 ”

“ ハーヒーくれるやつはいいやつに決まっている。 ”

## 愛しい妹

“さて、次のピュアソウルは、ペレが唯一教えてくれたピュアソウルだったな”

そう言つたあと、テトの表情が少し曇つた。まだ羽が痛むのかとジルは思った。

テトがめつたにしない表情だ。けれど、次に続いたテトの言葉はジルの想像を超えるものだった。

“ジル、兄弟がいるのか？”

“ああ、カイルアに妹が住んでいる。双子なんだ”

“双子か。なるほど”

テトが少し考えるような目をする。

一卵性双生児の遺伝子は99%同じというが、ソウル的にも驚くほど近い。

ジルの双子の妹もジルと同じくピュアソウルだ。

テトは、ジルが家族の死を受け入れられるか不安を覚えた。

“その妹は何をしている？”

“今はフラハラウでインストラクターをしている。

有名なクムフラのアラカイ（弟子のインストラクター）なんだ。  
週に一度はワイキキのホテルでステージをしている”

“ そうか、フラダンサーか。ペレが選びそうなソウルだ。 ”

“ ペレが選んだ？もしかして次のピュアソウルはラナなのか。 ”

ジルの声が思わず裏返る。ピュアソウルの死をみてきたジルは次のソウルが自分の妹、ラナと知つて愕然とする

“ ま、待つてくれ。ラナが死ぬってことか？？ ”

“ 死はペレが選んだから決まったのではない。初めから死ぬピュアソウルの中から選ばれている ”

どちらが先でもジルにとつては同じことだった。

“ まだ28歳だ。病気だつてない。 ”

この間、ミスアロハフラに選ばれてこれからつて時だ。

なぜラナが。。。原因是？死因はなんなんだ？いつだ。いつ死ぬんだ？”

“ 落ち着けよ。全部はとても答えられない。とにかく行こうぜ。ラナのところへ ”

ジルはまったく平静を失っていたが、テトをのせてカイルアへ車を

走らせた。

パリハイウェイはいつもすいていて、緑の中の坂を上って下つたところにカイルアの街が広がっている。

ワイキキの喧騒と違い、1軒屋が多い落ち着いた住宅街で、ラナは実家に住みながら近所のクムフラのスタジオに毎日通っていた。カイルアのビーチはとにかく青い。引き込まれるような青さだ。いつも強い風吹いているビーチの空気は清らかで、真っ白な砂浜の砂は頬をすりよせたくなるほど決め細やかで美容液のようだ。ジルもラナもこのビーチを庭のように育つた。

“ ここの時間はクムのところにいるはずだ ”

眼をつぶつても運転できるなれた道。

ジルは実家にはよらず直接クムフラのスタジオへと向かつた。実際、こんな昼間から妖精を伴つて実感を訪れる勇気もなかつた。

母はラナを失つたらどうなつてしまふだらう。

ジルの心は重く、震える手でハラウのスタジオの扉を開いた。

ちゅうじゅうラナが古典のフラカヒコを踊っているところだった。

ペレをたたえるフラ。

イプヘケと呼ばれる使う巨大なひょうたんのような楽器でリズムをとり、

低く響く莊厳なチャント（詠唱）のフラカヒコ。

ペレが題材だけあって大地を表現するために重心が低い体制で動きも激しい。

荒い息遣いのなか、長い髪を翻して踊るラナ。妹のフラを見るのは久しぶりだった。

“アレが君の妹か。ピュアソウルのフラはさすが光が違うな。

”

テトが言った。

もともと現代フラのアウアナと違い、神々にささげる神事に踊られるフラカヒコは莊厳なものだ。

観光でみるショーダンスとは本来意味合いが違う。  
ラナのクムは祈りをささげるように歌う。

クムとはハワイ語で先生という意味を持つ。

胡坐をかいた間に挟んだイプヘケでリズムを取りながら次第に早く

なつていぐ踊りを先導するよに歌つてゐる。  
低いよく通る声がハラウに響く。

チャントと呼ばれるハワイの言葉で唱えられるリズムのある祈りの  
ような歌は聴いていると心が清められるような神事の魅力を持つ。  
文字を持たなかつたハワイアンは歴史や天変地異などをチャントに  
盛りこんで後世に伝えてきた。

特に王族一族に関しては、家系図をはじめさまざまな事実が、しつ  
かり記録されている。

神々を讃える言葉や、王族の歴史、埋葬された場所など事細かにチ  
ヤントに替えられ口伝えで後世に残されているハワイの文化はとて  
も特殊だ。

ジルはいつでもラナやクムのチャントを聞くと厳かな気分になつた  
ものだ。

70歳を越えるクムに刻まれた皺はまさにハワイ文化の生き字引を  
思わせ、その存在は人間国宝だった。

クムフラとはそれだけ価値がある人なのだ。

パウと呼ばれる腰で履く、ひだがたつぱりと寄せられたハワイアン  
ファブリックで作られたスカートを翻して、腰を振りながら踊るラ  
ナ。

“きれいだな”

自分の妹ながら、ジルは心からそう思つ。

ラナに限らない、フラに打ち込むダンサーたちはどの顔もりりしく  
美しい。

ラナの瞳と腰まで伸びた黒髪がペレを思わせる。ラナは情熱の塊の

ような女だった。

“ ハイナ！！”

フラが終わりに近づくと必ずかけられるお終いの意味のハワイ語ハイナを聞き取つてジルに再び緊張が走る。ラナに一体何が起きるっていうんだ。

“ ジル。何しにきたの？”

踊りおわつたラナに声をかけられてはつとするジル。

ジルの肩にのつている妖精に眼を見張る。口が開いたまま動かなくなっている

“ 気の性じやなければ妖精が見えるんだけど。これつてメネフネ？”

“ まあ、なんというか、みたいなもんだ。テトだよ。”

“ 始めまして。ジルを女にすると君のよつに美しくなるのか。不思議だな双子つて”

とテトが軽口をたたく。

“ ラナよ。妖精と話しているなんて。信じられないわ。クムにも見えるかしら。”

“ やあ、シンディー。久しぶりだな”

テトがクムに気安く声をかける。

“もしかして、テト？？まあ、なんてこと。私が少女時代に遊んでいた妖精とこんな歳に再会できるなんて！！”

“シンディーが10歳ぐらいの頃、僕らはこの辺のビーチで遊んでいたんだ。”

テトが驚く二人に説明する。  
あの少女がピュアソウルのクムか、縁とは不思議なものだとテトは思った。

“私が妖精と遊んでいたって言つても偉大なグラソマ以外は誰も信じてくれなかつたけれどね”

とシンディークムが笑う。

“すつかりおばあちゃんになつちやつたのに、よくわかつたわね。”

“妖精は魂で区別がつくからな、肉体の見た目が変わつたつて間違えたりはしないさ”とテトが笑つた。

“なんて素敵なものかしら。妖精と話せるなんて、本当に妖精なのちょっとと見せて”

ラナが感嘆の声を上げる。そして、テトを点検はじめた。

“羽がなんてきれいなのかしら、うわー。光るのね。

ちよつと飛んでみて。そう、わたしの手にも乗れる?

抱きしめたいわ。なんでアロハ着てるのー?

ジルとおそりい? 仲良しね。ハグしても壊れない?

“飛べるけど今まだちよつと痛いからあんまり飛びたくない”

テトがふてくされて言つ。

“なんでー? なんで飛べないのに羽があるのに?”

“質問が多いんだよ。ラナ”

質問攻めに面倒になつたテトがそつと笑つた。

素敵な日。感激したようにラナが言つた。

ジルが複雑な表情でそれを見ている。

ラナがもうすぐ死を迎えるから来た妖精なんだ。

死神みたいなもんじやないか。

ジルは悲しくて仕方がなかつた。

“おい、ジル。”

ラナの点検から逃げ出してきたテトがジルの肩に止まつていった。  
乱れた服を整えながらジルの心を見透かしたよつて言つ。

“僕は死を操つたりしない。

いいかい、肉体は滅びても魂は死はない。ピュアソウルを地球に返すだけだ。そんなに悲しむな。”

耳元でテトがささやく。

“僕は人間なんだ。そんな風に割り切れるか。”

苦しげにジルがつぶやいた。

まったく、カイの死を祝福できるとかなんとか言っていた矢先にこれだとテトは少し呆れた。

本当にピュアソウルなのか？けれど、テトは優しく言った。

“そうだな。人間は視野が違うんだった。ちょっと時間が必要だな。”

“ジル、今日はゆっくりしていけるの？妖精を連れてくるなんて、

クムに会わせにきたの？”

本当になんて素敵なお日なのかしら。”

はしゃいでいるラナ。クムも久しぶりの再会に心を弾ませている

“テト、あなたは歳をとらなくていいわね。あの日のこと覚えている？”

昔話に花を咲かせているそばで、ラナは一言も聞き漏らすまいと嬉しそうに話を聞いている。

ジルは少し離れた場所でそれを見ながら、複雑な思いでラナの死について考えていた。

いつだ。どうやって。せっかくミスアロハフラになつたばかりだつたのに。

ミスアロハフラは、幼い頃からフラを学んできたロコガールたちに  
とっては憧れのタイトルだ。

フラをやっている人で、ミスアロハフラにあこがれない人はいない。

年に一度、ハワイ島ヒロで行われるフラコンペティション、  
メリーモナークフラフェスティバルで世界で一番の、たった一人の  
フラガールに贈られる称号がミスアロハフラだ。

コンペティションにはクムが認めたダンサーしか出られない熾烈な  
もので、

ラナは持ち前の気の強さでフラ漬けの日を送り、去年やっと努力が  
報われたばかりだった。

ミスアロハフラに輝いたあの日の踊りは今もジルの心に焼き付いて  
いる。

ラナのフラは圧巻だった。

世界中からフラダンサーが集まるメリーモナークは文字通りお祭り  
騒ぎで、

会場は人でごったがえしている。妹の晴れ姿を見ようと一コ一コ一  
クから駆けつけていた僕は始めて見るフラダンサーたちの熱気に圧  
倒されていた。

どのハラウもフラダンサーも真剣にフラに取り組む姿勢が美しかっ  
た。

“ラナよ。ついに彼女よ”

と会場から声があがつた。ジルも少し緊張してステージに注目する。

シンディークムよりも少し高く若々しい声でゆっくりとステージを歩きながらラナがチャントを唱える。

鮮やかなグリーンのティーリーフのスカート。

黄色いタバの布を胸に巻き、朝積みのマイレで作ったたっぷりとしたハクを頭に載せ、

ウェーブのかかった黒髪が腰まで伸びている。

伸びやかなラナのチャントは満場になつていてる会場に響き渡り、ざわざわしていた観客はぴたつと息を呑んだよつて静まり返つた。

ラナのチャントが終わり、イプヘヘケのリズムとともにラナがが激しく踊りだすと会場からうおーっと歓声が起きた。

ラナが座るたび、ラナが回るたび起きる歓声はどんどん大きくなり、ジルは熱気に鳥肌がたつた。

激しく優しく、ラナは魅力的だった。激しい下半身の動きと裏腹に優雅な指先の動き、回るたび翻るスカートと長い黒髪。

会場が一体となつてラナのフラに魅入る。やがて、曲の終わり

“タンタンタン！”

シーンとした会場にイプヘケの音が響きぴたつと止まると同時にラナもぴたつと動きを止める。

観客はうねるように立ち上がり、拍手と喝采をラナに送つた。

まるでフーラの神が乗り移ったようだ。

人々は口々にラナのフーラを讃えた。

今でも鮮明に浮かび上がるラナの誇らしげな姿。血漫の妹だった。

“ これからだつたんだ。これからたくさんステージで活躍し、やがてシンディーのようにクムフーラになるはずだつたんだ。 ”

ジルはたまらなかつた。

“ ラナのフーラがもう少し見たいな ”

テトが言つたのでラナが喜んで何曲か踊つた。

ジルはフーラを見ながらテトにいつた。

“ 現世のゴールは通過点でしかない。

再び産まれてくるときにラナはもっと重要な役割を担つかもしれない。

今しかないんだよ。常に今しかない。

過去が何万回もあつたように、未来もきりがないほど永遠だ。

だから考えて何になる？

今にすべてをかけねば点が線になつていいく。ラナは次、産まれてきて  
てもフーラが上手いと思うよ ”

とテトがいった。来世でもラナはフラを踊っているのだろうか。

“ペレに愛されたフランだ。簡単にその能力を失つたりはしないさ。ずっとフランを踊っているさ”

テトがつぶやいた。ラナはフランを踊っているときが一番美しい。

ジルもずっとそう思つてきた。ラナ。僕の大切な妹。1位のタイトルをとつてもラナはいつもラナだった。とてもなく優しくて、それでいて負けず嫌いの頑張りやだった。僕はまぶしい妹に追いつこうと自分も頑張ってきた気がする。双子特有のテレパシーのように、不思議とわかりあえる自分の半身のような存在だった。

失いたくない。こんな風に死に執着する自分がピュアソウル？ジルはとても信じられない思いだった。

幼かつた頃、ラナと僕はよく一人きりで遊んだ。

多くの双子がそうであるように僕らは一人でいることで満たされすぎて、友達を作るのが苦手だった。一つのことを言つて十わかりあえる相手が身近にいるのに、簡単にはわかりえない他の友達は少し面倒だった。

ある日、ラナが熱を出して幼稚園を休んだ。僕はラナが居ない学校で初めて孤独を感じた。

産まれてからずっとラナがいた僕は一人ぼっちにとてもなく弱く

て打ちのめされた。

ラナがいなければ話す相手もいないんだと気づいた。

休み時間、それぞれ友達はわーと歓声を上げて校庭に走つていく、取り残された僕は一人しゃがんで砂をいじっていた。誰も話しかけてはこない。

休み時間が永遠のよう長く感じる。少しも樂しくはない。やがて、体がほてつてきて頭がガンガン痛みだし、ぼくはその場に倒れて起きられなくなってしまった。

“まつたく双子っていうのはおかしなものね。”

ママは関心したように、ベッドに並んで寝ている僕たちをみて言った。

“ラナが熱を出すとジルも熱をだす。なんのかしらねえ。”

僕は再び欠けていたものを取り戻したかのような安心感で包まれていた。

ラナと僕はもともと一つだったんじゃないかな? ラナが隣にいること、それは僕の不安や恐れをどれだけ消してくれただろう。

“ラナ、君が休むと僕は遊び相手がいなくなっちゃうんだ。だから同時によくなつて同時に学校にいこうね”

ラナは熱にほてつた顔を僕に向けていった。

“あいつとやうなるわ。私たちいつも同じだつたじやない。”

いつも同じだつたじゃない。

そう、いつもラナと同じだつた。

食べるのもやらぬことも思春期を迎えて男と女で少しずつ変わってきても、

根底に流れるものはシェアしあつて生きてきた気がする。

ラナが失恋するとなぜか僕も数日後彼女に振られたりして、心の痛みも喜びもわかつてきただ。

ラナは次第にフラに熱中していった。僕は僕でフットボールに夢中になつて、

少しずつ男女の差が出てきたけれど、双子独特のテレパシーのよつなものは健在で、

僕らはいつも一緒だと家に帰るたび確信しあつたものだ。

だから去年、ラナがミスアロハフラになつたとき、僕は自分のことより嬉しかつた。輝く妹を見て、僕も輝く気がしてた。

ラナ、僕の大切な妹。

シンティーがCDを取り出してかける。激しいカヒコとしがってゅつたりとしたアウアナが流れる。

“カレオーハーノ。”

イズラエルの優しい歌声。

故郷の家と自然をたたえた歌。

カレオハノとは権威と尊敬の声という意味だ。

ラナの優しい表情、ゆつたりと動く指先。

フラは一瞬たりとも手が止まることがない。

山、月、風、すべてモーションで意味を表す手話のような踊りだ。ゆれる腰。潮の満ち引きのようにゆつたりとした古来からの動き。満足げにそれを眺めるクムフラ。

“私も昔はラナのようにきれいだったのよ”

とお茶目に笑つた。

“知っているよ。君は美しかった。今でもあまりかわらないけど”

“まあ、妖精はお世辞も上手なのね。”

“お世辞じゃないぞ、美しさは心のありようだからね”

テトはそういうて優しく笑う。人間だったらかなりのプレイボーイに違いない。

“ クーホーメー、クーホーメ。 ”

イズの甘い歌声が続く。ハラウに響く声の主はイズラエル・カマカヴィオレ。

通称イズ。340キロの巨体から出される美しい声で人々を魅了した僕の大好きな歌手だ。

けれど38歳という若さで逝ってしまった。彼もピュアソウルだつただろうか。

ゆつたりとしたメロディーのカレオハノは僕とラナの大好きな歌だ。

カレオハノ、そうカレオハノがあなたの名称

私が生まれ育った土地、私の故郷、私が愛するふるさと、それはケアウカハ

名高し、それはケアウカハ

ラナは不思議とハワイ島の歌が好きだった。ペレに愛されたフラダンサーだからなのか。

ラナのフラを眺めながら、ジルの頭の中には走馬灯のように昔のラナの姿が浮かびあがつた。

思えば、ラナは常に勇敢だった。

ティーンネージャーになった頃、こんなことがあった。

ラナのクラスには色々な国の子が混ざっていて、中には母国から離れたばかりで英語が上手くない子も混ざっていた。日本から来たゆりという子は内気な性格もあってなかなか馴染めず英語の上達も遅かった。

ラナは何かにつけてゆりをかばっていた。

ある日、クリスという白人の女の子がゆりをからかい出した。

“ ゆり、もう一度言つてみて、なんて言つてるのか分からないわ。あなたつてサンキューもまともに言えないのね。日本人つてなんでこんなに英語が下手なのかしら。イライラするわ。”

メインランドの白人主義の地域からハワイにきたばかりのクリスは高飛車なところがあつてクラスでも浮いていた。

ラナがクリスの前に立つていった。

“ ク里斯、じゃあ、あんたは日本語が話せるつていうの？ 日本語話してみなさいよ。産まれてから英語しか話してないくせにそれができるからつてなんでそんなにえばつてるのよ。”

ラナはきつとクリスを見据えて言つ。

“ なんなのよ。ラナ。あんただつてイラつくでしょ？ なんだつてここはこんなにアジア人がえばつているのよ。白人と同じレベルだと思っているわけ？ 私がいたところではみんなバカにしていたわ。貧相で礼儀を知らない東洋人はアメリカに来る

なつて。 ”

“ もう一度言つて見なさいよ。 あなたの肌が白いからつてそれがなんだつていうの。 ここはハワイよ。 「スモポリタンな島よ。 少しの子より鼻が高いからつてその鼻へし折つてやりたいわ。 ”

大体あなたのパパ、 どの国の車乗つているのよ。 日本の車じゃないの？

それを作つた国をバカにするなんてその車に大金払つたあなたのパパもバカつてことじやない。

誰にも生まれてきた国や言葉をバカにされる権利なんてないわ。 ”

クリスはさつと立つみつけたクラスから出て行つた。

ラナは隣でおびえてじるゆつて言へ。

“ 心配しなくていいのよ。 英語なんてそのつか覚えるわ。 ステップバイステップ。 フラと一緒にね” ゆりがラナにはにかんだ笑顔を見せる

“ サンキュー”

“ ちゃんと聞こえないじゃない。 ゆり。 私あなたの英語好きよ。 マイティア一。 ”

そしてそつとハグをすむ。

“ ありがとう。 ラナ。 ”

ゆりは日本語でお礼をいった。

“ You are welcome! 強くなるのよ。ゆり、負け  
ちゃだめよ。 ”

ゆりは徐々に明るくなり、英語も習得した。

ラナに影響されて始めたフラにすっかりはまり、今ではラナの大好きなフラシスターの一人。

2年前日本に戻つてからもフラのお教室を開き、ハワイと日本を結ぶ架け橋となつていて。

ラナが日本へ行くときはいつもシンディーとラナの世話や各地イベントの世話に走り回つてくれる大切な友人になつていた。

“ ラナはいつも大切なものを間違えたりしない ”

ゆりは口癖のようにラナをこう表現する。ラナは知つていて

何が一番大切なかをいつも知つていて、何かを決めるときその順番は絶対揺るがないの。だから信用できる。

ラナの心意気は幼い頃から大人になるまで変わらなかつた。自分の信念を曲げない、敵を作ることを恐れない。

時には情熱的に時には優しく繰り返されるフラのステップのようにラナはいつだつてラナのままだつた。

フラに対する熱意も一環していた。

数多くいたフラシスターの中でもラナの熱心さはクムの眼を引いた。特に初めからダンスが上手だつたわけでもない。どちらかといえば、

目立たないフラを踊る少女だった。

けれどその熱意はきっと将来この子が中心にいるとクムに確信させるものだった。

思春期になつて興味が男の子や勉強やファッショニにつつしていく女の子たちの中、

ラナはいつでもフ라に対して誠実だった。

“クム、この振りは大地を表現しているならもつと沈んで下から手を上げるべきではないですか？”

少女の時は子供とは思えない指摘の鋭さに驚いたりもした。

美しく成長したラナのフラは神々しいほどだった。

奉納のフラをささげるとき、ラナが踊る前は必ずさーと通り雨が降つてフラシスターの中でも有名だった。

“次はラナよ、雨が降るからイプにカバーを。”

皆当然のように大切なものやぬれたら困る機材などを大きな木の下に隠す。

ラナがすくと立つと晴れている空からサーと雨が降る。

困るほど多くもなく気づかないほど少なくもなく、いつも数十秒清めるように祝福するよに雨が降るとさつと止む。

そしてラナが踊りだす。足首と手首に巻かれたマイレのグリーン、たっぷりと寄せられたひだが美しいタバのパウスカート。低いシンディーのチャントとイプヘケのリズムに合わせて踏まれるカホロのステップ。

パウスカートが地面につくほど体勢が低く、ラナのフラの安定感と存在感、下半身のハードな動きと対照的に優雅にながれる指先のモーション。

どれをとっても完璧だった。だから、去年、ミスアロハフラになつたとき、誰もが思った。

“やつぱりラナが。”

と。シンディーも次のクムはラナにと決めていた。

テトに言われるまでもなくシンディークムにはラナの踊りがペレに愛されていると確信した出来事が何度かあった。

フラシスターとともに奉納フラをするためにハワイ島へ合宿に叫つた。

ペレは時々フラシスターたちにいたずらをして自分の存在をアピールしたりするので、オアフに戻ったあとフラシスターたちは

“ 買つたシールのネックレスがどこを探してもない。ここに入れたのに。。”

とか

“ 火口にレイを捧げようと思つて持つていつたら何度投げても自分の手の中に返つてきてしまって、ペレはこのレイ嫌いなのかしら。代わりに私の髪飾りを風に巻き上げてもつて行つたわ。 ”

など少し不思議な体験を披露しあうのが通例になつていた。

その日、ラナの奉納フラは困難を極めていた。

火口に着いたときはへとへとになるほど風が強く、長い髪を巻き上げるほどで、立つてするのがやつとの強風に

“ いれじや踊れないかもしない” とシンディーも思つていた。

ラナは

“大丈夫。踊れるわ”

といふと一人すつと立ち上がる。

何か確信があるように強いまなざし。

この子はやはり違つわ。ヒクムは神々しいものを見るように見守つた。

いつものように雨がセーツと降る。そして風がぴたりとやんだ。

“ペレがラナのフラを見たがっているんだわ。”

シンディーは確信した。

そしてラナが踊りだす。ペレをたたえるカヒコが終わるとまた風が吹き出した。

ラナは一人火口に向かつてうなずいている。

“ペレの声が聞こえたの?”

シンディーが聞くと

“いいえ、ただそんな気がしただけです”

とラナが笑つた。なんて言つていたのかしら。

シンディーには確かにラナがペレと話しているように見えた。ラナはペレに愛されている。シンディーには少しうらやましいほどだと思った。

“ それにしてもラナは美しいな。 フラダンサーとして生きてきた回数が多いんだ。

ラナは生まれてくる前もフラダンサーだった。その前も、その前も。年期が違うな”

テトがラナのフラに惚れ惚れしながらジルに言つた。

“ ジル。 花がどうして美しいか知つていてるか？”

ラナを見つめながらジルが答える

“ 考えたこともないな。 ”

“ 心が美しいからさ。 ”

“ 花はただ花だからきれいなさ。 心がきれいだからただそこにあらだけで美しいんだ。

美しいものは人の心を動かす。 それだけ人はマナに敏感なんだ”

そうか、 それならラナは花のようだな。

情熱的に大きく開く八重のハイビスカス。

赤でもなく淡いピンクでもない。 真紅の八重のハイビスカス。 そこではたと気づく。

ハイビスカスが、 長くは咲かない花だな。

踊るラナのまわりにふわーっと金色の光が見えた気がした。

踊り終わったラナはふーっと長い息を吐いた。そして、一瞬顔をしかめるといめかみを押さえた。

“あれ、どうしたのかしら。”

立ちくらみをしたようにふらりと足元が危うい。

“ラナ？”

心配したシンディーが声をかける。

“大丈夫？どうしたの？”

心配をかけまいとすぐに笑顔に戻るラナ。

“大丈夫。少し頭痛がするの。カウチを使わせてもらつてもいいですか？”

“もちろん。少し休みなさい。いつも元気なラナがおかしいわね。疲れているのかしら。”

それは少し頭痛というぐらいの顔色ではなかつた。どんどん顔色が悪くなつていく。

その様子をみて凍りつくジル。

“まさか？”

テトを見るとテトも真剣な表情をしている。

“ 早すぎる。僕たちわざわざたばかりだりつへ。 ”

“ ジル、色々なことのスピードが加速しているのかもしれない。  
それだけきっと緊急事態なんだ。アースが。 ”

“ ちょっと待つてくれ。せめて両親を呼んでくる。 ”

ジルはすでにむづ泣きになつてクムの「うち」を飛び出した。

訳もわからない状態の両親を無理やりクムのスタジオに連れて戻つ  
てくる

“ ジル、どうしたつていうの？突然現れて、ラナは少し眠つて  
だけよ ”

シンディーは血相を変えているジルをびっくりしながら見つめている。

“ テト、ラナはどう？ ”

“ 眠つているよ。 ”

“ なんだつていうのジル？説明して欲しいわ。 ”

ジルの母親は怒つたように言つたあと、テトに眼を留める。

“まあ、メネフネ。私も小さい頃はたまに見えたけれど、大人な  
つてからは初めて”

テトに会つて嬉しそうなママを制してジルは言ひ。

“マム、説明は後だ。ラナがもつすぐ逝つてしまつ。

“行くつてどこにだい？ 眠つているじやないか。

ジルの父親も突然のことにも訳がわからずにつひつひしてい

“とにかくラナを起しそう。具合でも悪いのか？ 連れて帰ろう。

ジルの父親がカウチに近づいてラナを優しく起します。

“ラナ、具合が悪いのか？ ラナ？ お家で休もう。

“ラナ、ラナ。帰ろう。”

ママも呼びかける。

“まあ、そんなに急がなくてもほんの少し休んでるだけですよ。皆  
どうしちゃったのかしら今日は。テトが来たからかしらね”

シンディーがとにかくお茶でも入れましょひと言つて奥に入る。

“ラナ。ラナ。おきてラナ。”

ジルの母親も引き続き呼びかける。

“ハニー、様子がおかしいわ。こんなに呼んでいるのに起きないな  
んて。”

ジルの顔色が変わる。テトを見ると

“わかつているだろ”

といふ顔でジルを見る。

“嫌だ。嫌だ。ラナ。ラナ。”

ジルは取り乱してラナにすがりついた。

“なぜだ、なぜ起きない。”

“ラナが死んでしまった。僕の最愛の妹が。”

ジルの悲鳴がスタジオを包む。

“なんてこと。”

顔を覆つて泣き出す両親。お茶を持って入ってきたシンディーはカ  
ップを床に落として立ち尽くすんでいる。

“だつて、さつきまであんなに元気にフラを踊っていたじゃない。”

騒然となる。それそれが訳もわからず取り乱している。

“ラナ、大変だ。悪夢のようだ。”

“ほんとうよ、さつきまで本当に元気に踊っていたのに。”

“ああ、なんてこと、私より先に娘がこんなことになるなんて。”

ラナの母親は泣き崩れてしまった。

テトが混乱を落ち着けようとラナにすがつて居るジルに話しかける。

“ジル、落ち着け。ジル。ラナの顔を見てご覧。苦しまずに逝った。ほら、ちゃんと見てご覧。お前の自慢の妹だろ。ピュアソウル。死ぬときでさえこんなに美しいんだ。”

ラナは微笑みながら眠つて居るようだった。ジルは涙に滲んで妹の顔がよく見えない。

“だめだ。ラナ。僕はとても耐えられない。君無しの人生なんて、僕の魂の半分が消えてしまったようじやないか。”

“消えたりはしないよ。ジル。ラナは帰つただけだ。またすぐ会える”

テトが優しくジルに語り。泣きじやぐるジル。

“見てご覧、ジル。ラナの魂が行くよ”

テトがラナの胸に手を当てる。一筋の光がすーっと天に昇つていく。

“ああ、ラナ。逝かないで。僕たちいつも一緒にいたじゃないか。”

ジルがその光にすがりつとする。

“ジル、泣かないで。またすぐ会えるわ。だつていつも同じでしょ？  
きっとそういう風にできているのよ”ジルの頭の中ではラナの声が聞  
こえた気がした

“ピュアソウルだ。ジル。”

テトから手渡されたラナのソウルを握りしめて、それを抱きしめる  
よみにジルは嗚咽した。

“どうしてこんなこと。”

来る人すべてが口にしたこの言葉。診察した医師は言った。

“脳梗塞ですね。きっと踊っているうちにすでに頭部からかなりの  
内出血があったと思われます。

それで、急にカウチに横になつた拍子に大量出血して死に至つたか  
と。”

頭の遠くでその言葉と両親の嗚咽を聞きながらジルはラナの言葉を  
繰り返していた。

“だつていつも同じだつたじゃない。”

“ジル、またすぐ会えるさ。”

テトがいった。

“ すぐつていつさ。僕も死ぬのか? どうしてさ、アースの機嫌をとるためにどうして僕らが犠牲になるんだ。 ”

ジルは怒りに燃えた眼でテトを見つめた。

“ それは違う。アースは命をコントロールしたりしない。  
俺たちは、死ぬことになつているピュアソウルを探しているだけさ。  
順番が違う。 ”

“ じゃあ、誰が決めているんだ? その死をだれが決めているのさ。 ”

そんなこと。とテトは静かにいった。

“ 自分に決まつていてるだろ? ピュアソウルは自分でいろんなことを  
決めてこの世に来ている。  
産まれてくる両親も、出会う人も初めから決まつていてる。だから絶  
妙なタイミングでいろんなことが起こる。 ”

“ 全部が計画どおりつてことか? 自分で決めた人生をただ計画通り  
生きて死んでいくのか? ”

“ 違う。迷路のように、生きていくときに選んだ道で起ること  
違つてくる。

これを選んだらこうちへこくつてこうじ合に色んなオプショ  
ンがあるんだ。

でもそのどの道も、結局自分で決めている。色々な道はあるけれど、その道すべてがクリアしたい課題に向かって進んでいる。

早く課題をクリアすれば早く逝くときもある。すべては魂の進化の為。

ピュアソウルはほとんど卒業試験に近い位置に居る。魂のレベルが高ければ若くして死ぬこともある。

他に役割があるからだ。ジル。お前本当にピュアソウルか？ピュアソウルならそういうことを本能で感じていてもいいはずなんだけだな。

“

テトの疑問は隠しきれないほど大きくなっていた。

“ 知るか。僕はラナと99%同じ遺伝子でも、きっとその1%がピュアソウルかそうでないからの違いなんじゃないか？

僕はラナみたいに立派じゃなかつた。魂が清らかだと思つたこともない。普通の人間なんだ。 ”

“ そりなのかな？？？間違えるつてことがあるのかな。 ”

“ 神様だつて時には間違えるんじゃないのか？  
とにかく僕には荷が重過ぎるよ。大切な人に死はつらすぎる。また会える？そんな風に思えるか。 ”

ジルは苦しそうにじつじつうなだれた。

その様子を見てテトは思った。

“ 本当に間違えるつてことがあるのか。こんな一大事に。いや一大事だからなのか。

とにかくペレにもう一度あつて確認してこようか。 ”

誰もが早すぎるラナの死に参っていた。

カイルアはラナの死を悼むようにスコールが降つた。

ジルとその家族の絶望にテトは息苦しくなつていた。

少し離れないと死んでしまう。テトは少し混乱していた。

こんなに

死に執着するピュアソウルがいるのか？

ジルは本当にピュアソウルなのか。

## 女神ペレ

憔悴しているジルとその家族を置いて、  
テトは一人、ペレに会いに行くことにした。

確認しないと、間違いだつたら大変なことになる。

ピュアソウルじゃなかつたらジルが壊れてしまひ。

魂のレベルに応じて背負つ課題は違つてくる。

魂のレベルがピュアソウルでなかつたらアースを救うなんて荷が勝ちすぎても耐えられない。

絶えられない課題を突きつけられたソウルの苦しみは計り知れない。

人間つてのはややこしいな。なんだつてあんなに落ち込んだり機嫌が悪くなつたりするんだ。

もつと自分をコントロールすればいいだけのことなのに。イケパパルアの性だな。

テトはぶつぶつとそんなことを思ひ。

人の魂はハワイ語でイケパパルアと呼ばれる痛みや苦しみ、楽しみや喜びを感じるイケパパルアという下着のよつたものに包まれて体の中に入っている。

イケパパルアの大きさが大きいとオーラがあるのよつに表現されて他人への影響力が大きい。

けれど、イケパパルアという感情の領域が余計な不安や苦しみを感じさせることも事実だ。

妖精は苦しみや不安を感じない。

自分たちで制御できる。悲しみは人間に共感できなければなんの助けにもならないために残してある。

だからラナが死んだ悲しみはテトにも理解できる。

けれど、それはただ悲しいだけ、苦しんだり、起つてもいいことを心配したり、恐怖を感じたりはしない。

ジルが居ないので移動にはもつと楽な方法を取ることにした。

想つ。

なるべく詳しく正確に想つ。そこにエネルギーである強いマナが流れると現実になる。

氣づくとテトはペレの洞窟の前に居た。

“ペレ、テトが来たよ。あつてくれるかな?”

“何しに来たのよ。”

ペレが面倒臭そうに出て來た。

“機嫌が悪いらしい。

“ ここにきたってことばピュアソウル集めてきたんでしょう？ ”

“ あと少しなんだよ。 ”

“ じゃあ、なんで戻ってきたのよ。 ”

アースの機嫌が悪くてイライラするわ。わたし、いつそのこと大きな噴火でもさせて終わりにしたいくらいよ。 ”

ペレはそういうと真っ赤に燃えた瞳を一瞬ギラットさせた。

“ やめて。俺たちの努力が無駄になるじゃん。今ので軽く地震位起きちゃうだろ。 ”

“ なんかいいことないわけ？ まったくなんで私が人間に振り回されなくちゃいけないのよ。 ”

全部消したらアースだって本当は清々するんじゃないのかしら。 ”

“ またまた、想つてもないことを言わないんだよ。 ”

ペレ。君は怒ると真実を言わなくなるんだから。君が人間を守つているくせに。

愛してやまないんだろ？ 俺たち妖精が嫉妬するくらの愛を。 ”

テトが言った。

“ ふふん。わかつたようなこと言つんじゃないわよ。 ”

ペレはそつこつて女神の微笑を見せる。

この人はまったく。誤解されてばかりいるな。

テトはいつも想う。気分屋で情熱的。我慢で奔放。ペレのイメージはそう見えるだけだ。実際にそんなに人間臭い女神は存在しない。

ペレの魅力の一つ。人間臭さを演じられるところだろうか。

恩に着せるのが大嫌いな女神はいつも減らず口をたたいては自分を悪者にして人間をサポートしている。

“ねえ、偉大なディーバ。教えて。ジルは本当にピュアソウルなのか？”

“テト、何を言い出すかと思つたらそんな初歩的なこと私が間違えるとでも？”

“そうだよな。でも僕が知つているピュアソウルと違つんだ。大分未熟な氣がして。聖人と呼ばれるような人と違つてもつと人間臭い。おろおろしたり悲しんだり、大きな不安に打ちひしがれたりしている。さつきもラナの死に耐えられる風でなかつた。”

“ラナ！。ラナが死んだの？彼女のフラは最高だつたわ。

私によく似た瞳をもつフラダンサー。

ラナのピュアソウルでアースの機嫌もよくなるかしら。しばらくラナの魂を私の側に置いときたいわ。”

ペレは楽しそうにいつた。

“ジルはラナの双子の妹だ。”

“知っているわ。”

“じゃあ、やつぱりピュアソウル?”

“だから何度も言わせないの。ジルは今回のミッションの代表。ピュアソウルよ”

“代表??”

“そう、ピュアソウルに進化するピュアソウル。

進化する瞬間の巨大なエナジーをピュアソウルの結晶に注いでアースに持っていくのよ。”

“ピュアソウルに進化する瞬間のエナジー。”

“ちょっと待ってくれ。

“じゃあ、やつぱり今はピュアソウルじゃないんじゃないかな。”

“今この瞬間はね。ピュアソウルに進化する課題を持った魂なのよ。貴重でしょ?”

“現世で進化できなかつたら?”

“だからあなたを呼んだんじゃない。

ジルがおじいさんになるときに進化したんじゃ遅いのよ。

なるべく早くいろんなことに気づいてピュアソウルへの課題をクリアしないと。時間がないわ。”

テトは想つた。ピュアソウルに進化する魂を見られるなんて光榮だ。けれどそんな瞬間に上手いこと立ち会えるのは数百年に一度。なぜジルが選ばれたんだ。

“可能性が高い順から選んだのよ。

しつかりやんなさい。

アースが人間の滅亡を決めたらさびしいじゃないの。

問題児ほどかわいいっていうでしょ？魂の進化を応援するのは私の趣味よ。

全部が高尚な魂じゃ退屈だもの。”

と言つてペレは笑つた。

人間に思い入れたつぱりの女神は妖艶な美しさに溢れている。

アース早まらないで。

テトはそう想わずにはいられない。

人間を愛している女神とぼくら妖精のために。

人間はそう悪い生き物じゃないんだって証明してみせるから。

“ そういえばテト。あんたラカの水取りにいくんですって？”

“ そうだよ。これが終わったら。女神様は何でもお見通しなんだな。

“ 違うわ。興味があつただけよ。テト、簡単にラカの水なんて手に入らないわよ。いくら妖精でも無事には帰れないわ。”

“ 仕方ないさ。愛する人が望むから。

待つていれば会えるつていつも入つて待つのが苦手だろ？

目の前から消えた瞬間にもうそれを恋しがっている。

セイラが泣いて頼むんだ。物事の理屈なんてふつとぶさ。ラカの水を取つてくれればセイラはまたハッピーになるつてわけ。”

“ セイラ。”

ペレは少し遠い眼をする。

“ 人間と妖精の子供。タブーを犯した妖精の子供”

“ ペレ、そんな風に言わないでくれ。セイラは俺の愛する人”

“セイラに罪はないわ。だから私も見逃している。けれど、妖精が悪魔と取引するなんてあってはならないこと。一度清めなくてはと思っていたわ”

“清める? ”

“ さうよ。テト。ラカの水で、リリーとリアンを蘇らせなさい。あの聖水で悪魔もリリーの魂から離れるわ。 ”

“ 恋人と女神の命令じゃ、俺はなんとしてもやり遂げないといけないな。 ”

テトは覚悟を決めたように言った。

“ そうだ、ジルを連れていきなさい。そうしたら助けになるわ。 ”

“ 人間が助けになるのか? ”

テトが不思議そうにいった。

“ 魔物の思うツボじゃないか? ”

“ そんなことないわ。きっと助けになるから連れていきなさい”

ペレは命令口調でいった。妖精は女神に逆らわない。

“ 女神様のご忠告、胸に刻みます”

“ ははは。なにかあつたらヒイアカを呼びなさい。妖精ぐらいの助けならあの子でもできるはずよ”

“ありがとうございます。”

“あんたもやれば礼儀正しくできるんじゃない。女神に敬意を払うなら毎回その態度で来なさいよ。”

ペレが冗談めかしていう。

## ヒィアカとはペレの妹。

奔放な姉の使いをさせられているこの従順な妹はペレとは対照的に穏やかで優しい気性の持ち主。

“ヒィアカに会えるだけで嬉しいよ”

ヒトが皿のペレせ

“ 私よりヒィアカのほうが美しいなんていつたら溶岩の中に放り込むわよ”

と怒つてみせた。

“いいえ、あなたより美しいティーバは居ません。ペレ。最高の女  
神”

テトが「いやいやしつかお辞儀をするとそれでいい」と云つたが、

いてみせた。

まったくチャーミングな方だとテトは思つ。  
人間にある「冗談はきつすぎるけどね。」

人間はペレの「冗談を全部間に受けて恐れおののいてしまつた。  
だからペレは悪魔のよつに恐ろしい神として誤解されている。  
悪魔が神？魂の違ひすぎる」この二つを比べるなんてまったく人間の  
想像力つて貧困だ。テトは笑つてしまつ。

## ヒィアカ

ジルは夕暮れのカイルアビーチに居た。

透明度の高い青い海にひすらとオレンジの光が入り、銀色に輝いている。

“ どこに行つてたんだい？ テト、全部終わつたよ。 ”

ジルは憔悴しきつたように言つた。ラナが死んでしまつた絶望に満ちている。

“ そつか。 ”

テトは息苦しくなつてやつと応える。たまらないな。人間の絶望は。

ペレのもとに行つていた数口の間にお別れの儀式は済ませたようだつた。

“ 僕は妹を失つた上、妖精にも見捨てられたのかと思つたよ ”

“ くだらない心配ばっかりするなよ ”

テトは言つた。なんてネガティブなんだ。  
すべての不幸は不安から始まるというのに。

テトは呆れてしまつ。

“ラナは海が好きだつたから、海にも返してあげるんだ。大好きだつたカイルアビーチに”

“ そうか、そうだな。好きにしたらしい。

テトは思った。気の済むようにしたらしい。

たとえそれがラナの魂が抜けたあとのただの灰だつたとしても人間にとつては大事な儀式なんだろう。

ラナにもその気持ちは通じるだろうから。

ジルは大切そうにラナの灰が入つた小瓶を取り出して海に流した。

“ ラナ、また会おう。僕の魂が君に追いついたらきっとまた会える  
ね ”

“ 最後に一緒にいれてよかつたな。ジル。 ”

“ ああ、ラナのフラも見れた。でも、突然いなくなるなんて残酷だ  
な。 ”

“ そうだな。でも、勘違いするな。死は呪いじゃない。  
どちらかといえば祝福だ。ラナは苦しまずに人間を卒業した。祝つ  
てもいいくらいだ。 ”

テトはそういうて励ました。

ジルは、そんなテトを眺めながらため息を漏らした。

“で、テト、僕はピュアソウルじゃなかつただろう？一人の死でこんなにダメージを受ける人間がピュアソウルな訳がない。”

“ そうだな。まだピュアソウルじゃない。安心しろ。今は悲しんでもいいぞ。普通の人間だったんだから。 ”

“ そうか。よかつた。僕は、泣きたいんだ。ただラナが居ない悲しみを吐き出したい ”

テトはそつとしておくことにした。なによりジルの絶望が身に應える。

人間つてやつは本当に弱くてやつかいだな。

けれど優しい妖精はそつとビーチに息を吹きかける。

“ 夜の風がジルに優しくなるように。悲しみが小さくなるように ”

と呪文をかけて。

カイルアビーチを吹き抜ける風はジルの体にまといつくように流れていった。

悲しみが海に溶けるように。

風に吹かれるたびにジルは“また会える”といつ言葉を頭ではなく心から信じられる気がした。

また会える。同じなのだから。そうだな。きっと会えるんだ。今だけ、さびしいのは今だけ。ジルは涙をぬぐった。

“ そこにいるのかラナ。神にでもなったのかい？それとも天使？テトのようになつたのか？僕もそこにいけるだろ？ ラナ。君が恋しいよ。 ”

ラナの声が聞こえないとと思つたが、すっかり暗くなつたカイルアの美しいビーチにはただ波の音だけが響いていた。

翌朝目覚めるとテトの前にヒイアカが立つていた。

“ ヒイアカ。 ”

驚いて美しい女神に抱きつくテト。  
テトにとつては巨大なヒイアカ。氣さくな女神はそつと小さな妖精に口付けをする。

“ 久しぶりね。テト。お姉さまの使いできたわ。 ”

ヒイアカのどこかゆつたりした心地よい話し方。  
おつとりした性格がそうさせるのかヒイアカは側にいるとゆつたりした気持ちになる女神だった。

“ テト、カネの水を先に取りにいけって、お姉さまが言つたよ。 ”

“ でも、ピュアソウルの方が先じゃないのか？ ”

“ そうよねえ。私もそう思つたんだけど、

お姉さまは、カネの水を取りにいく途中でジルがピュアソウルにな

るかもしれないって言つた。テトもやつ思つへ？”

“ どうかな。ピュアソウルになる瞬間に立ち会つたことがないんだ。何をきっかけでピュアソウルに変わるのが検討もつかない。なにか試練がいるのかな”

“ わからないわ。お姉さまがヒィアカにあなたたちを力ネの水の洞窟まで案内しなさいつておっしゃるから私来たのよ。一緒に行く？”  
おつとりした様子のヒィアカはテトが行かないといつたらう、と言つて帰つてしまいそうだ。

“ 一緒に行つてくれるの？ヒィアカ。”

“ そうね、入り口までつて言われているけどそれでいい？  
テトはなんであんな危険な場所に行くの？妖精だつて無事に帰れな  
いわ”

ヒィアカが心配そうに言つ。

“ あら、しかもテト。あなた羽が傷ついているじゃないの？”

珍しいものを見たかのようにヒィラカがテトの羽をしげしげと眺め  
る。

“ なんでこんなふうに切り取つたの？”

“ 耳が聞こえない老人の鼓膜に使つたんだ。”

“ なるほどねえ。痛かつたでしょ？私が治してあげるわ。”

そういうとヒイアカは眼を閉じて何かを念じ、ふつとテトの羽に息を吹きかけた。

見る見るうちに羽の傷がふさがつていいく。

“うわ、ヒイアカ。すごいな。治ったよ。”

テトは元気に飛び回りながら嬉しくてクルクル回った。七色の光の粉が周囲に舞い散る。

“結構痛かったんだ。助かったよ。”

“ふふふ。女神って意外と役にたつのよ。妖精はすぐにそれを忘れちゃうのね。”

“で、どうしてカネの水をとりにいくんだっけ？”

思い出したようにヒイアカがおつとりといふ。言いたくなければ言わなくてもいいのよとその眼が言つている。

“セイラのお母さんを呼び戻すんだ。カネの水で。それがセイラの望みなんだ。”

“そうなの。あなたは愛する人の望みをかなえたいのね？”

“そう、愛する人の望みだからかなえてあげたい。それだけ”

“ふふふ。ロマンね。”

ヒイアカが楽しそうに笑う。

“ そうだな。ロマンだ。  
 テトも楽しそうだ。 ”

愛している人がいるつていうだけですばらしいことだよ。

恋は世界を一瞬で変えてしまうんだ。

テトはピンク色の光を放ちながら飛び回った。

“ まあ、恋の色ね。 ”

ヒイアカがまた楽しそうに笑う。

“ そう、恋の光だろ。世界が変わる魔法の色さ ”

“ 力ネの水をとつてセイラの家族を戻すのさ ”

“ ふふふ。楽しみね。 ”

“ ああ、ヒイアカにも会つて欲しいよ。セイラは特別なんだ。 ”

ヒイアカとテトが楽しそうに笑うのを聞いて  
ジルが起きてきた。

“ ジル、元気をだして。力ネの水を取りに行こう。大丈夫。僕らにはディーバヒイアカがついてるんだから ”

突然現れたヒイアカにジルがびっくりする

“女神様なのですか？”  
ジルが訪ねる。

“ペレの妹のヒイアカだ。優しく美しいティーバだよ”  
テトが紹介する。

“一緒に力ネの水がある場所まで行つてくれるつていうんだ。”

女神。

ジルが出会つた二人目の女神。

ペレの激しさとは正反対のおつとりとした美女で全てを許してくれ  
そうな慈悲深い目はやはり人間を超越していた。

“力ネの水？何の話だい？”

“力ネの水さ、それを飲むと命が再び蘇るんだ。”

“なんだつて！ラナの命も蘇るのかい？”

顔を見合わせるヒイアカとテト。

“そつか、そうだな。蘇るな。なんだ、そつかラナにも使えばいい  
んだ”

“どうして気づかなかつたんだろつとおかしそうに笑うテト。

“ ラナが蘇る ”

沈んでいた心が再び活氣を取りもどし、力がみなぎつてくるジル。希望が体を駆け巡るのが分かる。

テトがおいしそうに口をもぐもぐした。

散々ジルの絶望で苦しめられたお返しだ。存分に味わつた。

ヒイアカがそんなテトを面白そうに見ている。

“ そんなにおいしいのテト？ ”

とおつとりとこつ。

“ ヒイアカも食べてみればいいのに ”

といつと

“ ふふふ。 ”

ヒイアカは楽しそうに笑つた。一瞬で部屋が希望で溢れかえつた。

“ よし行こう。カネの水を取りに！ ”

“ 巨人も魔物も怖くないぞー！ ”

テトが言つ。

“巨人？魔物？”

ジルにはなんのことかわからない。

“気にしない。気にしない。先のことは気にしない”

ヒライアカが歌うように楽しそうに叫ぶ。

今が楽しいなら心配するのはよそう。せっかくの楽しみが消えてしまつわ。

一人に引きづられるようにジルも旅立つた。

そうか、僕には女神と妖精がついている。なにが怖いものか。自分に言い聞かせながら。

## 入口

太陽が昇る方向へ歩くのよ。

ヒイアカがいでのでそれに従つて歩く。

ヒイアカは呼べば姿を現すが色んな場所をいつたりきたりしているらしく、

現れたり消えたり、突然前を歩いていたりを繰り返している。

“ まったく忙しい人だな。ペレがものすごくたくさん用事をヒイアカに言いつけるんだ。 ”

とテトがおかしそうにいった。

カネの水のある洞窟へは歩いてしかいけないらしい。  
森に入つてから、ここは本当にハワイなのか？と思つような見覚えのない道が続いている。

“ ハワイにこんな道あつたつけ？ ”

ジルが聞くと

“ 大昔からあつたさ。人が歩かないだけだ ”  
とテトが答えた。

“ 誰と一緒にいると思つてゐるんだ？女神だぞ ”

テトがおかしそうに笑つた。

“ヒイアカ、どこへ行くの？”

“ヒイアカ、どうして人間といふの？”

“ヒイアカ、ペレのお使い？”

女神ヒイアカは妖精たちに人気があるらしい。

ひつきりなしにどこからともなく現れてはヒイアカに挨拶をしてく  
そのたびにヒイアカは

“力ネの水をとりにね。”とか

“お姉さまのお使いよ”とか丁寧に答える。

そして呼ばれて返事をしてはまた消える。本当に忙しそうだ。

色とりどりの妖精たちがそれぞれ美しいのでジルは楽しかった。

女の子の形をした妖精もいた。

どの妖精も端正な顔立ちで美しかつたが、アロハを着ているのはテ  
トだけだ。

“テト、アロハシャツきている妖精つて君だけだな”

“そうだな。みんな服に興味がないのかいつも同じようはふわふわ  
したものを見ている。

妖精つて感じだろ？俺は人間の服に興味があるんだ“

“へえ。スーツも似合つてたもんな。 ”

ジルの褒め言葉にテトが嬉しそうに笑つた。

一通り妖精たちが挨拶にきたのか、しばらくするとやつと静かになつた。

“一休みしましょう”

ヒイアカがいつのまにか現れて木の根元に腰掛けている。

“どれぐらい歩いたかな？”

“そうねえ。ざつと二十時間ぐらい”

“二十時間！僕全然疲れてないよ”

ジルが驚いていった。人間が二十時間も休みなく歩いて平氣でいるなんて。

“ヒイアカがずっとマナを送り続けていたからね。でも体は疲れているはずだからちゃんと休まないと壊れちゃうよ”

テトが言った。

“ そうね、食事もとらないといけないわ。 ”

女神が木の根元に腰掛けるのを、待つっていたかのように、フルーツ

や水、さまざま野菜が  
田の前に置かれた。メネフネの奉納らしい。

“ ありがとう。みんな ”

ヒイアカはにつゝりして、

“ さあ、いただきましょうか。 ”  
とテトとジルに声をかけた。

“ ハーヒーないかな ”

とテトが言った。

“ ないな ”

ジルは即答した。

“ 森の中にはハーヒーはないか。 ”

とテトは諦めたように前にあるフルーツに手を伸ばした。

ジルもそつと口に運んでみる。妖精が持ってきた食事は一口食べる  
たびにエネルギーが沸くような不思議な食べ物だった。  
マナがいっぱい入っているようだった

“ 女神と食事ができるなんてまったく光榮だな ”

テトはヒイアカにつづり声をかけた。

正確にはヒイアカは食事の間も消えたり現れたりを繰り返していて  
何も口にしてはいなかつたけれど、

“ そうね。久しぶりにゆつたりと食事をしたわ ”

と本当にのんびりしたかのよつに言つた。

テトはそれを聞いておかしそうに笑つた。

“ いつもはもつと忙しいんだね ”

“ ふふふ。 そうなのよ。 お姉さまのお氣に入りつて忙しいのよね ”

とヒイアカもおかしそうに言つた。

“ ペレはすぐに怒るしなあ。 ヒイアカも大変だよな ”

“ ふふふ。 でも本当は優しい人よ。 いろいろ人間には誤解されてい  
るけれど。 ”

“ そうだな、 ヒイアカの恋人を殺したとか、 嫉妬に狂つて世界を焼  
き払つたとか散々ないわれようだよな ”

“ ふふふ。 女神は人間に理解されようなんて思わないもの。 お姉さ  
まの力を畏怖して自然を敬うハワイの人たちはある意味賢いわ。 ”

“ そうだな。 バランスを考えずどんどんビルを建てちゃう都会の人  
間よりは賢明なのは確かだ ”

“ 命のバランスもね。 子供を愛さない動物に未来はないわ。  
希望そのものだもの。 命の希望はそこにあるだけで世界を清めるの  
に、 子供が減つてることに無関心なのは人間だけだわ。 ”

動物としての本能まで失つてしまつたのかしら。アースの決断に人間は気づきもせずに滅びるかもしれないわ。

ヒイアカが悲しそうに言つた。人間の鈍感さに心優しい女神や妖精が心を痛めている。

“とにかく出発しよう”

再び歩きだしたが、ジルは頭の中で思い返した女神の言葉に強烈な危機感を持つた。

アースが人間の絶滅を決めたという思い事実。

虐殺するわけでも、災害を起こすわけでもなく、ただ子供がいなくなつていくという現実。

人は気づかないかもしれない。

なんだか最近子供が少ないね、なんて会話に登つたときはすでに手遅れで、

人口の減少は止まらない。子供大きくなつて大人になるつていうこんな基本的なことすら人間はわからず、子供は手もかかるし、お金もかかるし面倒だなんて平氣で言つたりするんだ。テトの言い方を借りれば長い時間で考えることができない人間らしい考え方だ。

ただ黙々と山道を歩いているからだろうか、ジルはなんだかしみじみと色々なことを思った。

“さあ、田の前にことに意識を集中しろ”

テトが言つた。ジルの頭のなかが読めるようだ。

“あれこれ考へてもお前の能力なんてそれほどない。目の前のことを精一杯やる分ぐらいしかない。力を分散するな。今は力ネの水だ。

物事は一つずつに100%のマナを注げば成功するようになります。”

色々と思い悩んでいるのを吹き消すようにテトはジルに何度も言った。

“集中しろ。力ネの水に。そんなに簡単じゃないんだ。全力で行こう。”

珍しくテトも緊張しているようだった。

妖精といえど、無傷では帰れない。そんなに恐ろしい洞窟なのだろうか。

ジルは少し不安になつたが、あわてて思つた、集中しろ、起こつてもいいことを考えるのはよせ。いいイメージにエネルギーを流すんだ。きっと成功する。呪文のよう自分に言い聞かせた。

“あそこが洞窟の入り口なのよ。”

消えていたヒイアカがふつとまた現れると前方の大きな岩盤を指差していった。

入り口などどこにもない、巨大な岩の壁だった。

“入り口。。。”  
ジルがつぶやく。

“どうから入るんでしょうか？”

ヒィアカに訪ねる。

“入り口を強く思い描くと現実になるの。そつから入つて。集中するのよ。”

“意念でドアを作るのか。よーしジル、具体的に思い描け、あのあたりから、ここまでぼっかり入り口が空いている洞窟を想像しろ。”

テト自身もそれを強く思つていていた。田を閉じる。ジルは必死で岩の壁を見ながら入り口を想像した。ここからここまでがぼっかりと。。。

すると、岩壁がぐらんとゆれたように見えて、ぼわーっと黒い入り口が浮かびあがってきた。

“いいぞ、はつきり見えるまでもつと強く想つんだ。”

テトが励ます。

“入り口はある。確実にそこにある。”  
ジルがより強く想つ。

“よし、入ろう。”

テトが目を開けた。ジルも目を開けると、そこにはしっかりと大きな入り口が口を開けていた。

“私はここでねー。頑張って。魔物に勝つのよー。  
ヒイアカは歌うように言って消えた。

“ ありがとう。ヒイアカ。  
”

その姿に手を振るとテトは元気に言った。

“

## 巨人の声

“ よし、行こうジル。 ”

テトに押されるように中に入ると、入り口はまたすっと塞がつた。

出れるかな。と一瞬不安になる。

途端、黒い煙が向こうから襲つてくる。

テトが叫ぶ。

“ ジル、不安を消せ。自分の中の不安を消すんだ。ここではお前の不安が形になつて攻めてくる。それが魔物だ。 ”

ジルは必死に打ち消す。大丈夫。大丈夫。きっと出れる。

すると黒い煙はすっと消えた。

“ 人間にとつては大変な場所なんだ。一瞬たりとも不安を感じるな。感じたら必死に打ち消せ。 ”

死の恐怖が襲つてきたとしてもだ。もし、死の恐怖を感じてそれを不安に想つたら一瞬でやられるぞ。 ”

テトが言つた。

“ 待つてくれ。人間には無理じゃないか。怖いものは怖い。 ”

“ 大丈夫だ。ジル。カイからホオポノポノを教わつただろう？ ”

常に記憶をゼロにしろ。不安は記憶から来る場合が多い。潜在意識をゼロの状態にして自分をクリーニングし続ける。そして、愛のエナジーで満たしておくれんだ。

ジルは必死に繰り替える

I love you I love you

すべて上手くいく。

自分の中をクリーニング。心をゼロの状態に。なんども繰り返すことでだんだんと上手く意識できるようになってくれる。

“大丈夫。ペレが指示した。お前は選ばれたソウル。きっと打ち勝てる”

テトが励ます。妖精の陽気さが少しついでしかつた。

はじめに説明しておいてくれ。

“初めから知っていたらなにか変わらのか？心の準備なんてすると不安の種をまくだけだろ？”

テトがおかしそうにいった。

“やるしかない時のほうが多い。目の前にことに集中しろ。”

テトは声をかけ続ける。実際、テトに話しかけていてもらわないとすぐに逃げ出しあくなるような場所だった。

“魔物を作るのはおまえ自身だ。忘れるな。”

テトはジルを励まし続けた。

“明かりを”

テトは強く念じて通路に明かりを灯した。

“弱いけど仕方ない。俺も色々意識を分散しないといけないから”  
とテトは言った。想い続けることは容易くない。

“大丈夫、絶対に大丈夫”

ジルは声にだして言い続ける。

“絶対に大丈夫。”

“絶対に大丈夫。大丈夫・・・・”

“ そうかな。本当に大丈夫か?”

不気味な声がする。

“惑わされるな。巨人の声だ。”

テトが激を飛ばす。

“お前はここに、閉じ込められ、食べるものも飲むものもなく、誰にも見つからずに死ぬんだ”

あざ笑うような声だ。一瞬、ジルが恐怖を感じる。ここで餓死する自分。

前方から黒い煙がものすごい勢いでジルを包む。

“ テト、 ”

“ ジル、声にだせ。お前は絶対大丈夫だ。 ”

“ 大丈夫だ。ここからカネの水をもらつてラナを呼び戻す。 ”

念じるようにジルが言う。何度も、何度も。

黒い影が薄くなつてジルから離れた。

“ 油断するな。巨人は色々しかけてくる。 ”

テトが言つたようにしばらく行くとまた声がする。

“ 人間の絶滅は決定だ。人間ごとにき覆せるものか。 ”

“ お前が来る場所ではない。お前が何をしたところで、人間は消滅する ”

巨人の声はひつきりなしにジルを責めてくる。  
自分がちつぽけな自分一人が人間を救えるのかと。

“お前、”と、アースが救えるか？たとえ救つて何になる？どうせお前はあと数十年の命。

アースが人間を絶滅させたってお前に関係あるのか？人間がいないほうがアースは幸せかもしれないぞ。”

巨人の声がこだまする。

“耳を貸すな。クリーニングしろ。すぐに心をゼロの状態にするんだ。心の中の隙をついて話しかけてくるんだ。”

“僕の愛するインナーチャイルド。僕が守る。心を愛のエナジーで満たす。今はカネの水のことだけを考える。”

“いいぞ、その調子だ。”

テトが励ます。

巨人がついに一際大きな声で呼びかけた。

“これを成功させて何になる？カネの水を取つてラナが蘇つてもテトは死ぬぞ”

“なんだって？”

思わず大きな声で反応するジル。

“ テトは知っている。命をコントロールする水を取りにきた妖精は  
その命を差し出すことになつていて。  
命の量をコントロールする。それがルールだ。 ”

“ 本当なのか？ ”

ジルの中で驚きと不安が交差する。

“ 耳を貸すな。 ”

テトが言ひ。

“ 本当なのかテト？カネの水を得たらテトは死ぬのか？ ”

“ ああ、引き換えた。命の量はバランスをとらなくてはいけない。 ”

“ 聞いてないぞ、リリーをよみがえらせたって君が死んだら意味ないじやないか。 ”

“ 意味？意味なんて必要か？セイラが望んだことだ。 ”

“ セイラも君が死ぬなんて知らなはずだ。 ”

“ 僕は死など恐れない。家に帰るだけだ。 ”

“ 違う。セイラは半分人間だ。そんな風に考えられないよ ”

ジルが必死に言ひ。黒い煙が前方からものすごい勢いでジルに向かつてくる。

“ 気にするなジル。集中するんだ。命を差し出さないとカネの水はもらえない。

それがルールだ。僕はまた生まられてくる。いいか、カネの水をもつたら急いで帰れ。あとはヒイアカが教えてくれる”

テトは言った。

“ 嫌だ。テトを失つて帰るなんて絶対に嫌だ。

”

ジルはさつぱりといった。

“セイラが悲しむ。”

テトの目に初めて悲しげな影が浮かんだ。

“セイラは悲しむか?”

妖精のテトに初めて迷いが浮かんだ。

“ああ、悲しむ。君は帰らなくてはいけない。”

ジルは言つた。そしてさつぱりと思つた。不思議と迷いや恐怖はなかつた。

“僕の命を使おう。

家に帰るだけなんだろう?

そしたら蘇らせなくともラナに会える。

君の恋人はまだこの世にいるんだ。テトは残つてセイラの側にいなくてはいけない”

ジルは覚悟を決めたように大きく息をした。

ジルの体が大きくなつたようにテトには見えた。

ジルの体の中からじわりじわりと金色の光が滲み出でくる。やがて金色の光はジルの体中を包み込み大きく輝いた。

“僕の命をここに捧げる。もって行くがいい。力ネの水をテトのもとへ”

強く、強く念じる。やがてジルの金色に包まれた体から白い光が浮かび上がり、全体を包むように光の強さを増していく。テトも目を開けてられないうらいのまぶしい光が洞窟を明るく照らす。

どんどん光は大きくなる。太陽を直視したかのような大きな光だ。

“ああ、ペレが言つていたのはこのエネルギーか。

ジルがピュアソウルに変わつていく。

その光はテトが持つっていたピュアソウルの結晶にどんどん吸い込まれていく。

テトの手から離れたピュアソウルの結晶は宙に浮かびくるくる周りながら一つになる。

ジルの体から放たれた光を吸ってどんどん大きくなる。

やがて洞窟いっぱいくらいの球状になつたピュアソウルの集合体はまるで小さな太陽のように光を吸いついて中に浮かんだ。

“ピュアソウルに変化するときのエネルギーってことか。”

テトがつぶやいた。アースを癒すピュアソウルエナジー体。

ぼわんぼわんと浮かびながら漂つ光の玉はゅつたりと回転していた。

なんて幻想的な光景なんだね。”

洞窟全体がピュアソウルのエナジーで清められたように清潔しい空気になつている。

“僕の命と引き換えにカネの水を”

ジルが決意したよつにもう一度言つたとき、

周りの洞窟が秒速で後ろにわーっと流れた。瞬間移動したよつにテトとジルは巨人の前にいた。

どこから現れたのかと思うほど洞窟に不具合大きさの男が背中を丸

めるように背に腰掛けている。

座っていないと動けないぐらい頭は天井すれすれだ。あごはしゃく  
れ、髪はぼさぼさで、じつじつして手をさすりながら低い声でテト  
とジルに話しかけた。

“カネの水が欲しいのか？”

のそーっとした鈍い声は長い間誰とも話していなかつたようだつた。  
。巨人は退屈そうにそいつた。何万年もここにいたのだろうか。  
日の光になれないのか、ピュアソウルのエナジー体をまぶしそ  
うに見ている。

“神を連れてきたのか？”

巨人がつぶやいた。

“いや、ピュアソウルだ。ヒィア力に導かれてきた。”

“なぜ、カネの水がいるんだ。女神に案内させてまで。”

暗闇の中に慣れていた巨人が自分のいる洞窟が明るく浮かび上がつ  
ているのでものめずらしそうにあたりを見回している。

“こんな来客は久しぶりだ。ここは水以外なんにもないんだ。退屈だ。”

巨人はテトとジルを歓迎しているように見えた。

それほど広くない洞窟は巨人がそこに座れるだけのスペースをやつと確保したように四面を厚い岩盤に囲まれ、牢屋のようだつた。陶器の皿のような大木を切り抜いたような器が中央にあつて、そこに岩盤をつたつて水がぽた、ぽたつと落ちている。どうやらこれがカネの水らしい。

“カネの水を少しもらいにきた。蘇らせたい人がいるんだ”

テトが言った。

“妖精が生に執着するのか？”

“いや、ただ愛する人が望むから。”

テトが答えた。

“愛か、ロマンだな。”

ふふつと巨人が笑つたように見えた。

“人間に恋したのか？妖精が”

巨人はおかしそうに言った。

“ 素敵な子なんだ。  
”

とテトが答えた。

“ お前もか？  
”

巨人が突然ジルをぎろつとにらんでいった。

“ そうです。妹のラナを蘇らせたいのです。  
”

“ 自分の意思で帰ったピュアソウルをまた呼び出すのか？  
”

巨人は不思議そうに言った。洞窟の中についても色々なことがわかるらしい。

“ そう思つてここまできました。けれど、命を差し出さなくてはもらえないと分かつた。  
ぼくは僕の命を使います。僕がラナの方へいくことにしました。テトは恋人の側にいなくてはいけません。  
”

ジルは巨人をまっすぐ見据えていった。

“ ジル。  
”

テトはジルの進化をまぶしそうに見つめる。見事なピュアソウルに変身したジルは神々しいほどだった。

巨人はしばらく考えているようだつた。

“いいさ。少しごらい分けてやる。 ”

巨人はひょうたんのような形の水筒に取り出した。

巨人の横にはぽたん、ぽたんと浴場から水滴が落ちてたまつた力ネの水を、

巨人は自分の手のひらをジョウロのようつに泉の中に沈め、器用にひょうたんの中に水を入れると、栓をして差し出した。

“ここまで誰かが来たのは久しぶりだ。僕も退屈しのぎになつたよ。

”

ジルが拍子抜けしてそれを受け取る。

“僕の命はいらないのか？”

“そうだな。本当はそういうルールなんだけど、ピュアソウルに変化するところなんてめつたに見れないし、

僕が光を見たのは数百年ぶりだ。あのエナジー体はものすごくきれいだし、

久しぶりに洞窟が明るくなつて楽しかった。退屈しのぎになつたよ。

“といつて巨人はフォーフォフオフオと笑つた。

久しぶりに楽しかったから、特別にやるよ。巨人はそういった。

“ペレも見逃してくれると思つよ。

”

ジルとテトは顔を見合せた。

“なんだよ、もしかしてペレが作ったルールかよ。”  
テトが吹き出した。

“ そうさ、ペレはたくさんのルールを作った。それで命のバランス  
が保たれている。  
でもまあ、一つぐらい狂つてもペレも何も言わないさ。どうせみん  
ないずれ死ぬ。少しずれただけだ。 ”

巨人はおかしそうに言つて、もつ一度フオーッフオッフオフオと笑  
つた。

ジルは神妙な面持ちでカネの水を受け取つた。

“ まつたくペレも人騒がせだな。 ”

とテトは言つてにやつと笑つた。

“ ジルがピュアソウルになるための仕掛けか。 ”

神々はとことん人間に優しい。いつでも試練とともにチャンスを用  
意している。

なんのことだかわからないがジルは自分が成長しているのを感じた  
。魂が軽く、わくわくする希望に満ちている。  
表にでるとジルはつぶやいた。

“ はあ、世界はこんなに美しかったかな。 ”

光の美しさ、遠くに広がる青い海。手前を覆いつくす濃いグリーン。

“ そりゃ、気づけば世界はいつも美しい。 ”

人間はないものねだりをしながら、アレが足りない、コレが足りないつていつも文句ばかりいうけど、手に入れているものを見つめなおせばそのままにため息がでるぞ。

ないものより持っているものを見つめて生きれば幸せはそこにある。天国も地獄も、心のありようだからな。自分が今手に入れている幸せを見つめれば、

そこが天国になる。気づけば、毎朝空が青いというだけで感動して泣けてくるぞ。 ”

テトが言った。そうだな。まったく外の世界は美しかった。

“ 僕は、今まで何を見てきたのかな。側にあるものは近すぎて見えないのかな。 ”

ジルは心から思った。今あるものに感謝して生きればその瞬間そこが天国になる。

“ さあ、このピュアソウルのエナジー体をアースに奉納しにいかなくちゃ。 ”

テトが言った。

“ジル、お前と一緒に歩いて俺は嬉しいよ。お前いやつだな”

“ははは。コーヒーくれるからだろ?”

“ まずはペレのもと。 ”

お前の寿命が少し縮むけど、

まあ、

さつき失くしていたかも知れない命だ、

気にするな。我慢してくれ。時間がない ”

テトはそういうて、意識を集中しだした。  
体がばらばらになつてまたくつついたような不思議な感覚がジルを  
襲う。

“ 人間に2度もコレを使うのは初めてだ。大丈夫か？ ”

テトが心配そうにジルに言った。

“ 大丈夫だ。くらくらするけれど。 ”

ジルは少し頭を振つて、段々しつかりしてきた意識を取り戻した。  
“ 何年短くなつたのかな？ ”  
ジルがテトに訪ねた。

“ 細かいことは気にするな。 ”

人間は100%死ぬ。  
”

テトは取り合わない。

『氣づくと見覚えのあるペレの洞窟だった。

“ペレ、テトとジルが来たよ。”

ゼーっと扉が開いてペレが現れた。

ペレが正装をしている。

輝く赤のドレス頭にはマイレのハクをかぶっている。

きれいに整えられた黒髪を後ろにたらし、静かに前に歩み出て来た。

ラナ。

一瞬ラナの姿とオーバーラップする。

“アースにピュアソウルを奉納する。”

ペレが黙まつたように言った。どうやら莊厳な儀式が始まるらしい。

“アースの決定を覆すお願ひだ。何が起きるかは分からぬ。”

女神ペレでも力が及ばないことがあるのだろうか。

ジルとテトにも緊張が走る。

“ ヒイアカ、ここに来て、この一人を清めよ。 ”

ヒイアカが美しい白のドレスで現れた。姉と同じくマイレのハクをつけている。

“ はい、お姉さま。 ”

そういうて、テトとジルに祈りを唱えながら聖水をかけた。自分のマイレのハクから一枚お葉を抜くとふつと息を吹きかけてレイに替えた。

それをジルの首から提げる。テトには小さなハクを作つて頭にかぶせた。

“ じづらへきてここに座りなさい。まずは命をつかさどる偉大な神、カネを呼びアースにこのヒナジーを運んでもらつわ ”

ペレがそういうて、ジルとテトを自分の後ろに控えさせた。そしてピュアソウルのヒナジー体を自分の前に置くと祈りだした。

ハワイ語のチャントがしばらく続いた。

“ 偉大な創造神、カネ。私たちの望みを聞き届けたまえ。  
ピュアソウルをアースに捧げます。アースに奉納してくださいます  
よつ。 ”

ペレはハワイ語のチャントを続ける。

ヒイアカもペレに合わせて詠唱する。女神たちのチャントが洞窟に響き渡るとぞぞぞーーと風が吹いてジルは鳥肌がたちっぱなしだ。

やがて洞窟中に響き渡る太い男の声がした。ジルは心臓を掴まれた  
ような圧迫感を感じる

“ ヒイアカ、カネが来た。ジルにガードを ”

ペレの支持でヒイアカがジルの体のまわりに細い指で何かを描いた。  
ぼわんと透明なエナジーがジルとテトの体を包んだ。  
それとともにジルの心臓の鼓動が少し収まってきた。人間がいる場  
所じやないんだ。ジルは痛感していた。

女神と妖精、偉大な神の聖域なんだ。ジルに不思議と恐れはなかっ  
た。洞窟が愛で満たされているからだろうか。

“ ペレ、愛しい私の女神。私を呼び出したのはなんのためか？ ”

姿は見えないが太い男の声がわんわんと洞窟にこだまする。

“ 偉大な神、カネ。このピュアソウルのエナジーをアースへ。  
命の決定を覆すお願ひです。どうかお聞き届けくださいますよう。 ”

ペレが深々と頭をたれる。ペレの言葉を聞いた途端、

“ 命の決定を覆す ”

太い男の声が大きくなり、洞窟に突風が吹いた。

“ ペレ、美しい私の女神。君のたつての願いだというのか？  
私はなんど人間に警告しただろうか。あの愛すべきおろかな動物に。 ”

“お怒りはしまつとも。

”

アースの決定は絶対です。  
けれどこのピュアソウルのエナジーをもつてなにぞ怒りを静めた  
まえ。アースに何とぞお届けください”

ペレと、ヒイアカが再びチャントを唱えだす。

髪が巻き上がる。ヒイアカにもふだんのおつとりした表情が消え、  
鬼気迫る表情でチャントを唱えている。ペレの目はぎらりと光、一  
歩も引かない強い意志を感じられる。

強風はますます強くなりぐるぐると渦を巻き始めた。

ペレは一步も引かない。チャントの声は益々凜と神々しく洞窟に響  
いた。ジルとテトはヒイアカのガードのなかでことを見守り続ける

“怒りを静めたまえ。偉大な創造神、力ネ。”

ペレとヒイアカの祈りに負けたのが、風が次第に弱まってきた。ペ  
レの神もゆつたりと後ろになびく。

ヒイアカの表情がふだんのおつとりした眼差しに戻つていぐ。ペレ  
の目は依然として炎のようにぎらりと輝き、  
力ネさえも怖気づきそうなほど意思の力に満ちていた。

“ペレ、私の美しい女神。君の願いを聞き入れないものがいようか。  
願いを聞き届けよう。私がアースに奉納する”

再び野太い力ネの声が響くとチャントのリズムに合わせてピュアソ

ウルのエナジー体の下の大地が揺れ始め、

真つ二つに分かれると深い深い崖壁の谷ができ始めた。その奥深くに真つ赤な光を放ちながらぐるぐる回る光が渦まいている。

深く、深く、奈落のそこにように深い位置で燃えるような赤で渦巻いている強大な光の渦。

ジルの位置からはとても見えなかつたが、その存在はひしひしと感じた。

“アースだ。”

テトがジルに言つた。

“俺たちが直視できる相手ではない。遠く離れていてもこのエネルギーだ。”

テトにも緊張が走る。

“力ネによりアースに奉納を”

ペレは凛とした声が響く。

ペレとて直接は奉納できない相手なのだろうか。

カネの力でピュアソウルは谷の上に運ばれ、そこからショーンとものすごい勢いで谷底に落ちた。

ペレはアースにも呼びかける。

“アース、偉大なアース。あなたの怒り、悲しみはもつともです。けれどささやかな人間の命にチャンスをくださいますよう。

寛大なあなた様ならば、お分かりのはず。妖精たちが人間を愛しています。

私もあなたも人間に慈悲を与えてきたはず。どうかこのピュアソウルを受け取り、怒りを静めてくださいますように。女神ペレのお願いをお聞き届けください”

地響きのような低い声であたり一面が震えた。

“いいえ、あなたは絶対です。けれど、もう少しだけ人間に時間をあげて欲しいのです。

彼らを愛する妖精が、人間の中の貴重なピュアソウルが身をもつて示した愛の形。

それをお受け取りになれば慈悲深いあなたのこと。彼らの想いはお分かりのはず。”

アースにピュアソウルのエナジーが到達したのだろうか。大地にドーンと衝撃が走った。アースが一度鼓動をしたようだつた。

“ははは。はははは。”

地響きとも笑い声ともとれる不思議な声が響きわたつた。ピュアソウルのエナジーで一瞬アースが暖まる。

次第にペレの目に安堵の色が浮かぶ。

“アースが喜んで笑つたわ”

ヒイアカもほつとしたように頬を緩めた。

“私の偉大なアースにキスを”

ペレは深々とひざまずつと大地にそつと口付けをした。

“アース。私はいつもあなたと共にあります。”

ペレが頭をたれる。避けた岩盤はききーっと音を立てて閉じた。女神ペレはゆっくりと立ち上がりとジルとテトに向かつて歩いてきた。

“よかつたわね。テト。ジル。あなたたちの努力が報われて。”

ジルは悟った。この偉大な女神は自分より強大な力の前にも決して屈せずいつも人間を守ってきたのだと。意思につよい輝く瞳は人間を守ろうという強い思いの表れなのだと。絶対的な神々を前に女神一人で立ち向かつてきたのだ。

“これで、人間は助かつたのか?”

テトがペレに聞く。

“そうね、多分、絶滅実行が一世紀ぐらい伸びたと想うわ。”

“一世紀。”

“完全に助かつたわけじゃないのか。”

“まあ、いいじゃない。ちょっと時間ができたんだし。”

“もしかして、これってアースにとつてはホットミルクぐらいの効果なのかな？”

テトが言った。

“これってちょくちょく、アースにあげなくちゃいけない奉納なんか？”

“そうよ。だから、またジルと張り切つてピュアソウル探してきなさい。”

ペレがこともなげに言った。

“アースの怒りを静めるためには暖かい飲み物が必要だわ。どうせ人間はちょくちょくアースを苛立たせるんだし、そのときまた奉納して時間を稼ぐの。でもね、いい加減人間も気づかないといアースはもう許してくれなくなるわ。きっと。”

沈黙が続く。

“そのときは、そのときよね。”

ヒイアカがあつとりと言った。

この恐ろしい光景をなんともなかつたよつこなす一人の女神。

ジルは膝の震えがとまらなかつた。

“ジル、引き続き私の命を受けてテトとピュアソウルの回収をしなさい。

女神の命令は絶対よ。  
ペレが冗談めかしていつ。

“はい。”

ジルが素直にうなずく。

“ そうそう、特別にカネの水使っていいから。  
ラナを呼び戻しなさい。そして手伝わせなさい。

今度はラナを連れてきてここでフラを奉納させなさい。

それから、テト、リリーを呼び戻すならリアンと同じ大きさにして  
二人を一緒に戻しなさい。

セイラといるものいけど仕事を忘れないように。命を捧げずにカ  
ネの水をわけるのは今回が最後よ。わかつたわね。”

“ はい、慈悲深い女神様。”

テトが喜んでいった。

“ 必ず仕事もします。ありがとうございます。”

“ そういうときだけ、かしこまつて挨拶するのね。  
まったくふざけた妖精だわ。忘れるんじゃないわよ。  
あなたの命、本当はカネの水と引き換えたのだから。

私はいつでも取りにいくわ。サボるんじゃないわよ。

釘をさしてギロッとした。ジルはすぐみあがつたが、テトはくすぐす笑つた。

“わかつてゐるよ。美しいティーバ。僕はあなたの望みどおりの仕事をするわ。”

“わかつたらいいわ。ヒィアカ、世界を見回つて私に報告を。私は少し休むわ。”

といつて後ろ手に手を振ると腰を振りながらセクシーに背の奥へ消えていく。見送りながらテトが言つた。

“ではまた女神様。”

神々の前では人間なんて本当に小さな生き物なんだな。ジルはスケールの大きさに恐怖と尊敬の念を抱きながらペレの洞窟を後にした。ピュアソウルのエナジー体がホットミルク程度とは。

## 最終章（前書き）

序文と希望

テトとジルはカネの水を持つてカイルアの海へ戻った。

浜辺に一人神妙に立つ。

“ペレはリリーとリアンを同じ大きさで呼び戻せつていつたよな。

”

“ああ、そう言ってたよな。

”

“どっちかな？人間かな？妖精かな？

”

“さあ、どっちだろうな、でも妖精は悩みがないんだろ？  
そしたら一人とも妖精の方が幸せなんじゃないか？セイラとも大き  
さがあうし。君たちは家族になれるよ。

”

“そつか、選んでいいのかな。妖精で戻そうかな。

”

テトがぶつぶつ言つている。

“よし、まとめて3人分だ。ヒイアカ、そこにいるのかい？ヒイア  
カ？”

テトが呼びかけるとヒイアカが海の上に浮いた形で現れた。

“テト、呼び戻すのね。”  
おつとりといつ。

“ヒイアカ、お願ひします。リアンとリリーを妖精に、そしてラナ

を元の姿に”

そうじつて、テトがカネの水をそつと海水に混ぜた。

ヒイアカは、うなずいて、混ざつたあたりの海水にふーっと息をかけた。

波の流れに逆らつてその部分は生き物のようにぐるぐると回りだすと、

すーっと上持ち上がつて、リアンとリリーが美しい妖精の姿で飛び出した。

リアンは若々しい青年の姿に戻つてはいる。やがて大きなうねりがすーっと上に上がると、ラナが現れた。

“ラナ、ラナ！”

駆け寄つて抱きしめるジル。

“ジル、ジル、やつぱりまた会えたわね”

嬉しそうに抱き合つ二人。

“リリー、リアン、”

テトも嬉しそうに二人の妖精に駆け寄る。

“俺が妖精になれるなんて、”

リアンはぐるぐる周りながら嬉しそうに自分の羽や姿を確認した。

“少しハンサムに若返つたかな。”

リアンが嬉しそうにいった。人間だったときのリアンに浮かんでいた苦悩の表情はなく晴れ晴れとしている。

“ピュアソウル、ついに人間卒業だな”

テトがからかうように言った。  
そしてリリー。

“リアン、テト”

嬉しそうなリリー、セイラに良く似た淡い緑の瞳のリリー。

“君の声、戻ったんだね？ 悪魔から取り戻したんだ。”

テトが飛び回って喜びを表現する。

“リリー、君の声が聞こえる。僕の声も聞こえる？”

なんてすばらしいんだろう。

“セイラに会いに行こう。”

テトが嬉しそうに言つた。

“セイラ、セイラ”

テトが、リアンが人間だった頃の家に近づくと嬉しそうに声をあげた。

“セイラ、どこにいるのセイラ？”

リリーもリアンも一緒に呼びかける。

大きなモンステラの葉の影からセイラがひょこつと顔をだした。

“セイラ。”

テトの羽の輝きが増す。

“テトなの？”

セイラが飛び出してきた。淡い緑色の髪がふわっと揺れた。

二人の妖精が抱き合いながらクルクルと回るとあたり一面に光の粉が降り注ぐ。

“なんてきれいなのかしら。”

ラナがため息をつくよついにいった。

“セイラ、約束どおり、カネの水で命を戻したよ”

テトが胸を張つていった。セイラの顔が喜びで満ちる。

“マリー、リアンーー！”

セイラがリリーとリアンに気づいて歓声を上げる。

“リアン、妖精になったの？”

小さくなつたリアンを珍しそうに見つめるセイラ。そして、リリーの嬉しそうな顔に飛びついた。

“ マリー、会いたかつたわ。マリー ”

“ セイラ、マイスウェート。戻ってきたわ。 ”

セイラの大きな瞳がますます大きく輝いた。

“ マリー、話せるのね。私の声が聞こえるのね？ ”

妖精たちの歓喜の再会はキラキラと光の粉をふりまきながらじぱり継続いた。

光の粉がジルとラナの頭上でキラキラと舞い踊る。

美しい光を見つめるラナをジルは嬉しそうに見つめた。

“ ラナ、また会えたね。 ”

ラナの肩を抱きよせた。大切な人が側にいる幸せに満る。

“ ええ、ジル。だつて私たち同じだもの。 ”

欠けているものは何もない。そう思えるような完璧な幸せだった。

“ ラナ、僕たちは役割があつてまだ生かされている。 ”

一緒に神々の役割を果たそう。 ”

ラナはジルを見ると深くうなずいた。

“ ジル、 ラナ、 一緒に祝おう。 歓喜の夜だ。 ”

テトの嬉しそうな声にジルもラナも妖精たちのもとへ走った。

“ テト、 でも。 まだまだピュアソウル集めないといけないんだよね”  
ジルが女神に言われた使命を噛締めるように言った。

“ 大丈夫。 まだ一世紀ある。 ”

テトがおどけたように言った。

“ 喜ぶときは100%ただ喜べ。 先のことはそれからだ。 ”  
ジルは妖精とともにいる喜びを噛締めた。

“ 世界はなんて素敵なんだ。 僕は生きているだけで涙が出しそうなほど感動しているよ”

ジルが世界を抱きしめるように両手を広げる。

テトはその様子を嬉しそうに見つめた。

“ やつぱりさ、 オレは人間が好きだな。 ”

“人間の希望ほど上手いものはない”

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0992u/>

---

ハワイアンソウル

2011年10月9日07時33分発行